

平成26年度文部科学省委託事業
【コーチング・イノベーション推進事業】

平成26年度

コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成事業

報告書

平成27年3月
公益財団法人日本体育協会

はじめに

本委託事業のきっかけとなった「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)」の報告書には、『新しい時代にふさわしいコーチングとは、「競技者やスポーツそのものの未来に責任を負う社会的な活動」であることを常に意識して行われるもの』とあります。

競技者の未来に責任を負うとは、その場のスポーツ活動はもとより、その先の競技者の進路、生活全体を見据えて指導するということです。

「スポーツそのものの未来に責任を負う」とは、少子高齢化が進み、スポーツ以外にも楽しみが増えている中、この先もスポーツが魅力的であり続けるように指導すること自体がスポーツの意義と価値を高め、未来に責任を負うことにつながるということです。

次に記されている「社会的な活動」とは、社会通念にのっとり、社会から認められる活動ということです。そのためには社会に開かれた活動であることが求められます。

一国一城の主といわれるオーケストラの指揮者も野球の監督も、今や演奏者や競技者の周辺にいて、支援してくれる人々(アントラージュ)との連携なくしては功を成しません。

しかしながら、そのように社会に開かれていることは、必要条件ではありますが、十分条件ではありません。優れた指導の内容や方法が十分であることが大切です。

本委託事業においては、これまでの「グッドプレーヤー像」を再確認しつつ、今後、我が国において育成すべき「グッドプレーヤー像」について検討し、そのようなプレーヤーを育成する「グッドコーチ像」を描き、コーチに求められる資質能力を明確化しようとしてきました。

これまでの良き師を振り返りつつ、新しい時代にふさわしい像を求めているところに、これまでの指導がすべて問題であると言っているわけではない証左があります。

ここで求められる資質能力とは、モデルとなるコアなものです。

したがって、当然とも思える内容です。しかしながら、それらを明確化し、カリキュラム化することにより、スポーツ指導者の存在や地位を確かなものにしていくことが重要です。

本年度の委託事業では、コーチが育成過程において確実に習得すべき思考・態度・行動・知識・技能を明らかにし「モデル・コア・カリキュラム」を作成することとし、その骨子を取りまとめました。

この「モデル・コア・カリキュラム」については、今後大学教育やスポーツ指導者資格制度への導入を目指すとともに、現在や未来の全てのコーチのが学ぶことができるよう普及・啓発を図ることとしています。

このことにより、2020年オリンピック・パラリンピックを迎える我が国において、新しい時代にふさわしいコーチングを広めることとしています。

モデル・コア・カリキュラム作成専門研究委員会
座長 平野裕一

目次

I. コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム作成にあたって	4
1. 作成の背景	4
2. モデル・コア・カリキュラム作成の意義・理由	6
3. 事業の内容・実施体制	6
1) 事業の内容	6
2) 実施体制	7
4. モデル・コア・カリキュラム作成の基本理念(基本方針、考え方、構成内容、作成後の展開)	7
1) 基本方針	7
2) 考え方	8
3) 構成内容	8
4) 作成後の展開	8
5. モデル・コア・カリキュラム作成スケジュール	8
1) フェーズ1(平成26年度)	8
2) フェーズ2(平成27年度予定)	8
3) フェーズ3(平成28年度予定)	8
II. 検討内容の報告	9
1. 検討の進め方	9
1) 具体的な検討内容とスケジュール	9
2) ワーキングにおける検討の手順	11
2. 仮説設定	11
3. 検討内容	13
1) グッドプレーヤー像、グッドコーチ像の検証(アンケート調査、ヒアリング会)	13
2) コーチング現場における課題把握(視察及びインタビュー)	57
3) わが国の体育系大学・学部における教育内容の確認	81
4) 諸外国におけるコーチ教育、コーチング現場の事例研究(ICCE 等)	103
4. 成果	111
1) 具体的検討事項のまとめ	111
2) 各検討から導き出された成果	117
3) モデル・コア・カリキュラム作成後の導入策	121
III. 平成26年度の成果を踏まえた今後のスケジュール	123
おわりに	125
参考	126
1. コーチング・イノベーション推進事業 モデル・コア・カリキュラム作成事業委員名簿	126
2. 会議開催経過(日程、出席者等)	127

I. コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム作成にあたって

1. 作成の背景

平成 25 年 2 月 5 日、スポーツの指導において暴力を行使する事案が明らかになったことを受け、下村博文文部科学大臣は、「スポーツ指導における暴力根絶へ向けて」と題するメッセージを発表した。

メッセージは、この事態を「日本スポーツ史上最大の危機」と捉え「スポーツ指導から暴力を一掃するという基本原則に立ち戻り、スポーツ界を挙げて取り組む必要がある」ことを強調。指導者がコーチング技術やスポーツ医・科学に立脚して後進をしっかり指導できる能力を身に付けられるよう養成・研修の在り方を改善するとともにまた、「新しい時代にふさわしいスポーツの指導法」が確立されるよう、全力を尽くすと表明した。

スポーツ指導における暴力根絶へ向けて

～文部科学大臣メッセージ～

日本のスポーツの良さは、チームワークであり、自他共栄の心です。どんな時にも切磋琢磨(せっさたくま)し合いながらお互いを尊重して助け合い、励まし合いつつ、共に高め合うのがその姿です。

しかし、今般、柔道女子日本代表チームをはじめ、スポーツ指導において暴力を行使する事案が明るみに出ました。

こうしたことはあってはならないことであり、大変遺憾であります。

私は、今般の事態を日本のスポーツ史上最大の危機と捉えています。選手一人たりとも見捨てることなく、全ての選手がその志を全うすることができる環境をスポーツ界の皆様とともに作るこそが焦眉の急と考え、国民の皆様、全てのスポーツ関係者・選手に向けてメッセージを送ります。

そもそもスポーツは、スポーツ基本法にうたわれているとおり、心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神の涵養(かんよう)などのために行われるものであり、世界共通の人類の文化であって、暴力とは相いれません。

オリンピック憲章においても、スポーツにおけるいかなる形の暴力も否定されており、コーチや選手によるフェアプレーと非暴力の精神の尊重が定められています。

私は、こうした問題が選手の立場に立って速やかに解決できるよう、「スポーツ指導から暴力を一掃する」という基本原則に立ち戻り、スポーツ界を挙げて取り組む必要があると考えます。

このため、柔道のみならず他の競技種目も含めて実態を調査し、スポーツ指導の名の下に暴力を見過ごしてこなかったか、改めて現実を直視すべきです。

その上で、スポーツ指導者に対し暴力根絶の指導を徹底するとともに、スポーツ指導者が暴力によるのではなく、コーチング技術やスポーツ医・科学に立脚して後進をしっかり指導できる能力を体得していくために、スポーツ指導者の養成・研修の在り方を改善することが大切だと考えます。

また、各競技団体に、相談・通報窓口の設置等ガバナンス・コンプライアンスの確立を進めることも求められます。

さらに、問題が生じたときでも、選手が練習に専念して自己の能力を最大限伸ばす環境を確保できるよう、中立的な第三者が相談を受けることのできる仕組みを整えることが重要です。

このような様々な仕組みをスポーツ界一丸となって早急に整えることで、「新しい時代にふさわしいスポーツの指導演法」が確立されるよう、全力を尽くす所存です。

こうした改革と併せて、スポーツ指導者一人一人が、その大切な使命と重責を改めて十分自覚し、率先してスポーツにおける暴力の根絶に努めていただきたいと思います。

日本人らしい信頼と絆(きずな)で結ばれる真の『強いスポーツ』をつくるために、いかなる形の暴力も許さないという覚悟の下、国民の皆様、スポーツに関わる全ての皆様一人一人の御協力をお願い申し上げます。

平成 25 年 2 月 5 日

文部科学大臣
下村 博文

同年4月、文部科学副大臣(スポーツ担当)の下に「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)」が設置され、「新しい時代にふさわしいスポーツの指導演法」の在り方について報告書を取りまとめ、「新しい時代にふさわしいコーチング」を「競技者やスポーツそのものの未来に責任を負う社会的な活動」であるとし、今後取り組むべき具体的な課題を下記のように提言した。

1. コーチングの改善方策

- (1) コーチングに「社会の目」やグローバルな動向を反映させる仕組み
- (2) 最適なコーチングを行うために必要な知識・技能の明確化とその活用を図るための方策
- (3) 子供の発達段階に応じ長期的な視野をもったコーチングの実現方策
- (4) コーチング環境のオープン化

2. コーチの資質能力向上方策

- (1) コーチの質の保証を図るためのスキーム
- (2) コーチの継続的かつ競技横断的な学習のための方法・体制の開発・整備
- (3) コーチの活用のための方策
- (4) スポーツにおけるグローバル人材の輩出

この提言は、スポーツ活動において行われてきた暴力的行為を根絶することがきっかけとはなっているが、少子高齢化や高度情報化、さらにはグローバル化など、我が国を取り巻く社会の変化の中で、次代を担う子どもたちがスポーツを楽しみ、生涯にわたってスポーツを身近に親しみ継続すること、国際相互理解を促進すること、世界で活躍する競技者を育成することなど、スポーツの価値・健全性の向上、国家戦略としてのスポーツ立国の実現が目指されている。

この度、ここで提言された具体的な課題のうち、「1.(2)最適なコーチングを行うために必要な知識・技能の明確化とその活用を図るための方策」を検討するため、文部科学省委託事業平成 26 年度コーチング・イノベーション推進事業「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム作成」を公益財団法人日本体育協会が受託することとなった。

2.モデル・コア・カリキュラム作成の意義・理由

スポーツは、社会の中で行われる活動であり、社会の規範を守り、社会における価値を踏まえたうえで、スポーツの価値そのものを高めていかなければならない。

スポーツ基本法においては「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、楽しみ、支える活動に参画できる機会が確保されなければならない」とされている。

このことの実現のためには、スポーツの意義や価値を正しく理解し、発達段階や技能レベルに応じた最適なコーチングを行うことのできるコーチの存在が不可欠である。

我が国におけるスポーツコーチの養成は、日本体育協会による「スポーツ指導者育成事業」や体育大学や体育系の学部を有する大学(以下、体育系大学等という)によって行われており、コーチを目指す人が適切な指導能力を身につけるためのカリキュラムが用意されている。

しかしながら、実際のスポーツ指導活動現場においては、「コーチがコーチングに必要な知識や技能を十分に習得していない」「競技横断的な知識や技能が十分に学ばれていない」「知識や技能を学んでも、自らが競技者として経験してきたコーチングの在り方に影響され、新しく得た知識や技能が十分に活用されていない場合もある」との指摘(「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)」報告書)もあり、改めて、コーチに求められる基本的資質能力(思考・態度・行動・知識・技能)とそれらを身につけるために必要なカリキュラムを明確化し、スポーツ界全体で共有化を図ることが期待されている。

3.事業の内容・実施体制

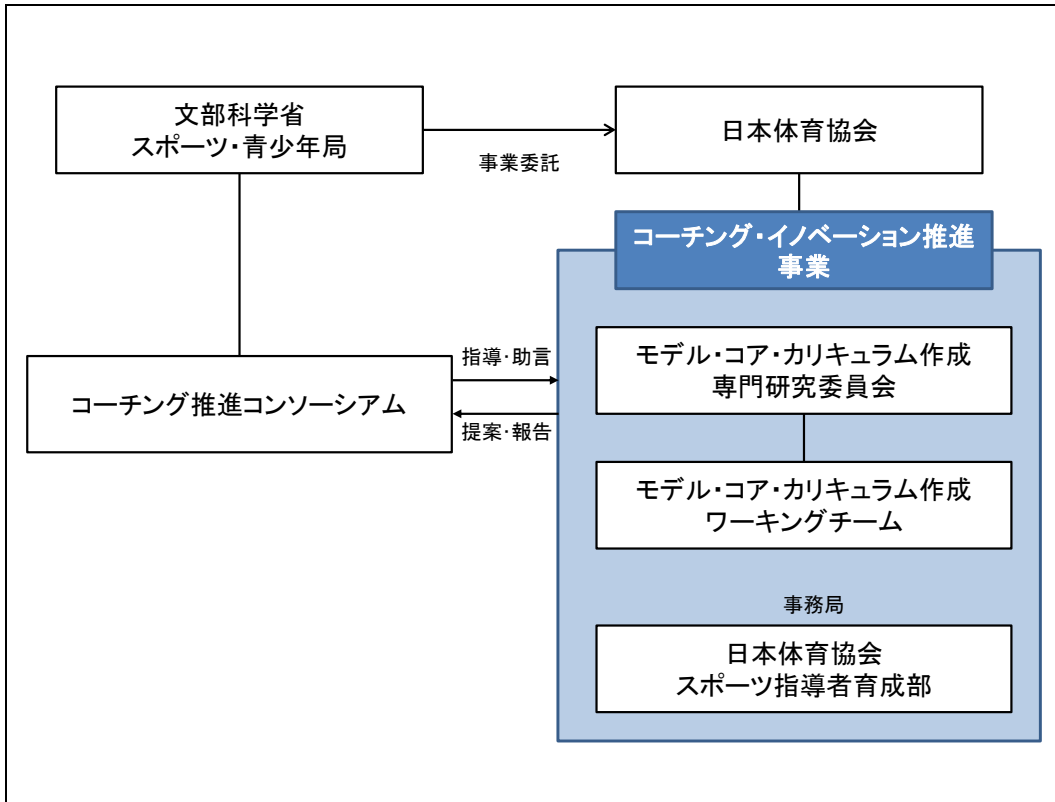
1)事業の内容

新しい時代にふさわしいコーチングとは「競技者やスポーツそのものの未来に責任を負う社会的な活動」であるため、コーチがコーチングに必要な知識や技能を身につけることは当然のことであるが、スポーツの意義と価値やスポーツ指導者としての役割を正しく理解していなければ誤った指導になりかねないこと、さらには、知識・技能が身につけていたとしても、その知識・技能を指導対象者のニーズやレベルに応じて使い分けたり、わかりやすい言葉にして伝えることができなければならぬ。

本事業は、スポーツ指導者に求められる基本的資質(思考・態度・行動・知識・技能)を明らかにし、それをコーチが育成過程において確実に習得することができるよう、全国の体育系大学の関係者等からなる専門研究委員会及びコーチ育成に関する優れた知見を有する研究者等によるワーキングチームを設置し、我が国の大学におけるコーチ育成カリキュラムの現状と課題の実態把握・分析、モデル・コア・カリキュラムの位置づけや体系の検討等を行い、「モデル・コア・カリキュラム」の作成及び実証につなげるものである。

2)実施体制

モデル・コア・カリキュラム作成にあたっては、次の体制で検討を進めていくこととなった。



①モデル・コア・カリキュラム作成専門研究委員会(委員名簿 P. 126)

文部科学省に設置される「コーチング推進コンソーシアム」との連携のもと、大学におけるコーチ育成過程において習得すべきカリキュラム及び到達目標について検討するため、全国の体育・スポーツ系大学・学部の学長学部長や現役コーチ等により構成するモデル・コア・カリキュラム作成専門研究委員会(以下、「委員会」という)を設置する。

②モデル・コア・カリキュラム作成ワーキングチーム(委員名簿 P.126)

モデル・コア・カリキュラム作成専門研究委員会の方針に基づき、コーチに求められる資質(思考・態度・行動・知識・技能)を明らかにし、そのために必要なカリキュラム及び到達目標について調査研究し、モデル・コア・カリキュラム専門研究委員会に提案することを目的としてコーチ育成に優れた知見を有する研究者により構成するワーキングチーム(以下、「ワーキング」という)を設置する。

4.モデル・コア・カリキュラム作成の基本理念(基本方針、考え方、構成内容、作成後の展開)

本事業を進めるにあたり、どのような展開で最終的なゴールまで到達させるかを関係者内での共通認識を明確にするため、基本的な考え方を下記の通りまとめた。

1)基本方針

- ①スポーツ指導者(コーチ)に求められる基本的資質(思考・態度・行動・知識・技能)を明確化する
- ②「新しい時代にふさわしいコーチング」を行うために確実に習得すべき核となるカリキュラム(コア・カリキュラム)を作成する

2)考え方

- ①モデル・コア・カリキュラムとは、教育内容・学習のねらい・到達目標・時間数を提示するものであり、科目名や教育手法については各大学が目指す人材育成に基づくカリキュラムに委ねることとする
- ②モデル・コア・カリキュラムは、各大学で既に定めているカリキュラムに追加修正するケースと、新たな科目として導入することのいずれかが想定されるが、導入の方法については、各大学に委ねることとする
- ③モデル・コア・カリキュラムの履修順序は、各大学に委ねることとする

3)構成内容

- ①学生が卒業後にスポーツ指導者(コーチ)として現場に立つことを見据え、新しい時代にふさわしいコーチングを行うために確実に習得すべき内容を厳選する

4)作成後の展開

- ①(公財)日本体育協会公認スポーツ指導者養成講習会共通科目カリキュラムにおいてもモデル・コア・カリキュラムに基づく内容に改訂する
- ②全国の体育大学や体育学部を有する大学・短期大学はもとより、教員養成系大学、スポーツ系専門学校に学ぶ学生が卒業後の進路においてスポーツ指導の場(コーチングの場)に立った際、新しい時代にふさわしいコーチングを実践できるよう、すべての学校で導入されることを目指す
- ③スポーツ指導者(コーチ)に求められる基本的資質とモデル・コア・カリキュラムは、我が国スポーツ界全体におけるスポーツ指導者(コーチ)育成の共通認識として定着させる

5.モデル・コア・カリキュラム作成スケジュール

モデル・コア・カリキュラム作成のスケジュールは下記のとおり進めることとした。

1)フェーズ1(平成26年度)

- ①基本理念の策定
- ②スポーツ指導者(コーチ)に求められる基本的資質の明確化
- ③カリキュラム骨子の作成

2)フェーズ2(平成27年度予定)

- ①カリキュラム案の作成
- ②カリキュラム案の検証
- ③カリキュラム完成

3)フェーズ3(平成28年度予定)

- ①関係先への周知、説明会の開催

Ⅱ. 検討内容の報告

1. 検討の進め方

1) 具体的な検討内容とスケジュール

本事業において最終的に求められている成果(ゴール)は、コーチに求められる基本的資質能力の明確化とその資質能力を身につけるためのカリキュラムである。

委員会においては、これら2つの成果を達成するための出発点を我が国のスポーツ界として育成すべきプレイヤー(グッドプレイヤー像)がどのような人材であるかを明らかにしなければならないと考えた。

なぜなら、「コーチは、プレイヤーがいないところでは成立しない」からである。

そして、そのグッドプレイヤーを育成するコーチに求められる資質能力(思考・態度・行動・知識・技能)を明らかにし、その資質能力を確実に身につけるために中核となるカリキュラム(コア・カリキュラム)を導き出すこととし、次の4つの検討事項としてワーキングに指示した。

- A) グッドプレイヤー像・グッドコーチ像の明確化
- B) 現在のコーチング現場における課題の確認
- C) 海外におけるコーチ教育、コーチング現場の事例研究
- D) 体育系大学・学部における教育内容の確認

ワーキングでは、委員会からの指示のあった4つの検討事項に基づき、具体的な調査・研究の内容と方法及びスケジュールを下記のとおりとした。

A) グッドプレイヤー像・グッドコーチ像の明確化

- ・アンケート調査(平成26年7月～12月)
公認コーチ養成講習会受講者 約500名
公認スポーツ指導者全国研修会参加者 約500名
体育系大学学生 約1,000名
- ・ヒアリング会(平成26年10月、平成27年1月)
第1回:現役プレイヤー6名、現役コーチ6名
第2回:現役コーチ3名

B) 現在のコーチング現場における課題の確認(平成26年7月～12月)

- ・インタビュー及び活動現場視察
ナショナルコーチ、スポーツ少年団・総合型地域スポーツクラブ、運動部活動、障害者スポーツ指導者 各2名

C) 海外におけるコーチ教育、コーチング現場の事例研究(平成26年7月～平成27年2月)

(独)日本スポーツ振興センター(JSC)が実施する「グローバルに活躍するコーチ育成の在り方に関する情報収集・分析及び検証」より情報提供を受ける。

D) 体育系大学・学部における教育内容の確認(平成26年10月～12月)

体育系大学学長・学部長会の26大学を対象にカリキュラム(シラバス)を収集し、共通点・課題などの整理・分析

「モデル・コア・カリキュラム」作成にあたっての 具体的検討事項、方法等について

(導入)日本体育協会公認スポーツ指導者養成カリキュラムを元に、コーチに必要な「基本的資質」の仮説を立てる
※「タスクフォース報告書(文部科学省)」、「スポーツコーチングに関する国際枠組み(ICCE)」、「体育・スポーツ学における教育の質保証(全国体育系大学・学部長会)」も参照しながら検討を行う

A(グッドプレーヤー像、グッドコーチ像の検証)

日本体育協会公認スポーツ指導者養成講習会等における調査、現役コーチ、アスリート等を交えたヒアリング、その他体育系大学学生等を対象とした調査等を開催し、望ましいプレーヤー・コーチ像を明らかにする

B(現在のコーチング現場における課題の確認)

・ナショナルチーム、学校運動部活動、総合型クラブ等実際のコーチング現場を訪問し、視察、インタビューなどを通じてコーチングの実態を明らかにする

C(海外におけるコーチ教育、コーチング現場の事例研究)

・日本スポーツ振興センター(JSC)が実施する「グローバルに活躍するコーチ育成のあり方に関する情報収集・分析及び検証」より情報提供を受ける

D(体育系大学・学部における教育内容の確認)

・体育系大学・学部のカリキュラム(シラバス)を収集し、共通点・課題などの整理・分析を行う

上記テーマに関し、ワーキングチームメンバーの担当制とし、
第3回専門研究委員会(2015年2月予定)までにまとめを行う

コーチに求められる基本的資質の明確化

適切なコーチングを行うために必要な
カリキュラム(教育内容、到達目標など)の作成

「モデル・コア・カリキュラム」作成スケジュール

平成26年度(2014年度)								
7	8	9	10	11	12	1	2	3
日本協指導者養成カリキュラム確認	第2回ワーキング 案確定	第3回ワーキング コーチに必要な基本的資質ワーキング	コーチ・プレーヤーヒアリング 優れたプレーヤー・コーチ像検証、指導 現場の課題確認	第4回ワーキング 各作業途中経過報告、骨子素案作成		コーチ・プレーヤーヒアリング コア・カリキュラム素案の意見聴取	第5回ワーキング 専門研究委員会提案用コア・カリキュラム 骨子作成	

2)ワーキングにおける検討の手順

ワーキングでは、委員会から与えられた4つの検討事項について作業を進めるにあたり、その前提として、コーチに求められる基本的資質能力(思考・態度・行動・知識・技能)とは、どのようなイメージになるのか、また、グッドプレイヤーとグッドコーチとはどのような人物なのか、それぞれ仮説を立て、その仮説を検証しながらモデル・コア・カリキュラムについて検討することとした。

2.仮説設定

コーチに求められる基本的資質能力(思考・態度・行動・知識・技能)のイメージとグッドプレイヤー像とグッドコーチ像の仮説を立てるため、(公財)日本体育協会の公認スポーツ指導者養成カリキュラムや本事業に深く関わる団体・機関が発行した下記の文献の中から、重要と思われるキーワードを抽出し、共通する内容を分類したところ、①心構え、②人間力、③スポーツ教養(共通・専門)に分けることができた。

各文献のキーワードまとめ	
	まとめ
心構え	スポーツ全般:スポーツの価値や社会への影響力の理解、コーチングを行う意義・目的の理解、コーチング現場に即した知識・技能の統合・活用、スポーツ医・科学の重要性の理解、現場経験の重要性の理解 倫理・哲学、プレイヤーズファースト、フェアプレー、スポーツマンシップ、長期的視野でのプレイヤー育成、自己研鑽の継続実践、社会規範の遵守、相互尊敬、グッドプレイヤー像の理解、自己内省
人間力	言語・非言語コミュニケーション力 (リスク)マネジメント力 内発的動機づけ、目標設定 PDCAサイクルの実践 観察学習力 複眼的思考力
スポーツ教養	共通教養: 発育発達段階や技能レベルに応じた指導に関する知識・技能 ケガや障害の防止に関する知識・技能 特定のスポーツではなく競技横断的な知識・技能 専門教養: スポーツに関する最新の知見に関する知識・技能

参考にした文献

- ・ 文部科学省:「スポーツ指導者の資質能力能力向上のための有識者会議(タスクフォース)報告書」
- ・ 国際コーチングエクセレンス評議会(ICCE):「スポーツコーチングに関する国際的枠組み」
- ・ 全国体育系大学学長・学部長会:「体育・スポーツ学分野における教育の質保証」
- ・ (公財)日本体育協会:「公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目 I」
- ・ (公財)日本体育協会:「21世紀のスポーツ指導者～望ましいスポーツ指導者とは～」

さらに、抽出されたキーワードから読み取れる具体的な人物像を文章化し、その資質能力の要素を示す形で仮説設定とした。

【グッドプレーヤー像】

項目	人物像	キーワード
心構え	・スポーツを愛する心を忘れず、その意義と価値を理解し、表現できる	スポーツの意義と価値、フェアプレー、スポーツマンシップの理解
人間力 (対自己)	・常に前向きな気持ちを持ち、自ら考え工夫し、行動できる ・自分をコントロールしながら課題に対応し、失敗や挫折(敗北)があっても乗り越えることができる	ポジティブ思考、自主性、創造性、判断・決断力、課題解決力、自己統制力、自己理解、克己心、回復力
人間力 (対他者)	・社会の一員であることを自覚し、模範となる態度・行動をすることができる ・常に感謝の気持ちを忘れず、他者(チームメイトや対戦相手など)を尊重し、かつ協力・協働・協調できる	社会規範遵守、ロールモデル、模範的行動、実行力、社会貢献、相互尊敬、協調性、合意形成、柔軟性、融通性

【グッドコーチ像】*グッドプレーヤーを育成する担い手

項目	人物像	キーワード
心構え	・スポーツを愛する心を忘れず、その意義と価値を理解し、表現できるよう導くことができる	スポーツの意義と価値、フェアプレー、スポーツマンシップ、プレーヤーズファーストの理解
人間力 (対自己)	・常に前向きな気持ちを持ち、自ら考え工夫し、行動できるよう導くことができる ・自分をコントロールしながら課題に対応し、失敗や挫折(敗北)があっても乗り越えることができるよう導くことができる	ポジティブ思考、自主性、創造性、判断・決断力、課題解決力、自己統制力、自己理解、克己心、回復力
人間力 (対他者)	・社会の一員であることを自覚し、模範となる態度・行動をできるよう導くことができる ・常に感謝の気持ちを忘れず、他者(チームメイトや対戦相手など)を尊重し、かつ協力・協働・協調できるよう導くことができる	社会規範遵守、ロールモデル、模範的行動、実行力、社会貢献、相互尊敬、協調性、合意形成、柔軟性、融通性

3.検討内容

1)グッドプレーヤー像、グッドコーチ像の検証(アンケート調査、ヒアリング会)

前項にて仮説として提示した内容(グッドプレーヤー像、グッドコーチ像、備える資質能力)の妥当性を検証するため、現役コーチ、プレーヤーに対してアンケート調査と対面形式でのヒアリング会を実施した。

(1)アンケート調査の目的

新しい時代に求められる指導者(コーチ)に必要とされる資質(思考・態度・行動・知識・技能)を習得するために必要な教育内容を検討するにあたり、実際に指導者として指導現場で活躍されている指導者と指導を受けているプレーヤーが、優れたプレーヤーやコーチとはどのような資質を有しているべきと考えているのか。また、普段からどのような方針で指導にあたっているか(どのような指導方法を望んでいるのか)、どのような課題を持っているのかを知ることによって、必要なカリキュラムを導き出す。

(2)実施方法・作業内容

- コーチ向けアンケート(調査票によるアンケート)
 - ・ 公認コーチ養成講習会受講者及び公認スポーツ指導者全国研修会参加者を対象に実施
 - ・ 講習会開催時に事務局職員が配布・回収
 - ・ ワーキングメンバーによる結果入力・集計・分析・まとめ
- プレーヤー向けアンケート(オンライン・アンケート)
 - ・ ワーキングメンバーが所属する大学の学生を対象に実施
 - ・ 授業等においてURLを指示し、その場で解説しながら回答させる(10月～11月)
 - ・ ワーキングメンバーによる結果・分析・まとめ

件数

- コーチ向けアンケート(調査票によるアンケート)
 - ・ 対象事業: 本会公認スポーツ指導者養成講習会、公認スポーツ指導者全国研修会 603 件
- プレーヤー向けアンケート(オンライン・アンケート)
 - ・ ワーキングメンバーが所属する大学(大阪体育大学、日本体育大学、早稲田大学、立命館大学)の大学生、569 名

作業期間

- ・ 調査: 平成 26 年 10 月～平成 26 年 12 月
- ・ 入力・集計: 平成 26 年 11 月～平成 27 年 1 月
- ・ 分析・まとめ: 平成 27 年 2 月

(3)結果及び考察

コーチ向けアンケート

①グッドプレーヤーに求められる資質

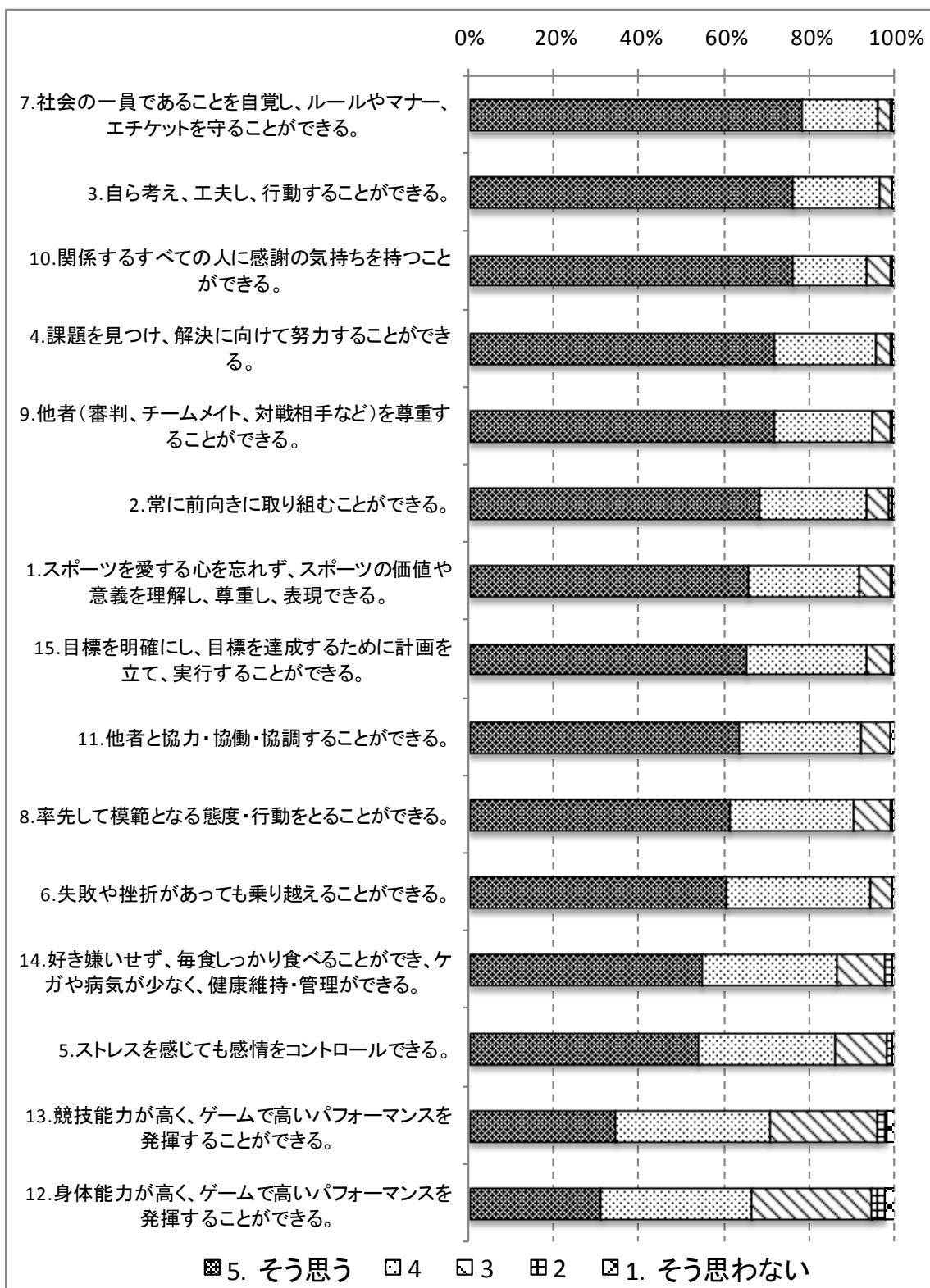


図1 グッドプレーヤーに求められる資質

【グッドプレーヤーに求められる資質について(重要度)】

図1は、グッドプレーヤーに求められる資質について、重要性が高い順に並べて示したものである。グッドプレーヤーに求められる資質として、コーチが「重要だと思う(5)」と回答した割合が最も多かったのが、第1位「7.社会の一員であることを自覚し、ルールやマナー、エチケットを守ることができる(78.4%)」であった。2位以下は、次のとおりであった。第2位「3.自ら考え、工夫し、行動することができる(76.1%)」、第3位「10.関係するすべての人に感謝の気持ちを持つことができる(76.1%)」(※同数だが、「思う(4)」割合の差でこの順位)、第4位「4.課題を見つけ、解決に向けて努力することができる(71.9%)」、第5位「9.他者(審判、チームメイト、対戦相手など)を尊重することができる(71.5%)」の順であった。

第1位の結果について、指導者は、指導しているプレーヤーに対して、アスリートである前に、まずは社会のルールやマナーを遵守できる一人の人間としての自覚を持つことが重要であると認識していた。

第2位、4位については、単にスポーツが上手くなるだけでなく、スポーツ活動を通して自ら考え、工夫し、行動できる自律した人間として成長することを期待している。

第3位、5位についてプレーヤーは自分一人でスポーツ環境を整えることは不可能で、保護者や指導者をはじめとする周りの様々なサポートが必要である。そのためプレーヤーに対してスポーツができることに感謝し、日頃からその気持ちを態度や行動として表現する必要があると考えていた。

反対に、グッドプレーヤーに求められる資質として、コーチが「重要だと思う」と回答した割合が少なかったのが、第15位「12.身体能力が高く、ゲームで高いパフォーマンスを発揮することができる(31.0%)」、第14位「13.競技能力が高く、ゲームで高いパフォーマンスを発揮することができる(34.7%)」、第13位「5.ストレスを感じても感情をコントロールできる(53.8%)」であった。身体能力や競技能力、さらにはそれらに基づいたゲームでのパフォーマンス発揮能力は、プレーヤーがゲームや試合で勝つためには絶対に必要な要素であるにもかかわらず、グッドプレーヤーに求められる資質として、それらに対する重要度が低かったことは意外な結果であった

②グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質(重要度)

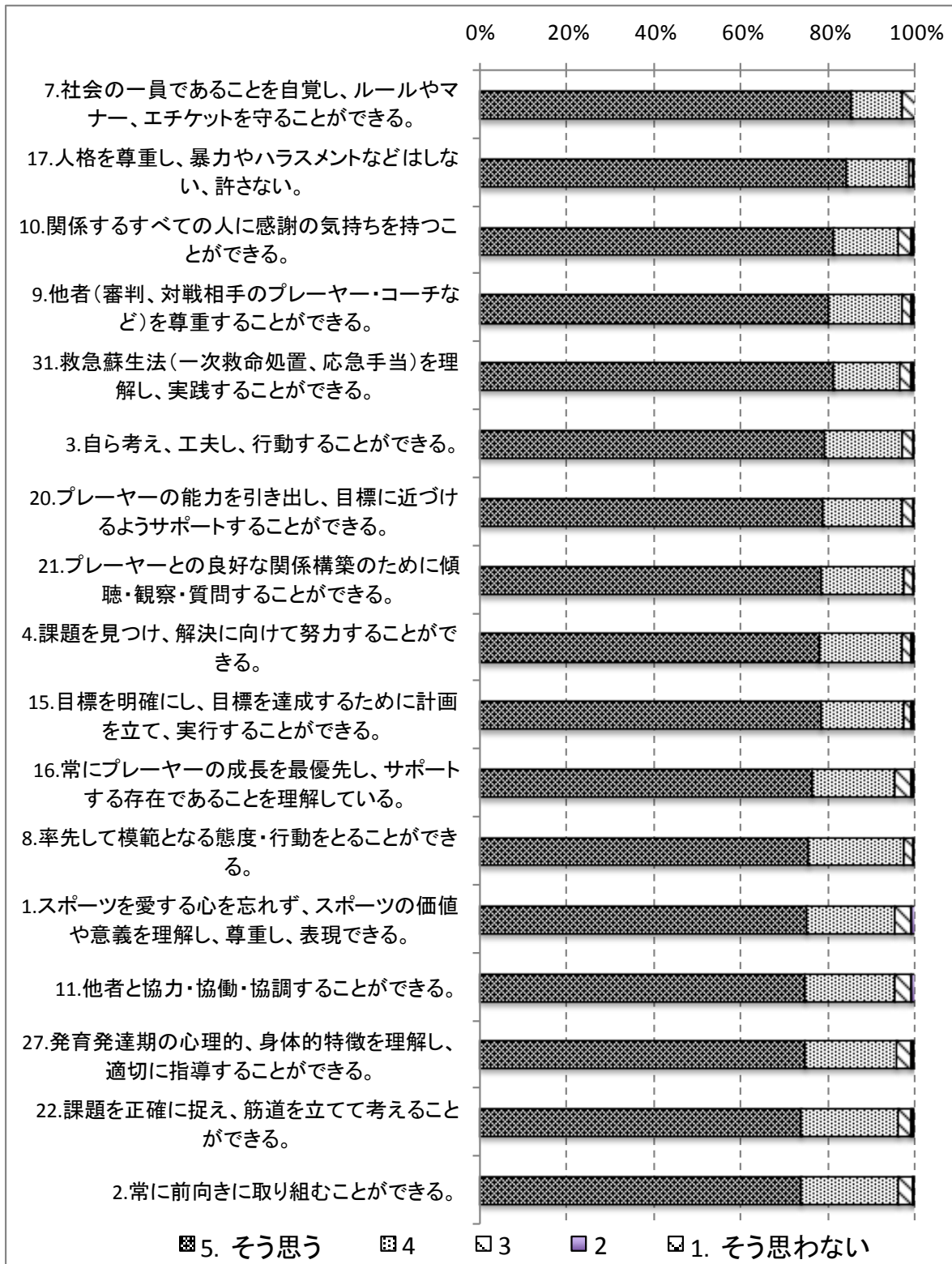


図 2-1 グッドコーチに求められる資質(重要度)①

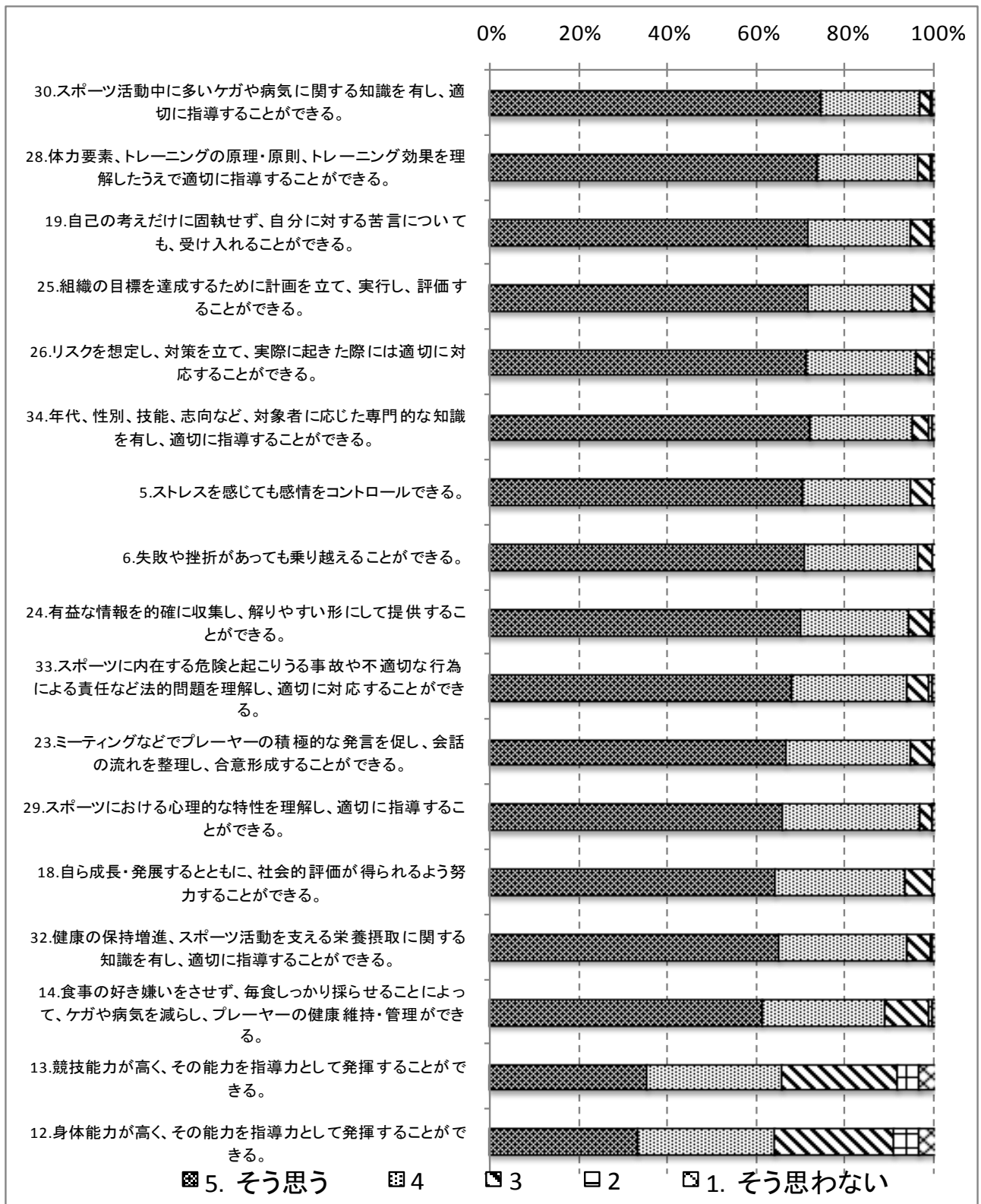


図 2-2 グッドコーチに求められる資質(重要度)②

【グッドコーチに求められる資質について(重要度)】

図 2-1 および 2-2、グッドコーチに求められる資質に関する重要性の認知について、重要度が高い順に並べて示したものである。グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質として、コーチが「重要だと思う」と回答した割合が最も多かったのが、第 1 位「7.社会の一員であることを自覚し、ルールやマナー、エチケットを守ることができる(85.6%)」であった。2 位以下は、次のとおりであった。第 2 位「17.人格を尊重し、暴力やハラスメントなどはしない、許さない(84.0%)」、第 3 位「10.関係するすべての人に感謝の気持ちを持つことができる(81.3%)」、第 4 位「9.他者(審判、対戦相手のプレーヤー・コーチなど)を尊重することができる(81.2%)」、第 5 位「31.救急蘇生法(一次救命処置、応急手当)を理解し、実践することができる(80.2%)」の順であった。

第 1 位、3 位、4 位の結果について、先述した「グッドプレーヤーに求められる資質」として、コーチが重要だと回答した内容と対応していた。具体的には、コーチである前に、まずは「社会のルールやマナーを遵守できる一人の人間」としての認識を持ち、周りの方々に対する「感謝の気持ち」を忘れず、「審判や対戦相手のプレーヤー・コーチを尊重する」態度が重要であると認識しているなど、上位 6 位中 4 項目が同内容であり、プレーヤーとコーチそれぞれに求められる資質(特に態度・行動)は、ほぼ共通していることが明らかであった。また、第 2 位の結果について、ここ数年、スポーツ界で重大な問題として取り上げられている体罰・暴力問題を意識して、「プレーヤーの人格を尊重し、暴力やハラスメントは絶対にしない」という強い意志が感じられた。さらに、第 5 位の結果について、もし心肺停止の傷病者に対して救急車が到着するまでの間に応急手当が行われると、生存率や社会復帰率が高まることが知られている。これをふまえスポーツ現場のコーチは万々に備えて「救急処置法を含めた医学的知識を習得しておく」ことが重要であると認識していた。

反対に、グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質として、コーチが「重要だと思う」と回答した割合が最も少なかったのが、第 34 位「12.身体能力が高く、その能力を指導力として発揮することができる(33.3%)」、第 33 位「13.競技能力が高く、その能力を指導力として発揮することができる(35.6%)」、第 32 位「14.食事の好き嫌いをさせず、毎食しっかり採らせることによって、ケガや病気を減らし、プレーヤーの健康維持・管理ができる(61.2%)」であった。

第 34 位、33 位の結果は、グッドプレーヤーに求められる資質と同様に重要度が低かった。コーチ自身の身体能力や競技能力は、グッドコーチに求められる資質としてそれほど重要ではないと考えていることが明らかであった。これらの結果から、対象としたコーチが求める理想のコーチ像について、社会性や人間性といった人間的な成長を重視している傾向が見られた。

④グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質(習熟度)

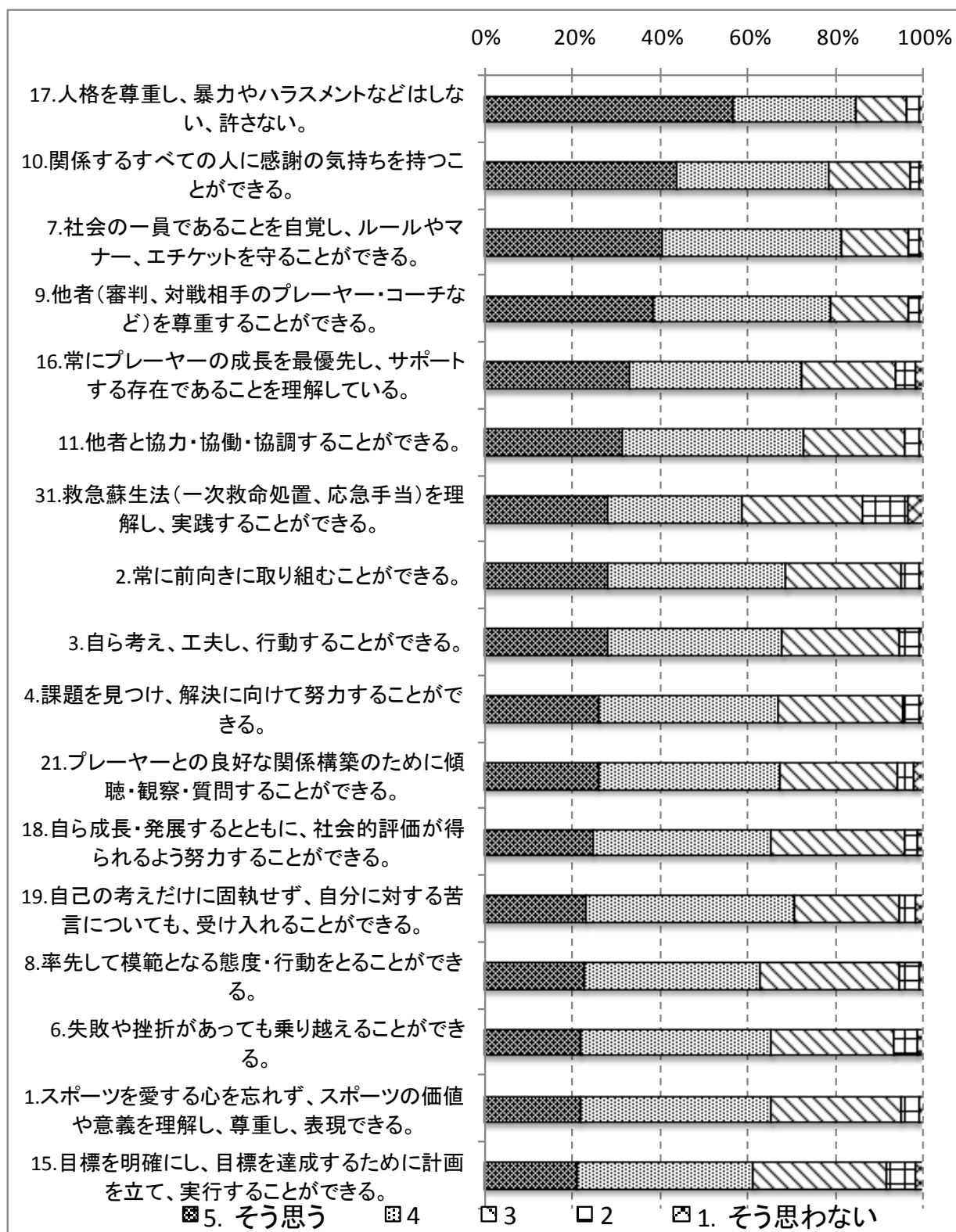


図 3-1 グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質(自身の習熟度)①

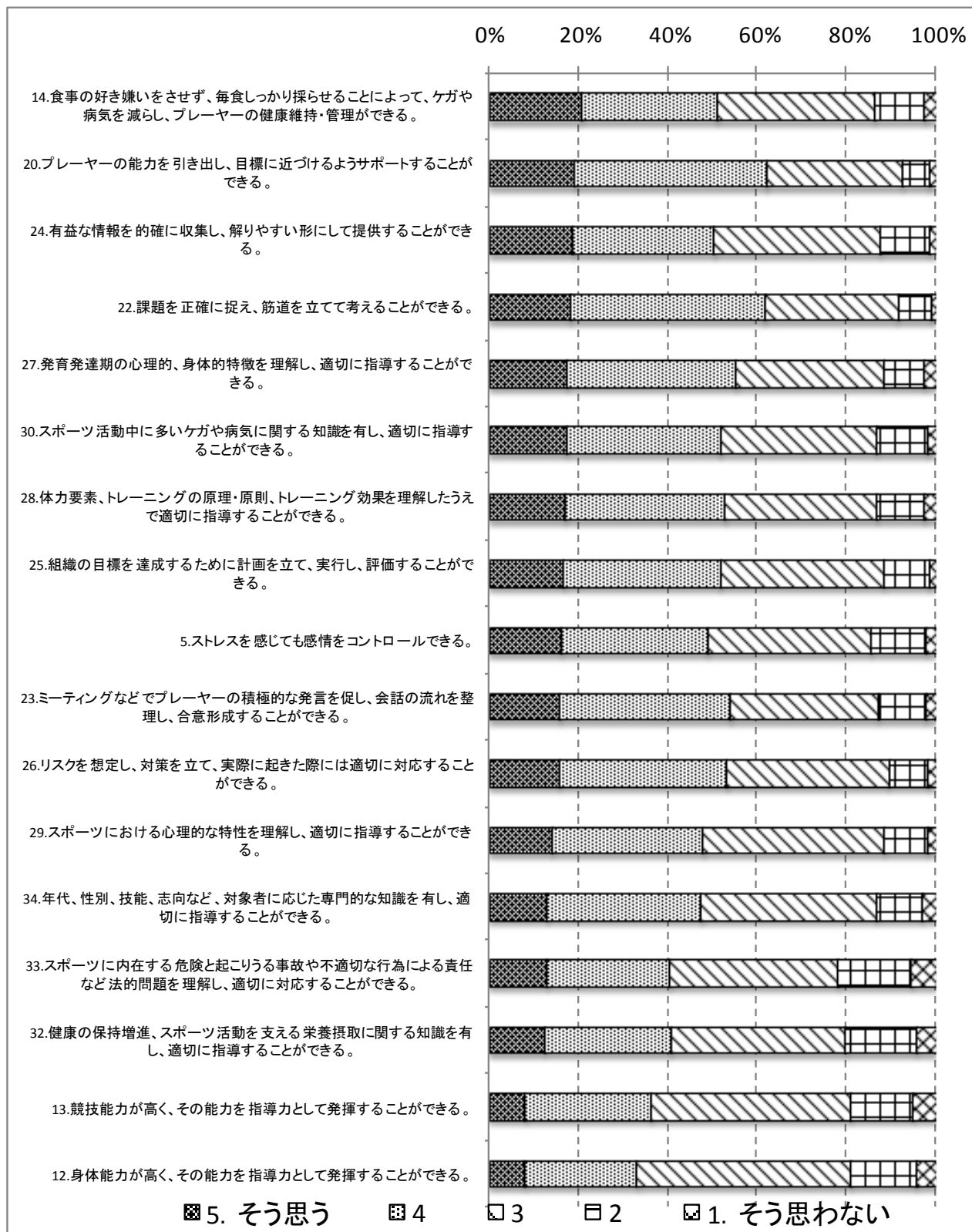


図 3-2 グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質(自身の習熟度)②

【グッドコーチに求められる資質について(習熟度)】

図 3-1 および 3-2 は、グッドコーチに求められる資質に関する自身の習熟度の認知について、習熟度が高い順に並べて示したものである。グッドプレーヤーを育成するコーチ自身が「習熟している」資質と認識している割合が最も多かったのが、第 1 位「17.人格を尊重し、暴力やハラスメントなどはしない、許さない(56.7%)」であった。2 位以下は、次のとおりであった。第 2 位「10.関係するすべての人に感謝の気持ちを持つことができる(44.0%)」、第 3 位「7.社会の一員であることを自覚し、ルールやマナー、エチケットを守ることができる(40.7%)」、第 4 位「9.他者(審判、対戦相手のプレーヤー・コーチなど)を尊重することができる(38.8%)」、第 5 位「16.常にプレーヤーの成長を最優先し、サポートする存在であることを理解している(33.1%)」の順であった。

第 1 位～6 位の結果について、順位は入れ替わったが、先述した「グッドプレーヤーならびにグッドコーチに求められる資質」として、コーチが重要だと回答した内容とほとんど変わらないのものであった。この結果から、グッドプレーヤーを育成する上で、コーチ自身が重要だと考える「指導者・コーチに求められる資質」については、対象としたコーチは「5. そう思う」のポイントは低いものの概ね習熟できていると認識していることがわかった。

第 1 位の結果から、「プレーヤーの人格を尊重し、暴力やハラスメントは絶対にしない」という指導者・コーチの強い決意が感じられた。第 5 位の結果から、常にプレーヤーの成長を最優先し、サポートする存在であることを理解しており「プレーヤーズ・ファースト」という考え方がコーチの間で広く認識されていることが明らかであった。

反対に、グッドプレーヤーを育成するコーチ自身が「習熟している(5)」資質と認識している割合が最も少なかったのが、第 34 位「12.身体能力が高く、その能力を指導力として発揮することができる(0.8%)」、第 33 位「13.競技能力が高く、その能力を指導力として発揮することができる(8.1%)」、第 32 位「32.健康の保持増進、スポーツ活動を支える栄養摂取に関する知識を有し、適切に指導することができる(12.4%)」であった。

第 34 位、33 位の結果は、グッドコーチに求められる資質(特に態度・行動)として重要度が低かった内容と共通していた。具体的には、グッドコーチに求められる資質として、特に重要性が低かった資質については、今回の対象となったコーチは自信を持っていないことがわかった。また、第 32 位の「栄養摂取に関する知識」も同様に、優れた指導力を発揮する上で重要な内容である。これらの結果から、コーチは社会性や人間性を育てる資質はある程度身につけているが、自己の持つ能力を指導力として発揮することには不安を抱えていると考えられる。

④スポーツ指導活動において大切にしていること

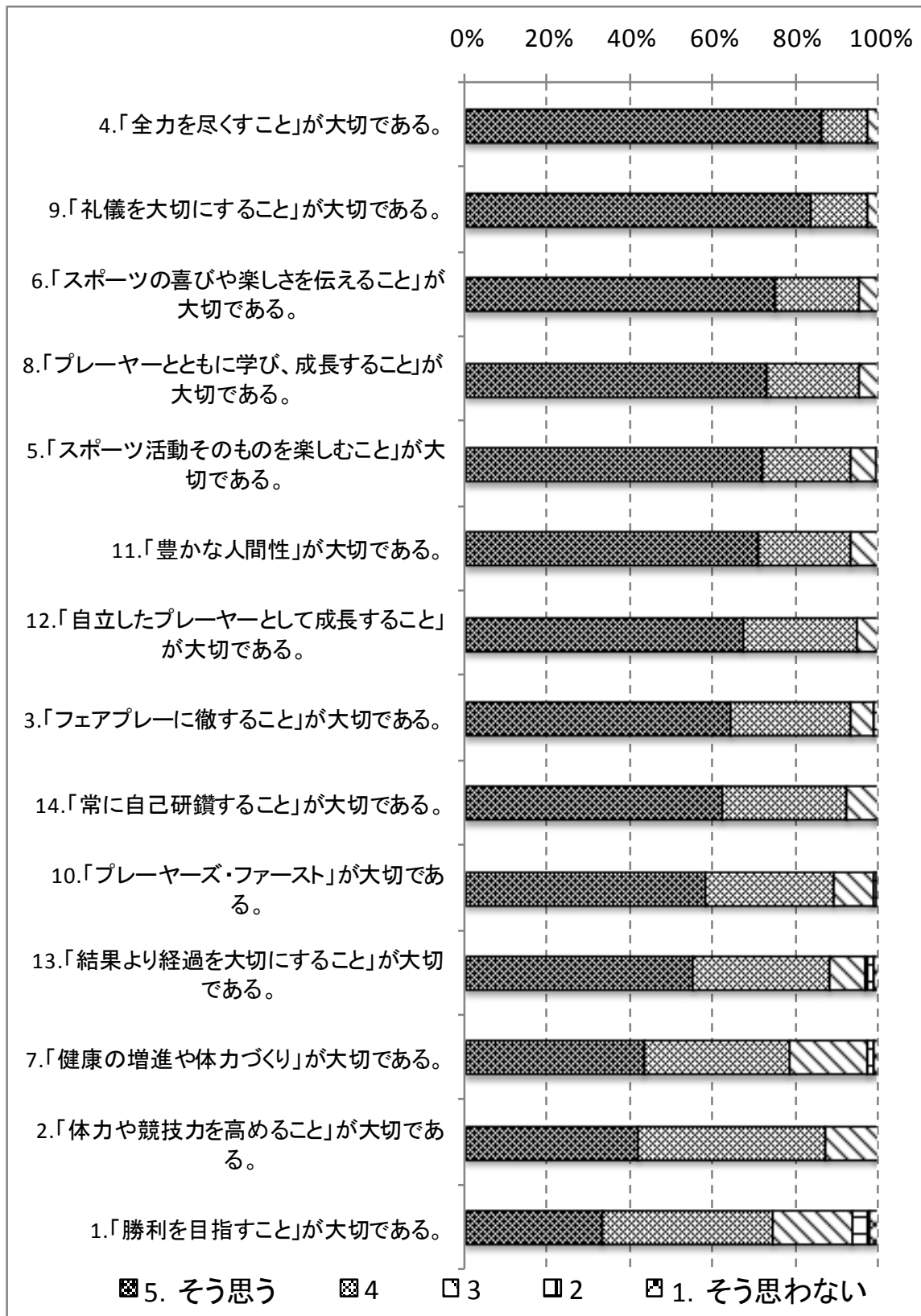


図4 スポーツ指導活動において大切にしていること

【スポーツ指導活動において大切にしていること】

図4は、スポーツ指導活動において大切にしていることについて、重要度が高い順に並べて示したものである。指導活動において大切にしていることとして、コーチが「そう思う(5)」と回答した割合が最も多かったのが、第1位「4.全力を尽くすこと(86.5%)」であった。2位以下は、次のとおりであった。第2位「9.礼儀を大切にすること(84.0%)」、第3位「6.スポーツの喜びや楽しさを伝えること(75.2%)」、第4位「8.プレーヤーとともに学び、成長すること(73.1%)」、第5位「5.スポーツ活動そのものを楽しむこと(72.0%)」の順であった。

第1位の結果について、試合や競技会で最後まで勝ち残れる勝者は1人(1チーム)だけで、それ以外はすべて敗者となる。そのため、(たとえ敗れたとしても)試合や競技会で自分が持てる力をすべて出し切れたかどうかが重要となる。全力を尽くして戦った結果、敗れたのであれば、それは相手の実力が勝っていたということであり、新たな課題も見つかるであろう。第2位については、先述したように、保護者やコーチをはじめとする周りの様々な人からサポートしてもらっている事や対戦相手に対して、「感謝の気持ち」を持つことが重要である。

第3位、4位、5位については、生涯スポーツの考え方を踏まえたスポーツとの関わり方を重視した考え方である。生涯を通じてスポーツが楽しめるように、プレーヤーに楽しさや喜びを伝え、コーチ自身もまたともに学び、成長する姿勢が重要であると捉えていた。

反対に、グッドプレーヤーに求められる資質として、コーチが「重要だと思う」と回答した割合が少なかったのが、第14位「1.勝利を目指すこと(33.2%)」、第13位「2.体力や競技力を高めること(42.1%)」、第12位「7.健康の増進や体力づくり(43.3%)」であった。

第14位、13位について、コーチは技術・戦術を教え、いかに短期間に上手くさせるかが課題であり、プレーヤーを試合において勝たせるということが重要な使命である。しかしながら、勝利を目指すことが重要だと回答した割合が最も少なかった。

第12位について、健康の増進や体力づくりに対する重要性の認識も低かった。このことは、健康・体力づくりを超えたより高次の人間形成に取り組んでいるという考え方を明示しようとする意図が推察された。

⑤指導活動における課題

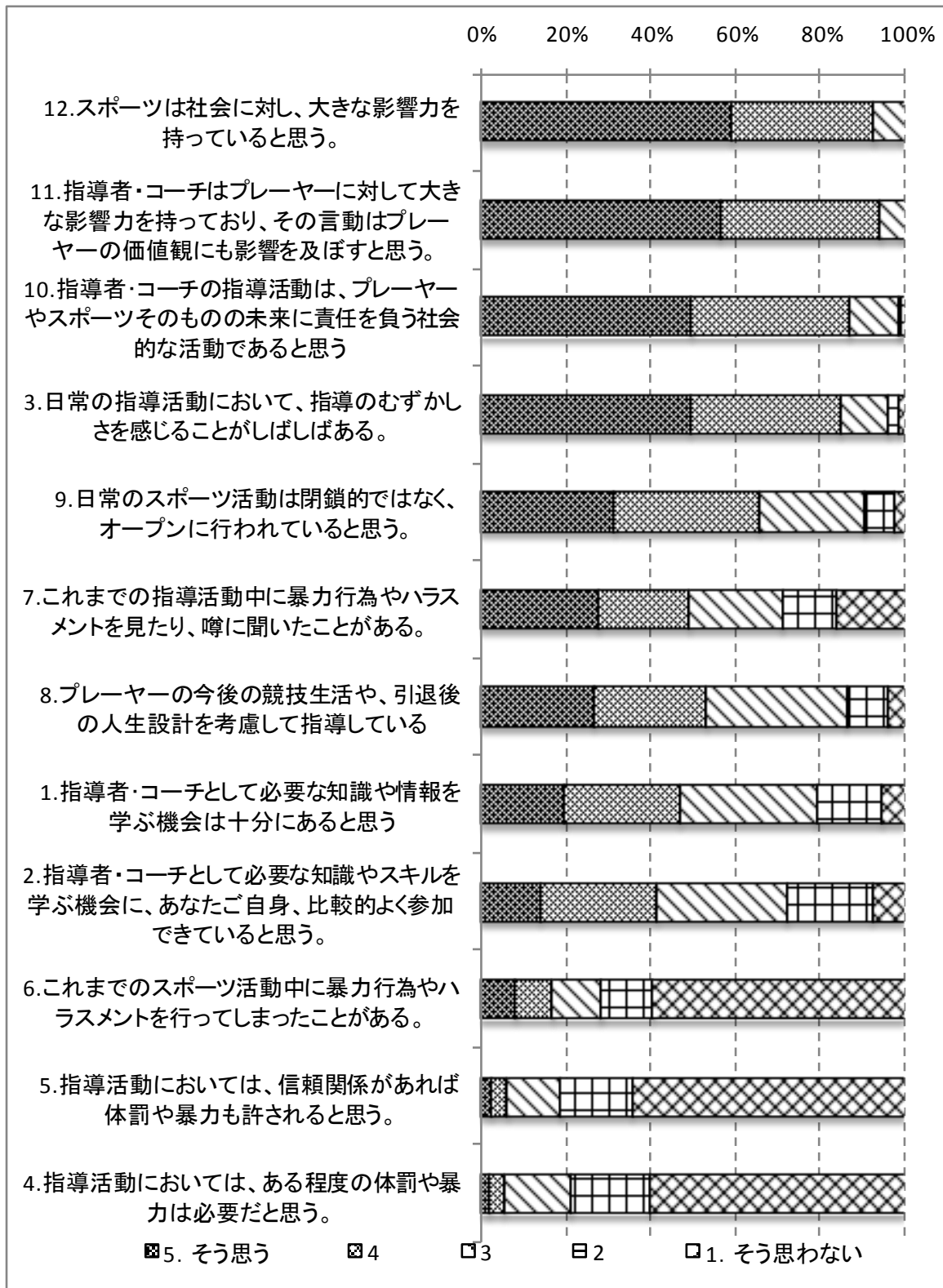


図 5 スポーツ指導活動において認識している課題

【スポーツ指導活動における課題】

図5は、指導活動において認識している課題について、「そう思う」の回答割合が多い順に並べて示したものである。指導活動における課題として、コーチが「そう思う(5)」と回答した割合が最も多かったのが、第1位「12.スポーツは社会に対し、大きな影響力を持っていると思う(59.2%)」であった。2位以下は、次のとおりであった。第2位「11.コーチはプレイヤーに対して大きな影響力を持っており、その言動はプレイヤーの価値観にも影響を及ぼすと思う(56.5%)」、第3位「10.コーチの指導活動は、プレイヤーやスポーツそのものの未来に責任を負う社会的な活動であると思う(49.8%)」、第4位「3.日常の指導活動において、指導のむずかしさを感じる事がしばしばある(49.5%)」、第5位「9.日常のスポーツ活動は閉鎖的ではなく、オープンに行われていると思う(31.8%)」の順であった。

第1位、2位、3位の結果について、スポーツが社会に対して大きな影響力があり、指導に携わるコーチの態度や言動もプレイヤーの価値観や未来に対して直接、影響を及ぼすことの重大さを自覚できていることがうかがえる。

反対に、指導活動における課題として、コーチが「そう思う(5)」と回答した割合が最も少なかったのが、第12位「4.指導活動においては、ある程度の体罰や暴力は必要だと思う(13)」であった。それ以降は、第11位「5.指導活動においては、信頼関係があれば体罰や暴力も許されると思う(16)」、第10位「6.これまでのスポーツ活動中に暴力行為やハラスメントを行ってしまったことがある(49)」であった。これらの結果から、調査対象となったコーチの中に、これまで活動中の暴力行為やハラスメントを見たり聞いたりしたことがあるだけでなく、実際に自分自身が行使したことがある者も一定数存在することが明らかになった。第10位の回答結果について、「そう思う(5)」49人、「思う(4)」51人と暴力行為やハラスメントを行使した自覚のある人は、100人/586人中(17.1%)、明確に「行使していない」という人を除いて、「どちらとも言えない(3)」67人も含めると、実に167人/586人中(28.5%)のコーチが「暴力行為やハラスメントの経験あり」ということになる。

さらに、「プレイヤーとの信頼関係があれば体罰・暴力が許される、むしろある程度必要である」と考える者も一定数存在した。2012年に起きた大阪市立高校での暴行事件から3年経った今でも、「活動中の暴力行為やハラスメントに対する寛容な態度・姿勢」がみられる本調査の結果から、スポーツ指導における体罰問題の根深さがうかがい知れる。

⑥指導活動における自身の課題について(自由記述)

表 1 スポーツ活動を行う上でのモットー

スポーツ活動のモットー	(人)
1. 楽しむ(明るく元気, 感激, 感動)	22
2. 人間形成(生きる力の育成)	14
3. 努力の大切さ(継続/練習の大切さ, 謙虚さ)	14
4. 個に応じた指導・トレーニング (1人の人間としてリスペクト, 長所を伸ばす・進歩)	13
5. 自立・自主性	12
6. 選手第一, 選手理解 (サポート的役割, 信頼関係, 冷静さ)	9
7. スポーツできることに感謝	6
8. 礼儀・スポーツマンシップ	6
9. プロセス	4
10. メンタル	4
11. 環境づくり(安全第一, ケガ防止)	4
12. 基本の大切さ	3
13. 思いやり(チームワーク, コミュニケーション)	3
14. 全力で取り組む(体力)	3
15. 厳しく	2
16. 勝利至上(1位になること)	2
17. 手本を示す	2
その他	
・守破離	
・生涯スポーツ	
・かつこよく	

表 2 日頃の指導において難しさを感じること

指導で難しさを感じる時	(人)
1. 個に応じた指導・声掛け (上位選手/初心者への指導, 男女差)	39
2. 選手との関係・コミュニケーション (意識の違い, サポート, 勝利と楽しさのバランス)	38
3. プレーヤーのメンタル	23
4. 保護者との関係・家庭環境	15
5. 指導・練習方法(年齢を考慮した指導)	15
6. プレーヤー間の意識・技術の差(伸び悩み)	13
7. 指導者自身の問題 (指導者間の連携, 体力の衰え)	9
8. 競技以外の学業等との両立	7
9. 時間	5
10. 環境整備(練習場所, 金銭面)	4
11. 医学的知識(ケガ, 成長痛)	3
12. 継続性	2

表 1 は、「あなたはスポーツ活動を行う上で、モットーとしていることは何ですか」という質問に対する回答をまとめたものである。その結果、最も多かったのは、「楽しむ(明るく元気、感激、感動)」22 人であった。スポーツの語源である「deportare = 気晴らし、楽しむ、遊ぶ」という意味をふまえて、コーチはスポーツのもつ楽しさをプレーヤーに伝えようとする意志が理解できる。2 番目以降は、第 2 位 人間形成(生きる力の育成)14 人、第 2 位(同数) 努力の大切さ(継続/練習の大切さ、謙虚さ)14 人、第 4 位 個に応じた指導・トレーニング(1 人の人間としてリスペクト、長所を伸ばす、進歩)13 人、第 5 位 自立・自主性 12 人の順であった。2 位の人間形成、努力の大切さ、5 位の自立・自主性はスポーツを教育の手段として捉えた考え方で、しかもこのように上位に位置づけられている背景には、日本においてスポーツは人間形成のための重要な教育活動として認識されていることがわかる。

表 2 は、「日頃のスポーツ指導においてあなたが難しさを感じることは何ですか」という質問に対する回答をまとめたものである。その結果、最も多かったのは、個に応じた指導・声かけ(上位プレーヤー/初心者への指導、男女差)39 人であった。2 番目に多かったのは、プレーヤーとの関係・コミュニケーション(意識の違い、サポート、勝利と楽しさのバランス)38 人、第 3 位は、プレーヤーのメンタル 23 人であった。

これらの上位に位置づいたのは、プレーヤーとの人間関係づくりであり、コーチの多くがプレーヤーとの関わり方に難しさを感じていることが理解できる。先の質問で、スポーツ活動を行う上での

コーチがモットーとしている第1位が「楽しむ」ことである一方、プレーヤーを「上手く」したり、試合に「勝利させる」こともコーチの大切な役割である。スポーツを楽しむためには、プレーヤーに自由にプレーさせることが大切である一方で、上手くしたり勝利させたりするには、それだけでは困難で、時にはあえて高度な課題を与えることも必要になる。これらの矛盾する内容を、プレーヤーに同時に求めなければならない点で、コーチは難しさを感じていると考えられる。

表3 どんな知識・スキルが必要だと感じるか

どんな知識やスキルがあれば良かった	(人)
1. コミュニケーション力 (話し方・表現力, カウンセリング力, 声掛け, 説明力, 伝える技術, 選手理解)	41
2. 指導スキル・多様な指導・練習法 (選手第一/楽しむ/最新の/達成感を与える/やる気を引き出す指導法・トレーニング法)	32
3. プレーヤーのメンタル・心理学(心の余裕)	21
4. 指導経験	12
5. 医学的知識(栄養学, 生理学)	9
6. 年齢を考慮した指導	6
7. 学び	6
8. 保護者との関係	3
9. スポーツ科学の知識(バイオメカニクス)	3
10. マネジメント力	2
11. 観察力	2

表4 学んで役立ち実際に活用している知識・情報

活用している知識や情報	(人)
1. スポーツ科学・専門的知識 (コーチング, バイオメカニクス, 生理学)	28
2. 最新の指導・練習法 (長所を伸ばす, 楽しさの提供, 自主性)	20
3. 栄養学	11
4. 経験	11
5. メンタル (心理学, 目標設定, 性格判断)	11
6. 医学的知識	10
7. コミュニケーション力 (傾聴, 話し方, 初心者理解)	10
8. プレーヤーからの学び	7
9. コーチの教え (他チーム/他の指導者からの学び)	6
10. マネジメント力(計画性・役割分担)	4
11. メディアからの学び	3
12. アドバイス	2
13. 他競技の知識	2
その他	
・安全性に関する知識	
・審判員の特徴	
・生涯スポーツのすすめ	

表3は、「スポーツの指導場面において、どんな知識・スキルが必要だと感じますか」という質問に対する回答結果を示したものである。その結果、最も多かったのは、コミュニケーション能力(話し方・表現力、カウンセリング力、声かけ、説明力、伝える技術、プレーヤー理解)41人であった。

コーチは、単に技術・戦術の指導に優れているだけではプレーヤーに信頼されない。コーチの人格がプレーヤーに尊敬されてこそ信頼を得られると考えられる。コーチとプレーヤーが相互尊敬の関係を築くためには、プレーヤーの立場に立った指導をするとともに、プレーヤーとコミュニケーションを図ることが重要である。プレーヤーに応じて話し方を工夫するなど、個々人の特徴に対応したコミュニケーションを図ることが求められていると考える。

第2位は、指導スキル・多様な指導・練習法(プレーヤー第一/楽しむ/最新の/達成感を与える/やる気を引き出す/指導法・トレーニング法)32人であった。コーチには、「通常、限られた時間内に上手くさせ、試合で勝利させることが求められる場合がある」。そのため、より効果的な指導法・トレーニング法を求めていると考えられる。

第3位は、プレーヤーのメンタル・心理学(心の余裕)21人であった。これは第1位のコミュニケーション能力と関係しており、プレーヤーにどのような働きかけをすれば、本気を出して、自信をもって取り組んでくれるか、プレーヤーの人心掌握を求めていると考えられる。

表4は、「今までに学んで役に立っている、応用して活用している知識や情報はどんなものか」という質問に対する回答結果を示した。その結果、最も多かったのは、スポーツ科学・専門的知識(コーチング、バイオメカニクス、生理学)28人であった。

第2位は、最新の指導・練習法(長所を伸ばす、楽しさの提供、自主性)20人であった。

第3位は、栄養学であった。

これらの1位~3位の内容は、プレーヤーを効果的に上手くさせ、試合に勝利させるためのスポーツ科学に関する最新の知識・技術である。プレーヤーからどんな質問を求められてもしっかりと応えられるよう、各種研修会やセミナー、さらには専門誌を読むことで常に最新情報やルールを学び続ける必要がある。また様々なコーチとの意見交換が実際のコーチングに役だっていることがわかった。

表5 今後、習得したい知識や情報とは

身につけたい知識や情報	(人)
1. スポーツ科学・専門的知識 (バイオメカニクス, 生理学, トレーナー, 教育, 実践的知識, 先人の知恵)	32
2. 最新の指導・練習法 (ミニゲーム, スキルアップ, 戦術, トッププレーヤーの観察)	30
3. 心理学・メンタル(目標設定, 思考力)	29
4. 医学的知識	14
5. コミュニケーション力(話し方・表現力, ほめ方)	14
6. 栄養学	9
7. 年齢を考慮した指導	6
8. 個に応じた指導	4
9. 他競技の知識	3
10. マネジメント力(組織論, 計画法)	4
11. 女性選手の指導法	2
その他	
・体力	
・法的知識	
・感性	
・保護者との関係	

表6 スポーツ界で暴力やハラスメントが起きる原因

暴力やハラスメントの原因	(人)
1. コミュニケーション(力)不足・思い違い (信頼関係のなさ, 認識不足, 意識の差, 温度差, 指導者と選手の目標の差)	33
2. 過去からの慣習(負の連鎖)	30
3. コーチ第一の指導	22
4. 勝利至上	19
5. 指導力不足	16
6. コーチの性格(閉鎖的性格)	11
7. 経験からの指導	8
8. 根性論	8
9. 感情コントロール/余裕のなさ(軽率な行動)	7
10. 教育制度	3
11. 師弟関係	2
12. 競技特性	2
13. 選手に原因(選手のわがまま)	2
その他	
・愛のなさ	
・プロとアマの差	
・保護者の黙認	

表5は、「今後、あなたが身につけたいこと、学びたい知識や情報にはどのようなものですか」という質問に対する回答をまとめたものである。その結果、最も多かったのは、スポーツ科学・専門的知識(バイオメカニクス、生理学、トレーナー、教育、実践的知識、先人の知恵)32人であった。第2位は、最新の指導・練習法(ミニゲーム、スキルアップ、戦術、トッププレーヤーの観察)30人であった。第3位は、心理学・メンタル(目標設定、思考力)29人であった。

これらの1位~3位の内容は、プレーヤーを効果的に上手くさせ、試合に勝利させるためのスポーツ科学に関する最新の知識・技術であり、先述した「スポーツの指導場面において、必要な知

識・スキル」と「実際に活用して、役に立っている知識や情報」に対する回答結果と同様の傾向が示された。このことから、競技能力やパフォーマンスの向上のために①スポーツ科学の専門的知識・スキル、②最新の指導・練習法、③メンタルトレーニングの方法に関する知識やスキルを修得することが重要だと捉えている傾向が見られる。

表 6 は、「スポーツ界で暴力やハラスメントが起きる原因」について回答した結果をまとめたものである。その結果、最も多かったのは、コミュニケーション不足・思い違い(信頼関係のなさ、認識不足、意識の差、温度差、コーチとプレイヤーの目標の差)33 人であった。

このことは、今、コーチにとって最も重要であると考え「コミュニケーション能力」の欠如が、スポーツ界の暴力やハラスメントの原因と考えていることが明らかであった。

第 2 位は、過去からの慣習の 30 人であった。これは、コーチのための倫理ガイドライン(日本体育協会, 2013)内の資料「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」の中に、「我が国では、これまでスポーツ活動の場において暴力行為が存在していた。時と場合によっては、暴力行為が暗黙裏に容認される傾向が存在していたことも否定できない。これまでのスポーツ指導で、ともすれば厳しい指導の下、暴力行為が行われていたという事実・・・」と記されている。このように、スポーツ活動場面における暴力が存在していたことをコーチ自身も認識していることがわかった。

第 3 位は、コーチ第一の指導 22 人であった。グッドコーチは「プレイヤーの話を聞く」、「教えすぎずプレイヤーに考える力をつけさせる」、「責任を持たせる」など、プレイヤーのやる気と自立心を育てるためのサポートができる人と認識されている。コーチとは、あくまでもプレイヤーのスポーツとの出会いをコーディネートし、明確な目標を設定してスポーツを継続できるように、スポーツを通して仲間をつくり、快適なスポーツライフを構築できるようにサポートする役割である。これらが守られず、「コーチ第一の指導」に陥ったとき、暴力やハラスメントが生じる可能性が高いと認識していることがわかる。

表 7 暴力やハラスメントが起きないために必要な知識・スキル

暴力・ハラスメントを防ぐ知識・スキル (人)	
1. コミュニケーション力 (話し方, 表現力, 声掛け)	34
2. プレーヤー第一の指導法 (尊重, 個に応じた, 公平な指導)	32
3. 資質向上 (コーチ教育, 資格制度, プログラム化)	19
4. 意識改革(謙虚さ, 開放的な性格)・・・	14
5. 心理学	13
6. 指導の客観的視点 (組織での防止, 問題解決力)	12
7. 道徳教育(人間育成)	10
8. 余裕(役割分担, 感情コントロール)	9
9. 信頼関係(愛情, 選手の育成)	9
10. 法的知識	5
11. スポーツの楽しさを伝える	3
12. 専門外知識	3
13. プレーヤーの切り捨て	2
14. 経験から学ぶ	2

表 7 は、「暴力やハラスメントが起きないために必要な知識・スキルとは何か」という質問に対する回答結果をまとめたものである。その結果、第 1 位は、コミュニケーション能力(話し方・表現力、声かけ)34 人であった。

第 2 位は、プレーヤー第一の指導法(尊重、個に応じた/公平な指導)32 人であった。

第 3 位は、資質向上(コーチ教育、資格制度、プログラム化)19 人であった。そして、第 4 位は、意識改革(謙虚さ、開放的な性格)14 人であった。

第 1 位と第 2 位の回答結果は、これまで繰り返し重要性を指摘されてきた内容であり、改めて、コーチとプレーヤーが相互尊敬の関係を築くためには、プレーヤーの立場に立った指導をするとともに、プレーヤーとコミュニケーションを図ることが重要であることを示している。

第 3 位の資質向上と第 4 位の意識改革は、これまでのコーチ養成が必ずしも十分ではなく、資格制度を導入したり、コーチ養成のプログラム化を図ったりすることで、グッドコーチ教育の徹底が求められていると考えられる。

【コーチ向けアンケート調査まとめ】

グッドコーチに求められる資質能力のうち重要度が高いと示されたことは、「グッドコーチに求められる資質能力(重要度)」や「指導活動において大切にしていること」における競技能力やパフォーマンスの向上、ゲームでの勝利を目指すこと以上に人間的な成長を望んでいることが明らかになった。

特に「社会の一員であることを自覚し、ルールやマナー、エチケットを守ることができる」「人格を尊重し、暴力やハラスメントなどはしない、許さない」「関係するすべての人に感謝の気持ちを持つことができる」について高い意識が確認された。

また、習熟度(身につけている)については、重要と考える要素はおおむね習熟している(身につけている)と認識しているが、自己の持つ能力を指導力として発揮することに関しては十分には習熟していない(身につけていない)と認識している。

指導活動において大切にしていることは、「全力を尽くすこと」「礼儀を大切にすること」「スポーツの喜びや楽しさを伝えること」であり、「勝利を目指すこと」「体力や競技力を高めること」は低く、勝利という結果に対してこだわりすぎるよりも伸び伸びと全力でプレーしてくれることに期待していることがうかがわれた。

コーチングにおいて認識している課題については、スポーツが社会に対して大きな影響力があり、指導に携わるコーチの態度や言動もプレーヤーの価値観や未来に対して、直接、影響を及ぼすことの重大さを自覚していることがうかがえる。

また、コーチングの難しさとしては、「個々のプレーヤーとのコミュニケーションの取り方」を課題とするポイントが高く、コーチング場面において必要な知識やスキルとしても「コミュニケーションスキル」のポイントが高かった。そして、コミュニケーションスキルを向上させることが、暴力根絶の一助になるという意識も高い。

一方、スポーツ指導活動における体罰や暴力について、調査対象となったコーチの中に、これまで活動中の暴力行為やハラスメントを見たり聞いたりしたことがあるだけでなく、実際に自分自身が行ったことがある者も一定数存在することが明らかになった。

さらに、「プレーヤーとの信頼関係があれば体罰・暴力が許される、むしろある程度必要である」と考える者も一定数存在するとともに、活動中の暴力行為やハラスメントに対する寛容な態度・姿勢がみられる結果も見られることから、コーチングにおける課題としての体罰問題の根深さがうかがい知れる。

コーチング場面において必要と感じている知識・スキルとしては、「コミュニケーションスキル」「指導対象者に応じた指導法」であり、今後習得したい知識・情報については、「スポーツ科学・専門知識」「最新の指導・練習法」であった。

プレーヤー向けアンケート

①グッドプレーヤーに求められる資質について

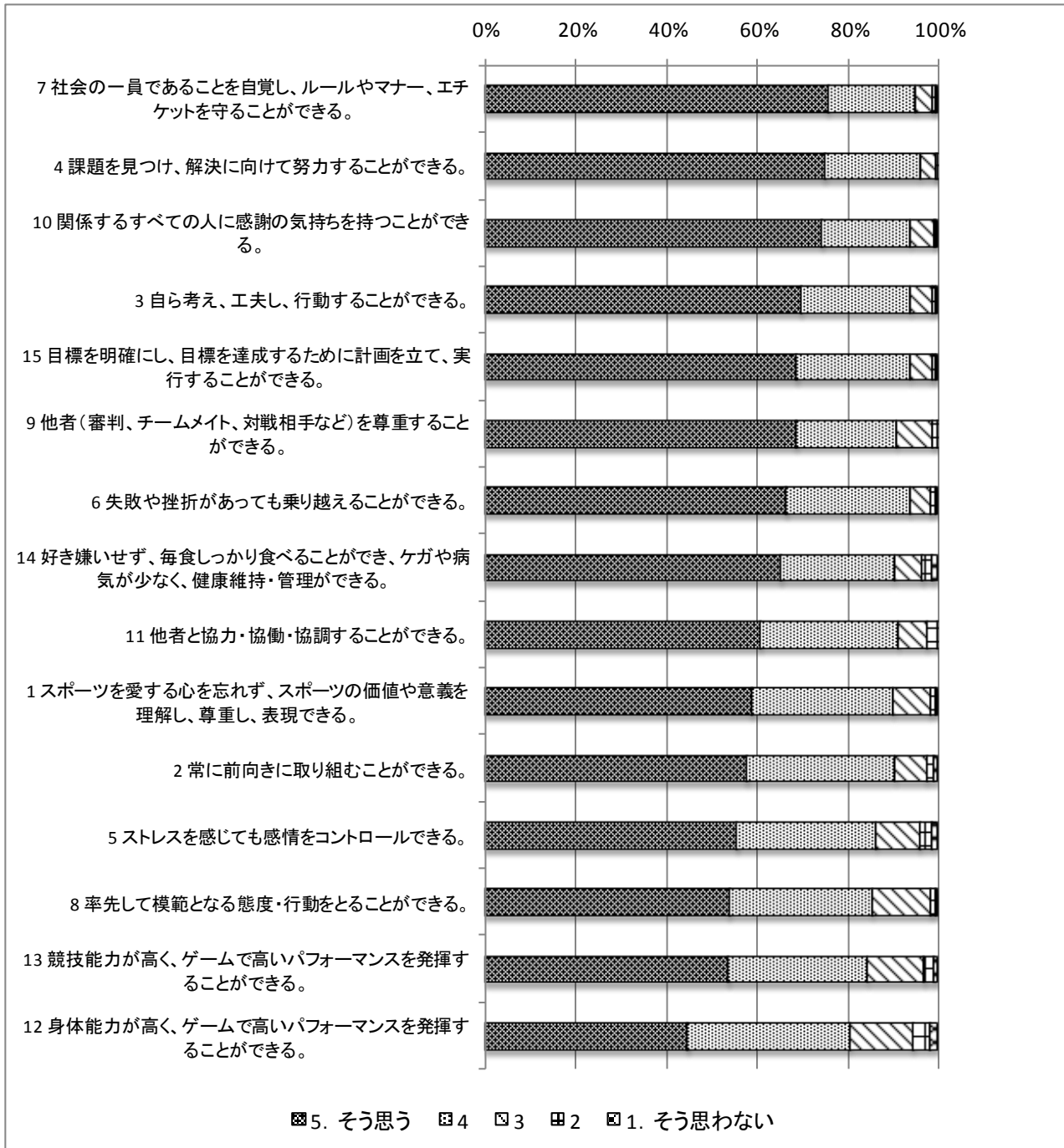


図 6 グッドプレーヤーに求められる資質に関する体育系大学の学生の認識(重要度)

【グッドプレイヤーに求められる資質について(重要度)】

図 6 は、グッドプレイヤーに求められる資質について、重要性が高い順に並べて示したものである。グッドプレイヤーに求められる資質として、体育系大学の学生が重要性について「5. そう思う」と回答した割合が最も多かったのが、第 1 位「7. 社会の一員であることを自覚し、ルールやマナー、エチケットを守ることができる(75.7%)」であった。2 位以下は、次のとおりであった。第 2 位「4. 課題を見つけ、解決に向けて努力することができる(75.1%)」、第 3 位「10. 関係するすべての人に感謝の気持ちを持つことができる。(74.5%)」、第 4 位「3. 自ら考え、工夫し、行動することができる。(69.8%)」、第 5 位「15. 目標を明確にし、目標を達成するために計画を立て、実行することができる。(68.9%)」の順であった。

逆に 15 項目の質問において「重要だと思う(5)」と回答した割合が少なかったものからみると、第 15 位「12. 身体能力が高く、ゲームで高いパフォーマンスを發揮することができる(44.9%)」、第 14 位「13. 競技能力が高く、ゲームで高いパフォーマンスを發揮することができる(53.8%)」、第 13 位「8. 率先して模範となる態度・行動をとることができる(54.0%)」、第 12 位「5. ストレスを感じても感情をコントロールできる(55.8%)」、第 11 位「2. 常に前向きに取り組むことができる(57.9%)」となった。

体育系大学の学生がグッドプレイヤーに求める資質としては、ゲームで高いパフォーマンスを發揮することの重要性が低く、社会の一員としてのふるまいを最も強く求めるという結果となったことは非常に興味深い。ただ、ゲームで高いパフォーマンスを發揮するという 2 項目が質問項目中では低い評価となったものの、およそ半数が「重要だと思う」と回答していたことから、高いパフォーマンスの發揮を求めていると解釈することはできず、今回質問した 15 項目中では相対的に低い評価であったと捉えるべきだろう。

第 1 位と第 3 位であった「社会の一員であることを自覚し、ルールやマナー、エチケットを守ることができる」と「関係するすべての人に感謝の気持ちを持つことができる」については、対他者に関する内容であり、第 2 位「課題を見つけ、解決に向けて努力することができる」、第 4 位「自ら考え、工夫し、行動することができる」、第 5 位「目標を明確にし、目標を達成するために計画を立て、実行することができる」は対自己に関連する項目であるといえる。14 位と 15 位に位置した質問項目が競技での高いパフォーマンスの發揮に関するものであったが、6 位から 10 位までの結果も含め、これらの結果からみると体育系大学の学生はパフォーマンスもさることながら、プレイヤーの対他者や対自己の能力、言い換えれば社会性や人間性に関する資質をグッドプレイヤーに対して求めていると言えるだろう。

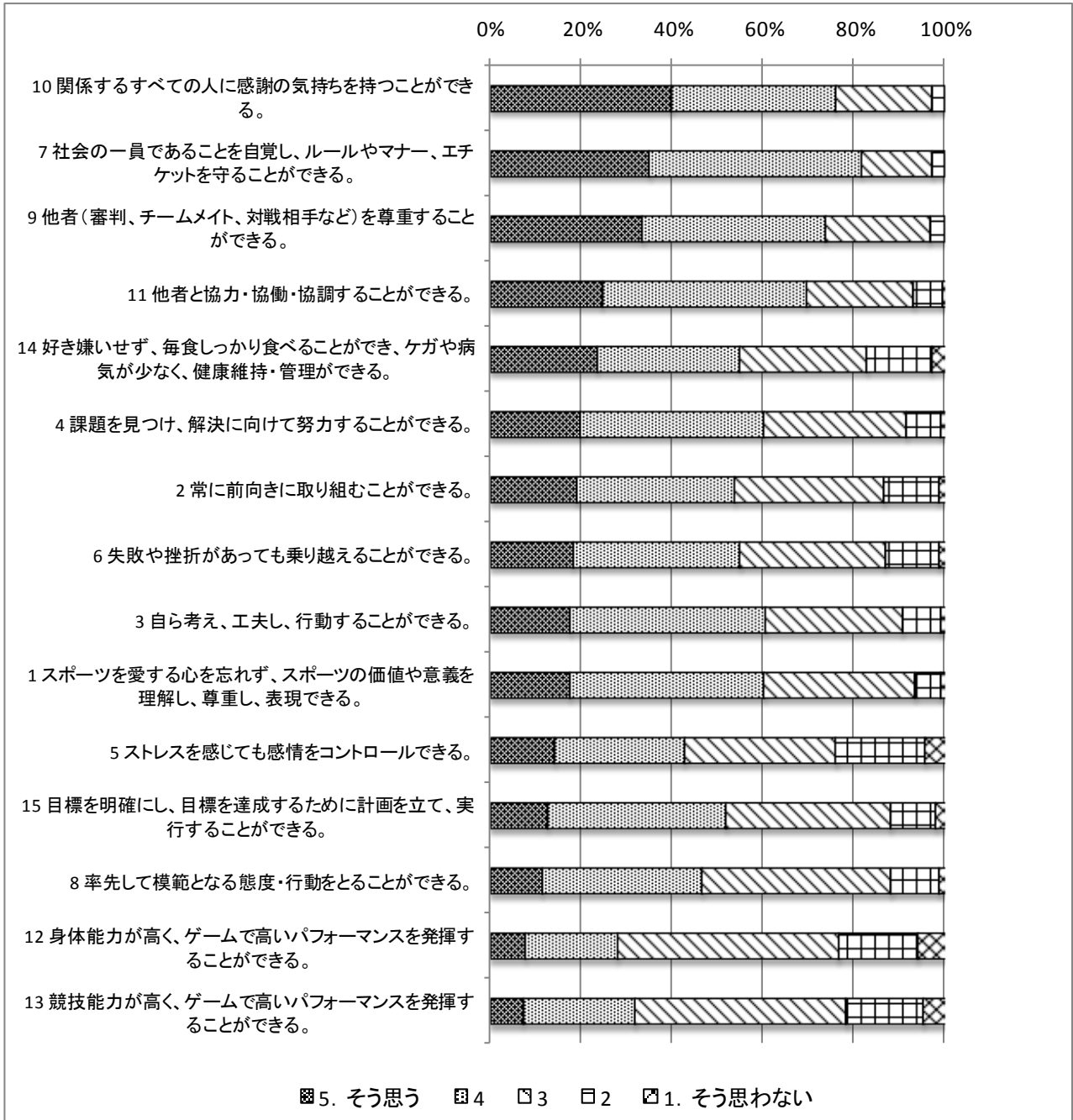


図7 グッドプレイヤーに求められる資質に関する体育系大学の学生の認識(習熟度)

【グッドプレーヤーに求められる資質について(習熟度)】

図 7 には、グッドプレーヤーに求められる資質について、回答者自身がどの程度身につけていると思っているのか(習熟度)について尋ねた結果を「5. そう思う」と答えた数が多い順に並べたものである。

図 6 の重要度に関する結果では、「5. そう思う」と答えた割合は $63.4 \pm 8.8\%$ (全 15 項目の割合の平均±標準偏差)であったのに対して、習熟度では $20.1 \pm 9.4\%$ であった。

この結果から、ほとんどの項目についてプレーヤーが身につけるべきであると評価されているにも関わらず、体育系大学の学生はそれらを自らが習得できているかどうかについては疑問に感じていることが読みとれる。

コーチとしては、このギャップを埋めていくことができるかどうかを鍵になると考えられる。

自らが習得できていると感じている順番についてみると、「5. そう思う」と答えた率が高いの順に「10.関係するすべての人に感謝の気持ちを持つことができる(227 件、39.8%)」、「7.社会の一員であることを自覚し、ルールやマナー、エチケットを守ることができる(200 件、35.1%)」、「9.他者(審判、チームメイト、対戦相手など)を尊重することができる(191 件、33.5%)」となっており、この 3 項目とそれ以外の項目の間にはやや大きな開きがあると読み取れる。

また回答で 4 および 5 の肯定的な回答をした者を合計すると、それぞれ項目 10 は 76.0%、項目 9 は 73.7%となり、第 4 位の「11.他者と協力・協働・協調することができる」は 69.5%で、この 3 項目とその他の項目の間にもやや大きな差を感じ取ることができる。

この 3 項目はいずれも對他者(人、社会)の項目であり、回答した体育系大学の学生は、対自己やスポーツパフォーマンスそのものよりも對他者に関わる能力を身につけていると感じていることが読み取れた。

②グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質

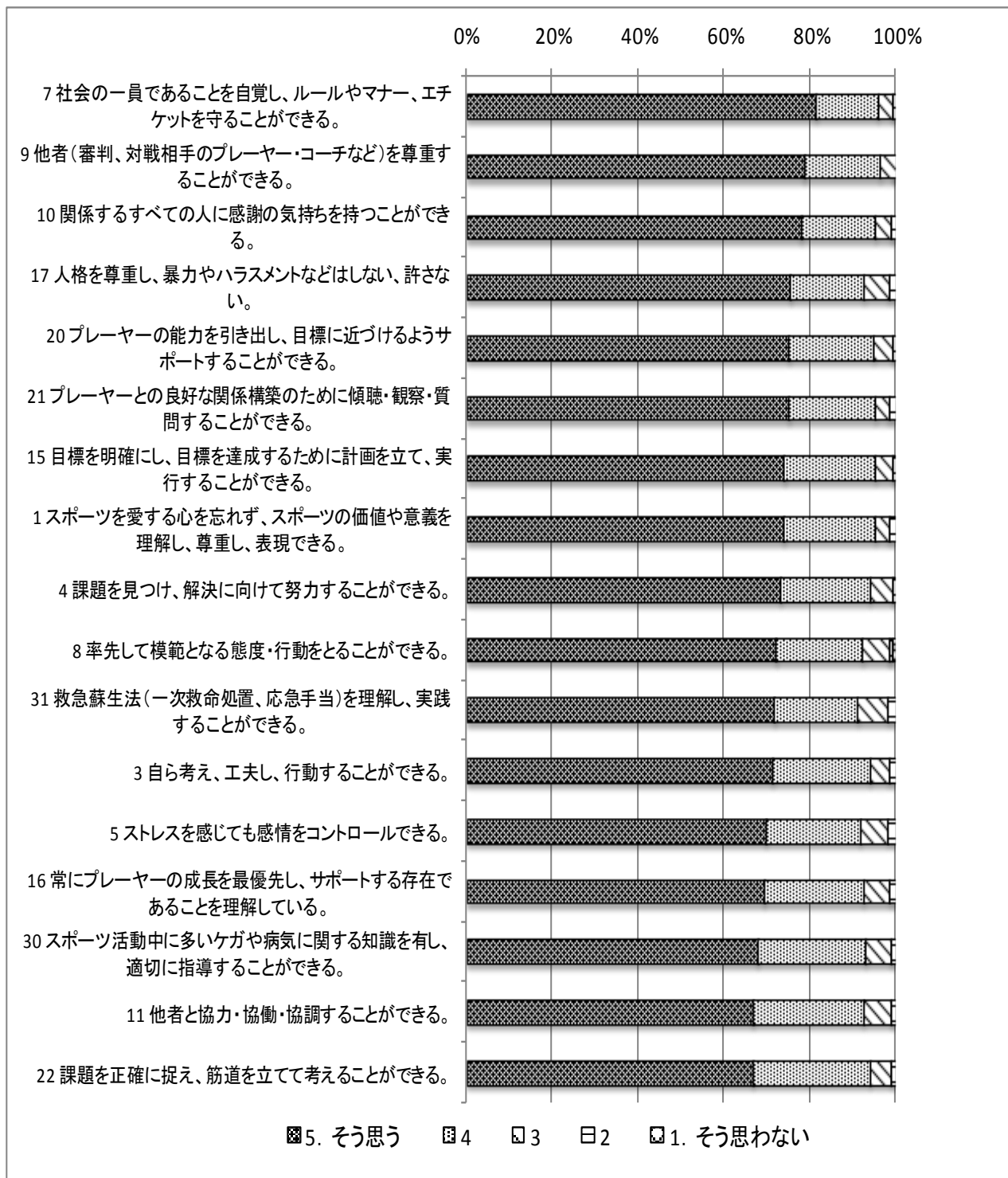


図 8-1 グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質に関する
体育系大学の学生の認識（重要度）

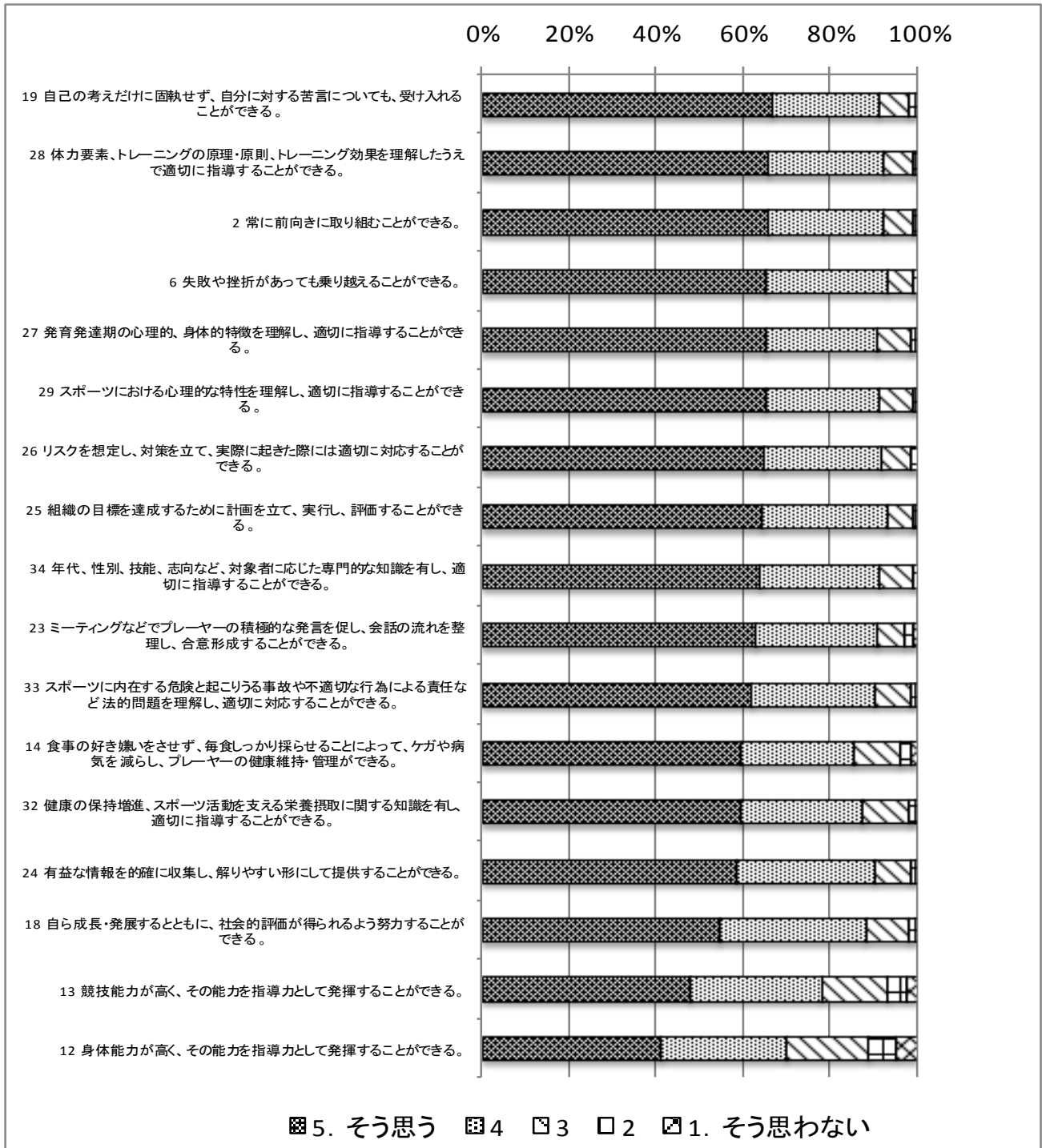


図 8-2 グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質に関する
体育系大学の学生の認識(重要度)

【グッドコーチに求められる資質について(重要度)】

図 8-1 および 8-2 は、グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質(思考・態度・行動・知識・技能)について、それぞれの質問項目(全 34 項目)の重要度を「1. そう思わない」から「5. そう思う」までで回答させた結果にもとづき、「そう思う」と回答した数が最も多いものから並べたものである。グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質として、第 1 位となったのは「7. 社会の一員であることを自覚し、ルールやマナー、エチケットを守ることができる(81.4%)」であった。そして、第2位から5位までは順に、「9.他者(審判、対戦相手のプレーヤー・コーチなど)を尊重することができる(78.6%)」、「10. 関係するすべての人に感謝の気持ちを持つことができる(78.9%)」、「17.人格を尊重し、暴力やハラスメントなどはしない、許さない(75.4%)」、「20. プレーヤーの能力を引き出し、目標に近づけるようサポートすることができる(75.1%)」、「21 プレーヤーとの良好な関係構築のために傾聴・観察・質問することができる(75.1%)」であった(20と21の項目は回答数が同数であったため第5位として両方を記載)。

逆に「そう思う」の回答数が少なかった順に質問項目をあげると、第 34 位が「12. 身体能力が高く、その能力を指導力として発揮することができる(41.2%)」であった。そこから第 33 位「13. 競技能力が高く、その能力を指導力として発揮することができる(47.7%)」、32 位「18. 自ら成長・発展するとともに、社会的評価が得られるよう努力することができる(54.6%)」、31 位「24. 有益な情報を的確に収集し、解りやすい形にして提供することができる(58.4%)」、30 位が同数で「32. 健康の保持増進、スポーツ活動を支える栄養摂取に関する知識を有し、適切に指導することができる(59.5%)」と「14 食事の好き嫌いをさせず、毎食しっかり採らせることによって、ケガや病気を減らし、プレーヤーの健康維持・管理ができる(59.5%)」であった。ただし、特記すべき事は 34 項目中 32 項目で「5. そう思う」と答えた割合が 50%を超え、4 と 5 と答えたものを合わせると、質問項目「12. 競技能力が高く、その能力を指導力として発揮することができる」と「12. 身体能力が高く、その能力を指導力として発揮することができる」を除いた 32 項目で 85%を超える回答が得られたことである。さらに、質問項目 14、32、18 以外は 4 及び 5 の肯定的な回答をした者が 90%を超えていた。

否定的な回答についてしてみると、他と比べて 1 と 2(1 は「そう思わない」と回答した者が比較的多かった(1 と 2 の合計が 2%以上のものを抽出)の)が「12.身体能力が高く、その能力を指導力として発揮することができる(11.1%)」、「13. 競技能力が高く、その能力を指導力として発揮することができる(6.7%)」「14. 食事の好き嫌いをさせず、毎食しっかり採らせることによって、ケガや病気を減らし、プレーヤーの健康維持・管理ができる(3.9%)」「23. ミーティングなどでプレーヤーの積極的な発言を促し、会話の流れを整理し、合意形成することができる(2.8%)」であった。

図 8-1 および 8-2 に並んだ 34 項目を俯瞰すると、理念や哲学観、モラルといった人間性に関する項目が比較的上位に集まり、よりスポーツ教養とも言えるような項目がそれに続いている。そして、先のグッドプレーヤーに求められる資質と同様に、グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質についても、競技能力や身体能力が高く、それらを指導力として発揮することができるという項目は最も低い評価となった。

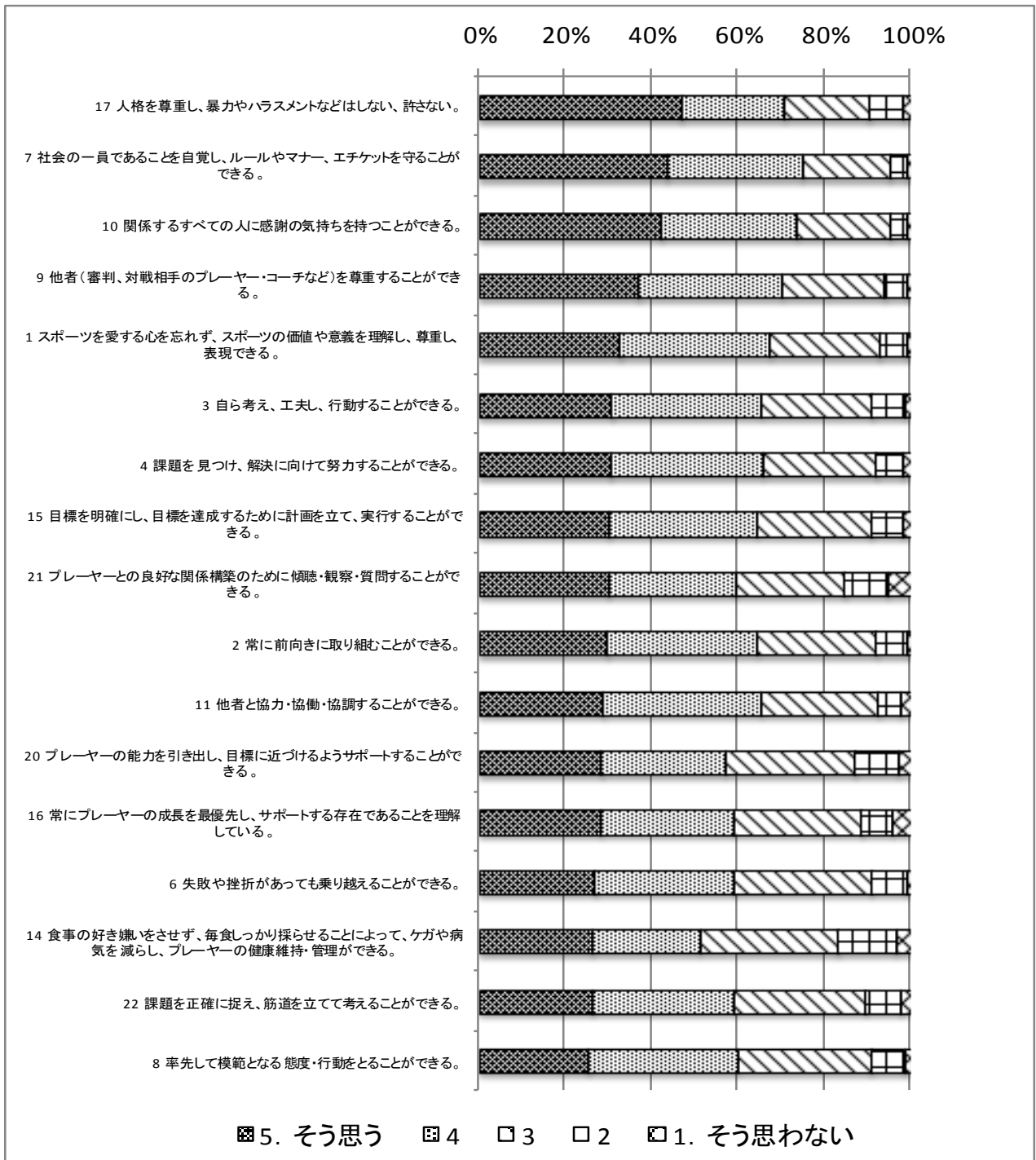


図 9-1 グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質に関する
 体育系大学の学生の認識(習熟度)①

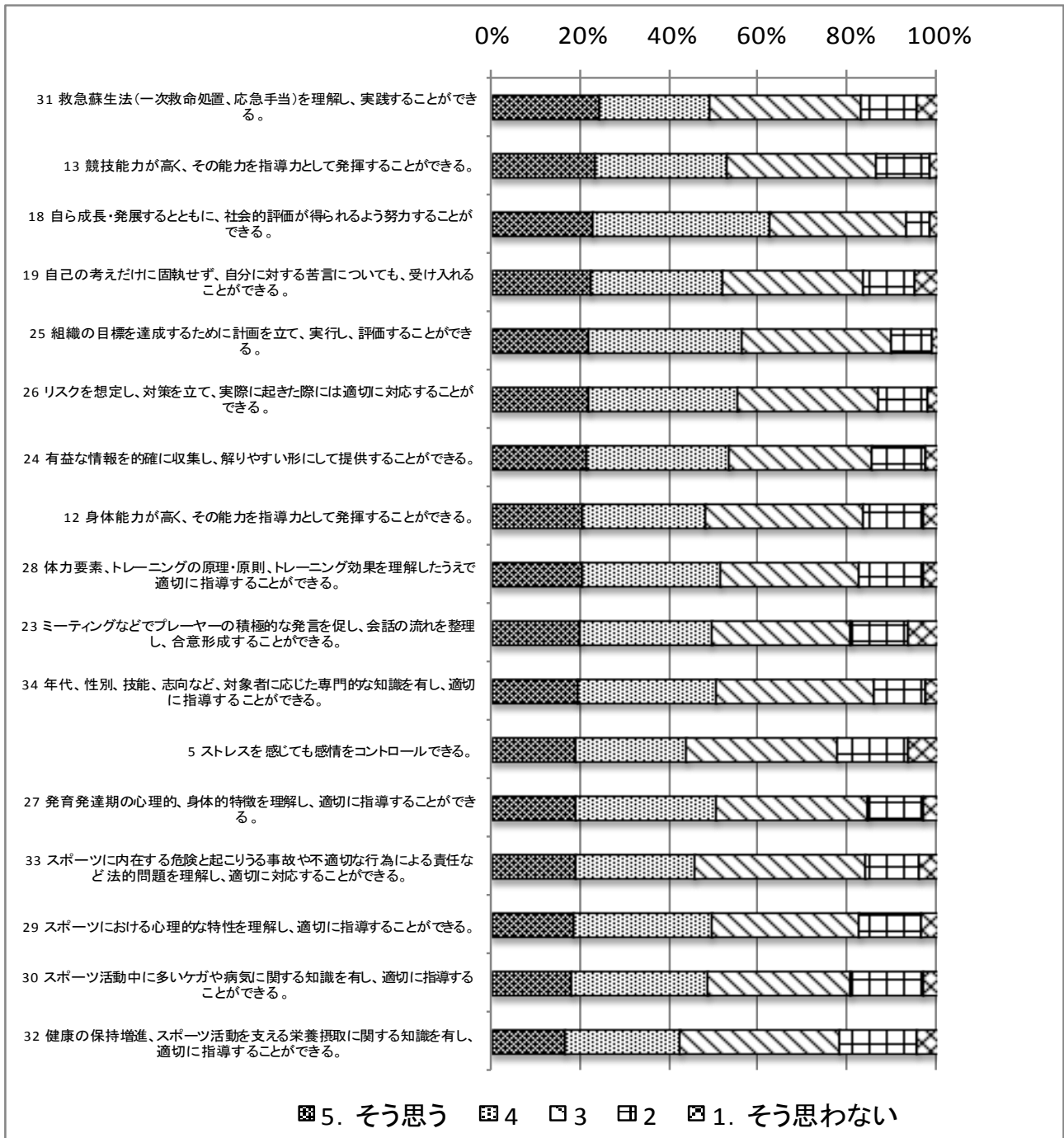


図 9-2 グッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質に関する
 体育系大学の学生の認識(習熟度)②

【グッドコーチに求められる資質(習熟度)】

図9-1と9-2は先に示したグッドプレーヤーを育成するコーチに求められる資質の重要度を尋ねた質問項目と同じものに対して、回答者を指導しているコーチにどの程度身につけているのか(習熟度)を回答してもらった結果を、5. そう思う(身につけている)と答えた数の多い順に並べたものである。各項目の重要度について5と回答した者の割合は全項目平均として $66.8 \pm 8.3\%$ であったのに対し、身につけているかどうかについて5と回答した者の割合は $26.2 \pm 7.5\%$ であった。回答4と5を合計した値でみると、重要度の平均値は $91.3 \pm 5.0\%$ であったのに対し、習熟度の平均値は $57.3 \pm 8.6\%$ であった。

5と回答した割合が20%を下回った7項目を割合の少なかった順に示すと以下の通りとなる。

最も割合が低かったのが「32.健康の保持増進、スポーツ活動を支える栄養摂取に関する知識を有し、適切に指導することができる(16.5%)」で、次いで「30.スポーツ活動中に多いケガや病気に関する知識を有し、適切に指導することができる(18.1%)」、「29.スポーツにおける心理的な特性を理解し、適切に指導することができる(18.6%)」、「33.スポーツに内在する危険と起こりうる事故や不適切な行為による責任など法的問題を理解し、適切に対応することができる(18.8%)」、「27.発育発達期の心理的、身体的特徴を理解し、適切に指導することができる(18.8%)」、「5.ストレスを感じても感情をコントロールできる(18.8%)」、「34.年代、性別、技能、志向など、対象者に応じた専門的な知識を有し、適切に指導することができる(19.3%)」であった。

この7項目のうち、「5. ストレスを感じても感情をコントロールできる」以外は、栄養、傷害、心理、法律、発育発達に関する知識と実践力に関するものであった。

これらは現在、日本体育協会の公認スポーツ指導者制度で用いられているテキストでも触れられている内容である。コーチ養成プログラム等で得た知識をいかに実践の知に変換するかが課題であると考えられる。また、重要度では全体の13番目にあつた「5. ストレスを感じても感情をコントロールできる」の項目が習熟度で5番目に低い順位であつたことは懸念材料であると言える。体罰や暴力などの行き過ぎた指導は、自らの感情をコントロールできないことが原因の一つとして挙げられる。

肯定的な側面として、重要度で最も順位の高かつた「7. 社会の一員であることを自覚し、ルールやマナー、エチケットを守ることができる」については習熟度でも2番目に位置していたことが挙げられる。同様に重要度で4番目の「17.人格を尊重し、暴力やハラスメントなどはしない、許さない」が習熟度では第1位であつたことも好ましい結果であると言えるだろう。

しかし、質問項目17が1位であるというデータは注意を持って解釈を行う必要がある。この質問項目に対して1および2と答えていた者、つまり逆の認識をしている者が9.6%もいたことは、同様の観点で言えば、重要度が6番目で、習熟度では9番目にランク付けされた「21. プレーヤーとの良好な関係構築のために傾聴・観察・質問することができる」についても、15.3%が1および2と回答しており、対他者の能力に問題を抱えるコーチが少なくないと考えられることができる。

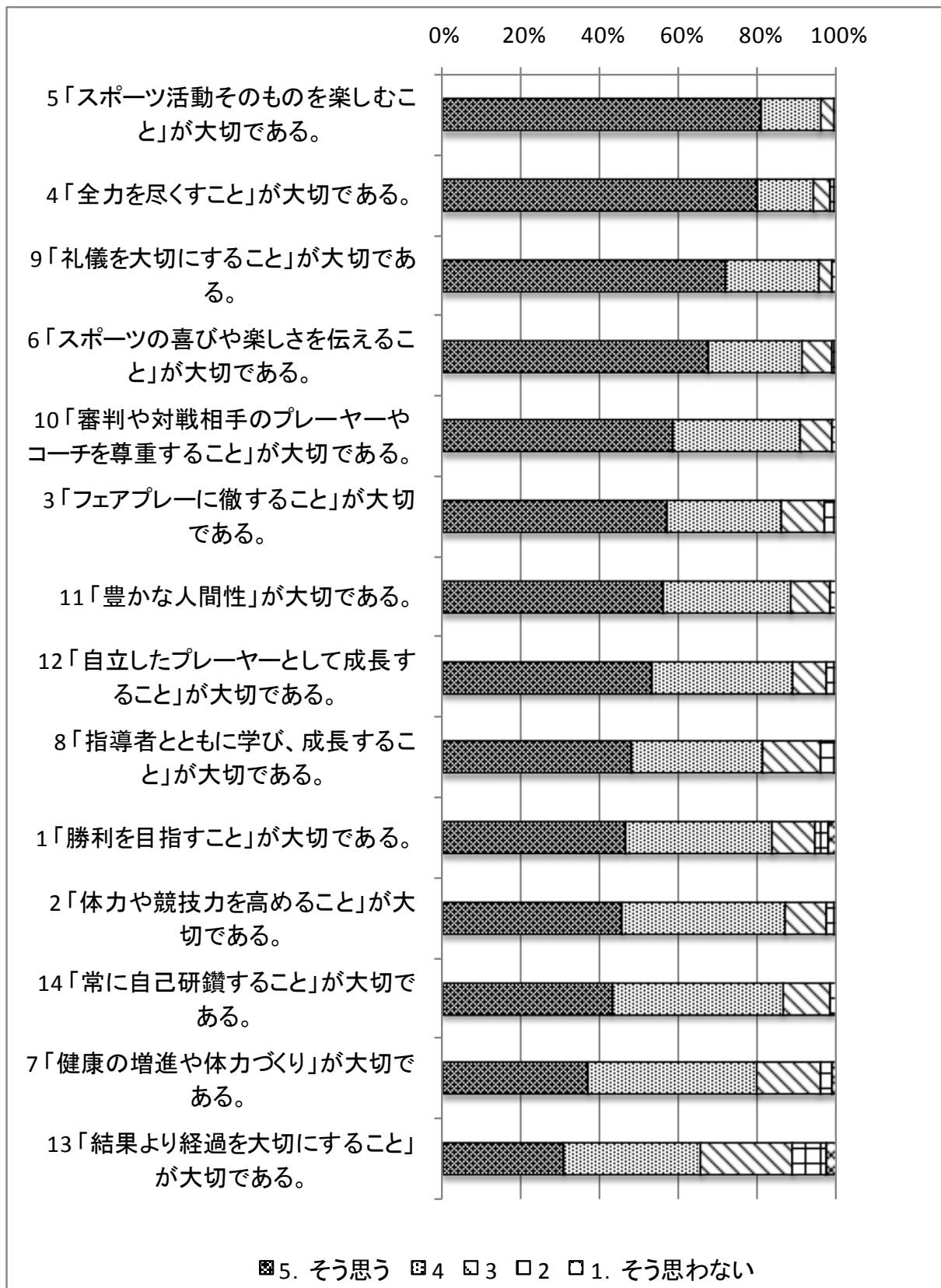


図 10 スポーツ活動において大切だと思っていること

【スポーツ活動において大切だと思っていること】

図 10 は「スポーツ活動において大切だと思っていること」について調べた結果である。「5. そう思う」と答えた数が多い順に上から表示している。5 と回答した者が最も多かったのは「5. 『スポーツ活動そのものを楽しむこと』が大切である」で 462 件 (81.1%) であり、5 と 4 をあわせると 96.0% に達した。次いで、「4. 『全力を尽くすこと』が大切である」が 79.8% であり、5 と 4 をあわせると 94.4% であった。

最も 5 と回答した数が少なかったのは「13. 『結果より経過を大切にすること』が大切である」で、30.7% であった。この質問項目 13 については 4 および 5 と答えた者があわせて 65.8% と、他の項目よりもやや低い値であったが、全体としてはこの質問紙で挙げた内容についてはほぼ大切なことだと感じていることが読み取れた。

一方、少数ではあるが、1 および 2 と回答した人数が相対的に多かったものは、「13. 『結果より経過を大切にすること』が大切である」(10.9%)、「1. 『勝利を目指すこと』が大切である」(5.3%)、「『健康の増進や体力づくり』が大切である」(4.0%) であった。スポーツにおける結果をどのように解釈すべきで、どのようにプレイヤーに対して結果の意味を伝えていくべきか、しっかりと考えておく必要がある。

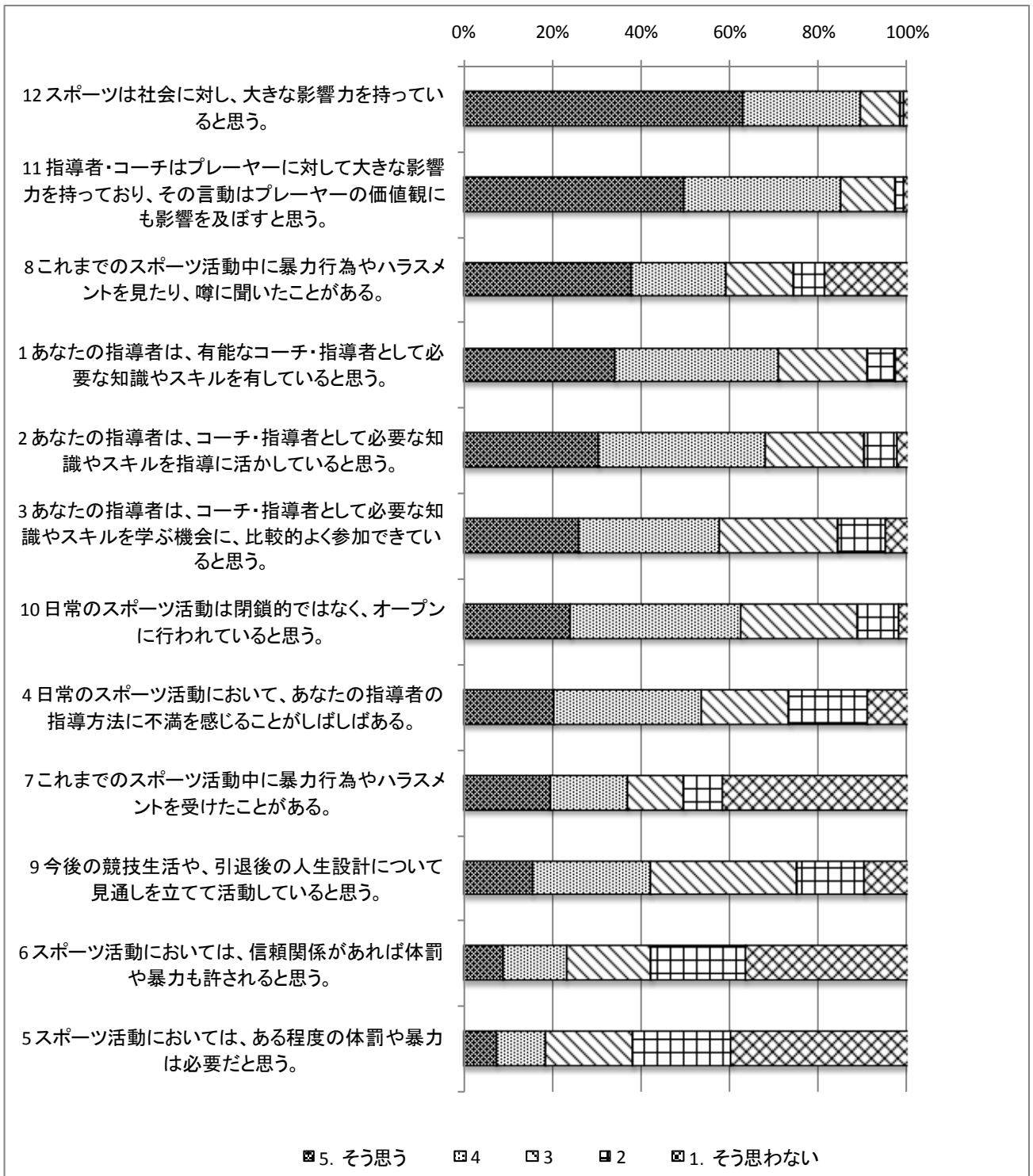


図 11 スポーツにおける課題

【スポーツにおける課題】

図 11 はスポーツにおける課題について答えてもらった結果であり、「5. そう思う」と答えた数が多い順に上から並べて表示したものである。

最も回答 5 が多かった質問項目は「12. スポーツは社会に対し、大きな影響力を持っていると思う」で 62.9%であった。次いで「11. コーチはプレイヤーに対して大きな影響力を持っており、その言動はプレイヤーの価値観にも影響を及ぼす」で 49.7%であった。

この2つについて回答 5 と 4 をあわせると、それぞれ 89.6%、85.2%と非常に高い数値を示した。回答者のうち 19.6%がこれまでに暴力行為やハラスメントを受けたことがあるかとの質問に対して 5 と答え、4 までをあわせると 37.1%にも達した。この質問に対して 1 もしくは 2 と答えた者は全体の 50.4%であることを考えれば、スポーツ活動における暴力行為やハラスメントを撲滅するための活動を精力的に展開していかななくてはならないことは明白である。また、「5. スポーツ活動においては、ある程度の体罰や暴力は必要だと思う」については「5. そう思う」と答えた者が 7.6%、4 もあわせると 18.6%もいた。「6. スポーツ活動においては、信頼関係があれば体罰や暴力も許されると思う」については 5 が 9.0%、4 もあわせると 23.3%に達した。

今後、コーチへの道を歩む可能性の高い体育系大学の学生だけに、大学の教育課程を通して、これらの数をゼロにしていく努力が必要だろう。

スポーツ界における課題について(自由記述)

「日本スポーツ界において、暴力やハラスメントが起きてしまっていたのはどのようなことに原因があると思うか」という質問に対して自由記述による回答を集めた。得られた記述データから一つの意味をなす文(ミーニングユニット:MU)に分け、類似したものを集め、カテゴリー化した。その結果、560個のMUが得られ、14のカテゴリーとその他に分類することができた(表8)。

表8 暴力やハラスメントが起きていた原因に関する意識

カテゴリー	ミーニングユニット数	
	(個)	(%)
勝利の過度な追求	88	15.7
コーチの知識・指導力不足	69	12.3
コーチの執着的情熱による指導	65	11.6
日本の歴史的背景と精神論	63	11.3
体罰を容認する日本社会	45	8.0
意識のズレ	34	6.1
コーチの過去の経験の繰り返し	34	6.1
コーチの感情制御力欠如	31	5.5
一方向性コミュニケーション	28	5.0
プレイヤーの個人的特性やプレイヤー側の問題	25	4.5
タテ社会	21	3.8
信頼関係の欠如	20	3.6
コーチの個人的特性	13	2.3
体罰の効果	8	1.3
その他	16	2.9
合計	560	100.0

最も多くのMUが得られたのは「勝利の過度な追求」(88個)であった。このカテゴリーに分類されたものには「いきすぎた勝利至上主義により、勝てればそれまでやってきたことはすべて正しいと思ってしまうこと」や「もちろん勝つことは大事だが、指導する側が勝ちにこだわりすぎている」などが含まれている。また、「勝ちに固執しすぎている。周りからのプレッシャーが重くなってプレイヤーに上手くなってほしいのに同じことを何度もいつづけていると不安になってきてどうしたらいいのかわからず感情的になってしまうのだと思う」という意見のように、外部の勝利至上主義によるプレッシャーについて触れているものも散見された。

次に多かった「コーチの知識・指導力不足」(69個)には、「コーチの知識や技術が足りなく、上手く言葉だけでは説明出来ない為に暴力などで解決しようと思っているコーチが増えたから」などが含まれる。「コーチの執着的情熱による指導」には「コーチが熱血すぎて、冷静さを忘れてしまうこと

が原因だと思う。しっかりプレーヤーを理解することが重要だと思う」などが含まれ、情熱の方向性を誤ってしまうことが原因であると考えている者が多いことが分かる。指導現場に足繁く通うには指導に対する情熱が必要であるが、その情熱が調和的なものであることが重要であろう。

「日本の歴史的背景と精神論」、「体罰を容認する日本社会」と「タテ社会」の3つは、コーチを取り巻く文化的な課題と捉えられる。

それぞれの例を挙げると、「日本の戦時中の体育のあり方である『強い身体を作る』という考え方が、今にも影響を及ぼしている」と考える。昔の『辛いことをしてなんぼ』『暴力は当たり前』といった考え方は、非常に根強い、「暴力やハラスメントをしていたコーチにも問題があると思うが、それだけでなく、その報告ができるような環境を作れなかった周囲の人間にも問題がある」と考える、「コーチとプレーヤーが対等でなく、師弟関係であること」などである。

「意識のズレ」では「コーチとプレーヤー間の考えの食い違い」、「コーチの過去の経験の繰り返し」では「監督・コーチがプレーヤー時代は暴力が許されて暴力を受けて強くなったと思っているから」、「コーチの感情制御力欠如」では「自分の理想通りにいかず、むしゃくしゃしてしまい、上手く言葉では伝えることができず手をあげてしまう」、「一方向性コミュニケーション」では「コーチのコミュニケーションが適切でないことによって、プレーヤーがそれを理解できず、結果的に暴力に頼ってしまう」などがある。

「プレーヤーの個人的特性やプレーヤー側の問題」では「プレーヤーの精神面の弱さ、能力不足」、「コーチに教えてもらっているにも関わらず反抗したり、改善する意思が見られない態度をとったから」といった意見があり、「コーチの個人的特性」では「コーチの人格」、「コーチが短気」といったものがあつた。

「信頼関係の欠如」では「コーチとプレーヤーの信頼関係が築けていない」ことが原因となり、言葉による指導がうまくいかず、暴力に訴えるような方法へと繋がるのではないかという意見とともに、「問題になるのはプレーヤーとコーチとの間の信頼関係がなっていないから」のような、信頼関係があれば体罰も許されるという意見も複数見られた。

「体罰の効果」では、「暴力やハラスメントをすることで、(ある程度までは)競技レベルが上がる」という事実があること」などが含まれている。

「その他」に分類されたものはカテゴリーを構成するのに十分な数が得られなかったものや、質問の意図(暴力やハラスメントの原因)とは関係のないものであつた。カテゴリー化することは行わなかったが、「女性のスポーツ参加率が低い」、「日本に限らず起こりうるので特別な原因があるとは思えない」といった興味深い回答も含まれていた。

これらのカテゴリーをもとに、仮説モデルを作成した(図12)。

「日本の歴史的背景と精神論」や「縦社会」といった文化的背景の中では「一方向性コミュニケーション」が生まれやすく、コーチは自らの学びの場を得ることが容易ではないため「コーチの知識・指導力不足」や「コーチの過去の経験の繰り返し」が起こりやすくなる。これらが情熱あるコーチに「コーチの執着的情熱による指導」を行わせやすい状況を作り出し、さらにはコーチ個人、さらには周辺からの「勝利の過度な追求」がそれに拍車をかける。

「タテ社会」の「一方向性コミュニケーション」では上位の者が下位の者に対して情報を伝達し、下位の者はそれに従うことになる。コーチングの現場で言えばコーチが上位者であり、プレイヤーが下位の者となる。この構造では上位の者の持つ考えが下位の者の考えよりも優れていることが前提となっているため、下位の者は上位の者からの指示に対して意見をすることは想定されていない場合が多い。また、上位の者は下位の者からの上申を快く思わないこともある。このような状況では下位の者の真意を知ることは難しく、それが原因となり両者の「意識のズレ」や「信頼関係の欠如」が起これると考えられる。

このような中、コーチの想定と異なる事象が起きた場合には、その事象を修正するための行動が発動されるが、その際に「コーチの感情制御力の欠如」があった場合には「暴力・ハラスメント」に繋がると考えられる。そして、「体罰の効果」がコーチや関係者によって確かめられると、「体罰を容認する日本社会」に繋がりがやすく、さらに「コーチの過去の経験の繰り返し」や「コーチの執着的情熱による指導」を行わせてしまう。

「暴力・ハラスメント」については「コーチの感情制御力の欠如」のみによって起こるものではなく、相手の立場になって考えられない「一方向性コミュニケーション」から直接引き起こされることもあるだろう。これらのプロセスは「コーチの個人的特性」や「プレイヤーの個人的特性やプレイヤー側の問題」といった要素の影響を受けて非常に複雑かつ動的な関わりの中で起こっていると考えられる。

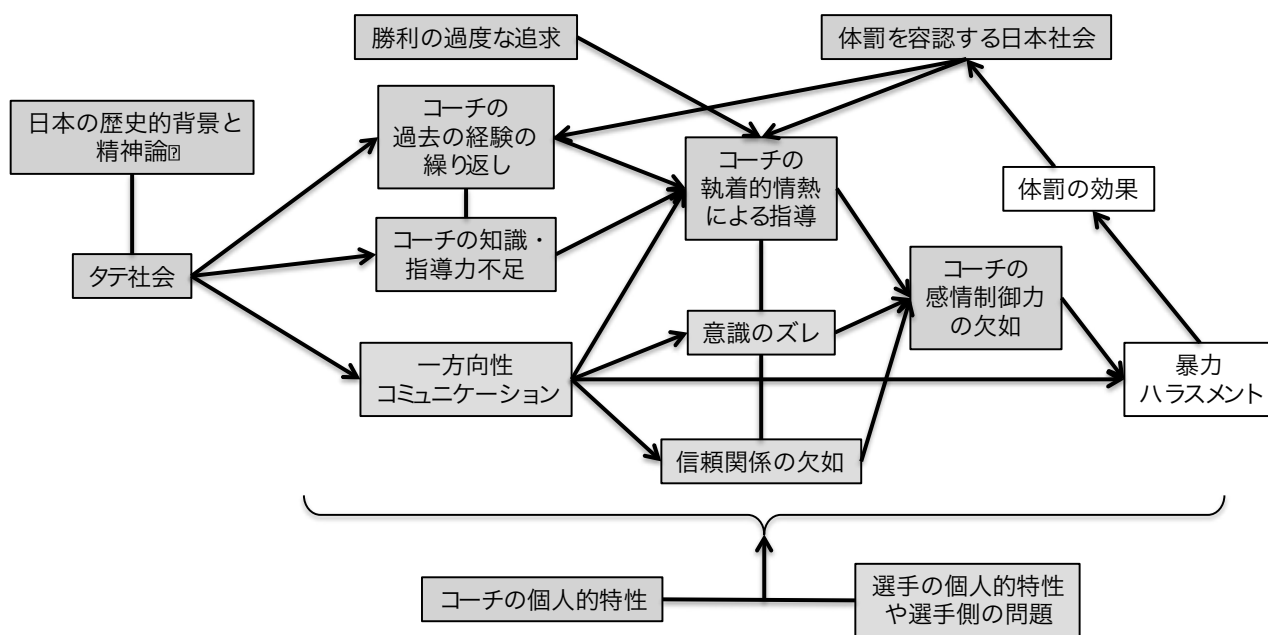


図 12 体育系大学の学生に対するアンケート調査から得られた暴力・ハラスメントが発生する仮説モデル

【プレーヤー向けアンケート調査まとめ】

プレーヤーが描くグッドプレーヤーとは、競技成績やパフォーマンスもさることながら、むしろ、社会人としての態度・行動や支えてくれる人々への感謝、自分自身の振る舞いや能力など、社会性や人間性に関する資質について重要視していることがわかった。

しかしながら、それらの資質能力が身につけているかどうかについては、自信がないと感じていることが読み取れた。

したがって、重要だと認識しつつも習得できていないということであり、言い換えれば、毎日のようにスポーツに関わりながらもグッドプレーヤーとしての資質能力が十分に身につけていないとも読み取れる。

また、他者への感謝、社会の秩序を守る、協力・協働・協調といったような対他者に関する資質能力は習得していると感じているものの、率先して模範的な行動をとる、目標に向かって努力する、感情をコントロールするなど、対自分に関する資質能力に自信のなさがうかがえる。

プレーヤーから見たグッドコーチについては、まず指導理念や指導哲学にあたる、モラルや人間性が重要であるとの認識が高い。次に、プレーヤーの能力を向上させるためのスキル、そして、スポーツの知識や技能といった順で重要度が高い。

一方、自分の競技成績が最も高かったときのコーチについて、習熟度をたずねたところ、栄養、外傷・障害、心理、法律、発育発達に関する実践力が低いと感じていることがわかった。「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)」の報告書でも、「知識・技能を学んでも、実際のコーチングの現場においては、自らが競技者として経験してきたコーチングの在り方に影響され、新しく得た知識・技能が十分に活用されない場合もある」との指摘もあり、コーチとして学んできた知識や技能を適切にプレーヤーに還元すること、「わかる」から「できる」へつなげることが大きな課題といえるかもしれない。

また、重要度では全体の13番目にあつた「感情のコントロール」が習熟度では最下位から5番目にあつた。体罰や暴力などの行き過ぎた指導は、自分の感情をコントロールできないことが原因の一つでもあるので、注意すべきである。

同様な観点から、人格の尊重や暴力の根絶について、9.6%の学生が、信頼関係を構築するためのコミュニケーションスキルについて、15.3%の学生が、コーチとして「習熟していない」と認識していることにも注意したい。

なお、回答者のうち「過去に体罰や暴力を受けた」ことがあると思われる人が37.1%に達し、さらに「ある程度は必要」が18.6%「信頼関係があれば許される」が23.3%となり、体罰や暴力を容認する傾向はまだ高いことがわかった。今後、コーチングの現場に立つ可能性の高い学生は、コーチングに関する価値観や理念・哲学を今まで以上に徹底して学ぶことが重要である。

まとめ

全体を通じて、コーチもプレーヤーも「グッドプレーヤーに必要な資質能力」と「グッドコーチに必要な資質能力」はほぼ同じ意識であることが示された。

以下、「グッドプレーヤー」と「グッドコーチ」とは何かをまとめてみたい。

グッドプレーヤーは、社会の一員であることを自覚し、支えてくれる人々への感謝を忘れず、失敗や挫折があっても、目標に向かって、自ら考え、工夫し、行動するとともに、仲間とともに努力できる人である。

グッドコーチは、コーチングそのものが社会的活動であることを意識し、プレーヤーの自立を促し、プレーヤーやプレーヤーを取り巻く関係者との信頼関係を構築した上で、競技能力やパフォーマンスを高めていく存在である。

(2)ヒアリング:目的、方法、結果及び考察

本事業では、スポーツ現場におけるコーチの役割や課題などについて精査することにより、新しい時代に求められるグッドコーチ像を描き出すとともに、コーチに求められる資質(思考・態度・行動・知識・技能)を身につけるために必要な教育内容を検討し、その育成過程において必修となる「モデル・コア・カリキュラム」の作成を目指している。ここでは、プレーヤー・コーチ像の導出とカリキュラム作成のための基礎資料を得るために、現役プレーヤーおよび競技団体推薦のコーチを対象とするヒアリングを実施した。

①ヒアリング会

日時:平成 26 年 11 月 15 日(土) 13:00~17:00

場所:フクラシア品川(高輪口)

参加者:

コーチ:奥野景介(公認水泳上級コーチ:早稲田大学)、木田京子(公認ソフトボール上級コーチ:園田学園女子大学)、須藤茂光(公認サッカー上級コーチ(JFA 公認 S 級コーチ):日本サッカー協会)、西野栄(公認テニス上級コーチ(JTAS 公認 S 級コーチ):シンズテニス)、根本研(公認バレーボール上級コーチ:日本体育大学)、山崎一彦(公認陸上競技コーチ:順天堂大学)

プレーヤー:池上淳平(アルティメット:大阪体育大学)、板崎直人(硬式野球:筑波大学)、坂野太一(アーチェリー:自衛隊体育学校)、田中亜里沙(レスリング:早稲田大学)、馬淵優佳(水泳飛込み:立命館大学)、山崎悠子(日本スポーツ少年団シニアリーダー:袋井アスレチッククラブ)

ワーキングメンバー:土屋裕睦(大阪体育大学)、伊藤雅充(日本体育大学)、半谷美夏(国立スポーツ科学センター)、深見英一郎(早稲田大学)、森丘保典(日本体育協会)、山浦一保(立命館大学)

オブザーバー:関伸夫(文部科学省)

事務局:岡達生(日本体育協会)、牧野耕(日本体育協会)

ファシリテーター:田中守(清水隆一コーチングカレッジ)、菅原賢二(東京ガス)

【ヒアリング会の流れ】

①オリエンテーション(趣旨説明、スケジュール確認)

②ファシリテーターによるアイスブレイク(参加者同士が話しやすい雰囲気を作る)

③プレーヤーとコーチに分かれてのグループ討議(テーマ:グッドプレーヤーとは)

<プレーヤー>

- ・憧れのプレーヤーは誰で、そのプレーヤーのどこが好きか?
- ・そのプレーヤーのどのようなところに影響を受けたか?彼等に共通する点は何か?
- ・今後、どのようなプレーヤーになりたいと思っているか?

<コーチ>

- ・自身の競技歴および指導歴を振り返り、印象に残っているのはどのようなプレーヤーか?
- ・そのプレーヤーは、どのような思考・態度・行動・知識・スキルを持っていたか?彼等に共通する点は何か?

・グッドプレーヤーとは、どのような人材だと思うか？

④両グループを交えての意見交換(討議内容の発表および意見交換)

⑤プレーヤーとコーチに分かれてのグループ討議(テーマ:グッドコーチとは)

<プレーヤー>

- ・これまで受けてきた・見聞きしてきた指導の中で、嫌な思いや不快を感じたことがあるか？その時コーチにどんなことに留意してもらいたかったか？
- ・コーチの指導によって成長を実感したことがあるか？それはどのような指導によるものか？
- ・グッドコーチとは、どのような人材だと思うか？
- ・コーチに学んでほしい(身につけてほしい)知識やスキルは何か？

<コーチ>

- ・自身の競技歴および指導歴を振り返り、印象に残っているのはどのようなコーチか？
- ・印象に残ったコーチは、どのような思考・態度・行動・知識・スキルを持っていたか？彼等に共通する点は何か？
- ・グッドコーチとは、どのような人材だと思うか？
- ・これまでの指導歴の中で、成果があがったと実感した、または難しさを感じた(失敗した)のはどのようなときか？そのときにどのような知識やスキルが必要だと思ったか？
- ・今までに学んだ知識やスキルで役に立っていること、さらに学びたい(身につけたい)知識やスキルは何か？

⑥両グループを交えての意見交換(討議内容の発表および意見交換)

⑦まとめ(グッドプレーヤーとは、グッドコーチとは、ヒアリング会の感想)

⑧グッドプレーヤー宣言、グッドコーチ宣言

⑨解散

グループ討議および意見交換によって整理・抽出されたグッドプレーヤー、グッドコーチ・バッドコーチのイメージ(キーワード)を以下に示す。

表9 ヒアリング会で抽出されたイメージ

グッドプレーヤー像(プレーヤーグループが理想とする具体的なプレーヤーのイメージ)

負けず嫌い、前向き、直向き、スポーツ(その競技)が好き、社会性が高い、好奇心がある、純真さ、楽しむ、謙虚、素直に取り組む、おごらない、あきらめない、くじけない、心が折れない、明るく元気(笑顔)、どろくさい、人望がある、真面目、常に全力、リーダーシップがある、オリンピック4回(成績が高い)、努力家、練習量が多い、裏方の仕事もできる、実力を発揮できる、常に進化している、向上心がある、アピールできる

グッドプレーヤー像(こんなプレーヤーを育成したい) *コーチグループ

応援される、立ち振る舞いが一流(安定している、人のせいにならない、ミスをかばい、一途)、貪欲、目標が明確でそれに向けて努力する、自ら考える、課題解決を考える、目的達成、持っている力を発揮する力、尊敬される、スポーツの良さを表現できる(メッセージを発信できる)、客観的視点で自分を見ることができる、セルフコントロールできる、自己肯定感が高い(これしかできなかった⇔ここまでできた)

グッドプレーヤー像(こんなプレーヤーになりたい) *プレーヤーグループ

真面目に取り組み、周囲にも良い影響を与えられる、常に明るく、前向きなプレーヤー、全力で取り組む、本気で取り組む、人間的成長を考えられる、応援してもらえる、後輩に慕われる、影響力のある発言、芯の強さの上に謙虚さがある、好きで楽しんで取り組んでいる、目標をしっかりと持っている、周囲を巻き込む、体調管理、結果だけでなく人間性が大事

グッドコーチとバッドコーチ(コーチグループ、プレーヤーグループでの発言まとめ)

GOOD COACH	BAD COACH
中長期的視点	失敗を責める(ほめない、エゴ、感情的)
プレーヤー、チームと向き合う	コーチを人前で叱る(怒る)
公平な態度	差別的な発言(見下されている)
常に学び続ける	引き際が悪い
信念がある(自分の基準を持っている)	学ばない
プレーヤーから学ぶ	萎縮させる
情熱がある	成功をほめない
寛容である(ダメと叫ばない)	うそつき
バイタリティがある	思いやりがない
可能性を引き出す	自分の価値基準や経験の押し付けで判断する
プロセスを評価できる	自分だけ叱られる(不平等)
共感してくれる(喜びも悲しみも)	気分が変わる→感情的(悪い意味)
一緒に研究してくれる、考えてくれる	言っていることが日によって変わる
信じてくれる(良いときも、悪いときも)	目先の勝負しか考えられない(勝利至上主義)
プレーヤーの色に合わせて指導できる	長期的視野がない(今だけ良ければ)
結果に左右されず指導してくれる	ネガティブな発言
チャンスを与えてくれる	言い訳をする→失敗を認めない
信頼できる	過去を引き合いに出す
怖い(当時は嫌だったけど、今は感謝している)	暴力
カウンセリングマインドを持ったコーチングができる	型にはめたがる

【ヒアリング会まとめ】

表9に示されたイメージ(キーワード)を概観すると、コーチ側とプレーヤー側双方がイメージする「(になりたい・育てたい)グッドプレーヤー像」には高い共通性が見てとれる。また、「グッドコーチ・バッドコーチ像」で挙げられている内容についても、「常に学び続ける⇔学ばない」、「中長期的視点⇔長期的視野がない」など、そのほとんどが反意関係にあり、コーチの資質を評価する観点にも一定の共通性がみられるといえる。したがって、ここに挙げられた内容について、ワーキングにて作成し

たグッドプレーヤー像、コーチ像(仮説)の枠組みにしたがって整理し(表 10)、コーチからのヒアリングによって導出されるコーチングについての考え方やコーチング実践の内容を付け合わせることに
よって、グッドコーチ像をより明確にすることが可能になると考えられる。

表 10 ヒアリング会で抽出された内容(キーワード)の分類

【グッドプレーヤー】		人物像(思考、態度、行動)	キーワード
② 人間力	①心構え (スポーツ精神、哲学)	スポーツを愛する心を忘れず、その意義と価値を理解し、表現できる	人間的成長を考えられる、スポーツ(その競技)が好きで愉しんでいる、スポーツの良さ(意義や価値)を表現できる
	対自己	常に前向きな気持ちを持ち、自ら考え工夫し、行動できる	目標が明確、自己肯定感(有能感)が高い、明朗活発(笑顔)、直向き(一途、素直)、真面目(本気)、向上心がある、貪欲、好奇心がある、常に進化している
		自分をコントロールしながら課題に対応し、失敗(敗北)や挫折があっても乗り越えることができる	客観的に自己観察できる、セルフコントロールできる、負けず嫌い、あきらめない(くじけない、心が折れない)、芯が強い、努力家(どろくさい、練習量が多い)、パフォーマンスが安定している(実力を発揮できる)
	対他者 (人、社会)	社会の一員であることを自覚し、模範となる態度・行動をすることができる	社会性、リーダーシップ、メッセージを発信できる(アピールできる)、周囲を巻き込む(良い影響を与えられる)、人のせいにならない
常に感謝の気持ちを忘れず、他者(チームメイトや対戦相手など)を尊重し、かつ協力・協働・協調できる		謙虚、おごらない、人望がある(尊敬される、慕われる)、応援してもらえる、裏方の仕事もできる、他人のミスをカバーできる	
【グッドコーチ】		人物像(思考、態度、行動)	キーワード
② 人間力	①心構え (スポーツ精神、哲学)	プレーヤーが、スポーツを愛する心を忘れず、その意義と価値を理解し、表現できるよう導くことができる	情熱がある、信念がある(自分の基準を持っている)、寛容である、常に学び続ける(プレーヤーから学ぶ)、自責的反省
	対自己	プレーヤーが、常に前向きな気持ちを持ち、自ら考え工夫し、行動できるよう導くことができる	信頼できる(信じてくれる)、バイタリティがある、一緒に考えてくれる、可能性を引き出してくれる
		プレーヤーが、自分をコントロールしながら課題に対応し、失敗(敗北)や挫折があっても乗り越えられるよう導くことができる	(結果に左右されずに)中長期的視点で指導できる、プロセスを評価できる、個性に合わせて指導できる、チャンスを与えてくれる、カウンセリングマインドを持っている
	対他者 (人、社会)	プレーヤーが、社会の一員であることを自覚し、模範となる態度・行動をとれるよう導くことができる	公平な態度で接する、時に厳しいコーチング
プレーヤーが、常に感謝の気持ちを忘れず、他者(チームメイトや対戦相手など)を尊重し、かつ協力・協働・協調できるよう導くことができる		プレーヤー(チーム)に共感できる	

②個別ヒアリング

上記のヒアリング会を受けて、グッドコーチ像の明確化と、コーチの資質能力(思考・態度・行動・知識・技能)を高めるコアカリキュラム作成のための基礎資料を得ることを目的として、競技団体推薦のコーチに対する個別ヒアリングを行った。

場所:日本体育協会・第一役員会議室

ヒアリング対象者:

平成 27 年 1 月 5 日(月):S 氏(サッカー)

1 月 9 日(金):W 氏(レスリング)

1 月 23 日(金):Y 氏(陸上競技)、N 氏(テニス)

1 月 29 日(木):M 氏(柔道)

ワーキングチーム:伊藤雅充(日本体育大学)、深見英一郎(早稲田大学)、森丘保典(日本体育協会)

【個別ヒアリングの流れ】

①ヒアリング会の振り返り

※ヒアリング会に参加していない方については、本事業の目的・背景、ヒアリングの概要説明

②グッドプレーヤー像、グッドコーチ像(案)の確認と共有

③インタビュー

- ・スポーツとの出会いを含めた競技歴および指導歴の振り返り
- ・コーチの存在意義、目的、役割について
- ・コーチとしての職務(所属コーチ、NF コーチとしてのコーチングやマネジメントなど)について
- ・コーチに求められる資質能力(思考・態度・行動・知識・技能)について
- ・コーチの資質能力を高めるために学ぶべき内容について

④まとめ

表 11 個別ヒアリングで抽出されたキーセンテンスの分類

【グッドコーチ】		人物像(思考、態度、行動)	キーセンテンス
② 人間力	①心構え (スポーツ精神、哲学)	プレーヤーが、スポーツを愛する心を忘れず、その意義と価値を理解し、表現できるよう導くことができる	<ul style="list-style-type: none"> ・プレーヤーを本気にさせる情熱(ハート・マインド)を持っている ・プレーヤーの夢や目標を理解し、真剣に向き合う ・スポーツの魅力を伝え、楽しませ、好きになるように導く ・コーチとしてのあるべき姿を常に考え続けている ・自身のコーチングモデル(スタイル)を常に進化させ続ける ・スポーツ活動を通じて生き方(人生)について考えさせる、学ばせる
		プレーヤーが、常に前向きな気持ちを持ち、自ら考え工夫し、行動できるよう導くことができる	<ul style="list-style-type: none"> ・プレーヤー(チーム)の目標、トレーニングの目的などを明確化する ・プレーヤーとコーチは対等であり、サポーターであるという意識をもつ(環境を整えて、情報を与えて、選択肢を示す) ・問いかけや質問を重視し、プレーヤー自身の意見や判断を引き出す ・プレーヤーを常に観察し、段階的なステップアップに導く ・スポーツ活動内のことを外に持ち出さない(引きずらない) ・最新のコーチング(トレーニング)理論や方法論を理解する
	対自己	プレーヤーが、自分をコントロールしながら課題に対応し、失敗(敗北)や挫折があっても乗り越えられるよう導くことができる	<ul style="list-style-type: none"> ・プレーヤー(チーム)の現在と将来を見据えてコーチングする ・パフォーマンスを冷静に評価しつつ、決めつけ(レッテル)はしない ・競技の厳しさを伝えつつ、その先にあるゴールを伝えて動機づける ・プレーヤーの年代や特性に応じて適切な方法(トレーニング、コーチング)を用いる ・プレーヤーを取り巻く環境(社会)に適切に対応する
		プレーヤーが、社会の一員であることを自覚し、模範となる態度・行動をとれるよう導くことができる	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとりの人間(大人)としてプレーヤーに向き合い、自身の行動に責任を持たせる ・プレーヤーの主體的な判断の前提となる良否や善悪の判断基準を示す ・礼儀や挨拶など日常生活の基本を徹底させる
	对他者 (人、社会)	プレーヤーが、常に感謝の気持ちを忘れず、他者(チームメイトや対戦相手など)を尊重し、かつ協力・協働・協調できるよう導くことができる	<ul style="list-style-type: none"> ・コーチとプレーヤーが対等の立場でリスペクトし合い、互いの想いや意見を述べ合う ・プレーヤーあつてのコーチという意識をもつ ・相互理解・相互尊敬がスポーツ(競技)を成立させていることについて理解させる

【個別ヒアリングまとめ】

個別ヒアリングで抽出された内容を概観すると、まず競技歴の振り返りでは、ジュニア期において専門的指導よりも生活態度(挨拶)や心構えなどについて指導された経験を想起していること、シニア期のトレーニングに関する情報収集や計画立案などを主体的(試行錯誤的)に行っていること、過去に出会ったコーチの存在が自身のコーチングスタイルに少なからぬ影響を及ぼしていることなどが共通点として挙げられる。また、自身のトレーニングやコーチングの考え方を転換する契機として「外国人コーチとの出会い」を挙げたコーチが複数いたのも特徴的であった。コーチの存在意義、役割(職務を含む)および求められる資質能力については、コーチ間で共通する内容が多くみられ、

そのほとんどが抽象度の高いコーチ像(人物像)を具体化する内容であることが示された(表 11)。これらのことから、グッドコーチ像およびコーチに求められる資質能力(思考・態度・行動・知識・技能)を身につけるためのカリキュラムについて、両ヒアリングから抽出された内容に基づいて検討していくことは妥当であるといえるだろう。

ヒアリングのなかで「コーチが学ぶべき内容(視点)」として挙げられたものを以下に示す。

- ・ 社会とスポーツとのつながりを意識し、行動変容を促す
- ・ 異文化理解や国際的感覚を養う
- ・ 自身のコーチングについて振り返る、または客観的な評価を受ける(経験則のみに基づくコーチングからの脱却、ワークショップ的な内容など)
- ・ コーチング行動における観察力や課題発見力を高める
- ・ 他者(プレーヤー、チーム、プレーヤーを取り巻く人々および社会)に対して表現する力、伝える力を高める機会の提供(文章力、対話・会話・説明力などを含めた論理的思考力、クリティカルシンキングおよびプレゼンテーション能力)
- ・ スポーツを取り巻く様々な問題に目を向ける機会の提供
- ・ コーチングに関する最新情報の提供および共有の機会の提供
- ・ 他競技に触れる、他競技のコーチと交流する(ネットワーク化を含む)

2) コーチング現場における課題把握(視察及びインタビュー)

(1) 調査概要: 目的、方法

・目的

コーチング現場で活躍しているコーチが、どのような経験をし、考え、現在のコーチング持論・自論に至り、プレイヤーに対する指導・実践はどのように行っているのか。また、コーチは、さまざまな人たちが関わり、多様なニーズがある現場をどのような捉え、課題として認識し、日々奮闘しているのかを把握することは、コーチング現場で真に活用できるカリキュラムを作成する際に重要な事であり、参考となると思われる。

本調査は、コーチング現場に携わるコーチが語る生の声を集め、コーチ育成に必要なカリキュラムを導き出すための基礎資料とすることを目的とする。

・方法

インタビュー調査法を用い、以下の要領で実施した。

対象者

本インタビューの対象者として、次の5つの点をもとに候補者を選定した。

- 可能な限り広い分野区分(今回は、ナショナルチーム、スポーツ少年団・総合型地域スポーツクラブ、部活動、障害者スポーツの4つに大別)の現場を網羅すること。
- 現役で指導にあたっているコーチであること。
- ワーキングで想定した「グッドコーチ」に該当するコーチ(競技力向上に向けて尽力し、すぐれた競技成績を上げている、スポーツを通してプレイヤーにその楽しさや考える力などの育成に特に努めている)であること。
- 各分野区分の現場において、個人競技と団体競技を1つずつ選定すること。
- 同種目で複数人の候補者が挙げた場合には、日本体育協会公認スポーツ指導者資格の保有者であること、及び女性コーチを優先すること。

候補者の中から、調査趣旨・協力の承諾を得て、日程の調整が可能だった方を対象に実施した(表12)。(また、可能な範囲で、指導しているプレイヤーにもインタビューを行った)。

表12 インタビュー対象の分野と対象者

分野区分		インタビュー対象者		
		担当競技種目		性別
a.	ナショナルチーム	個人	体操女	男性
		団体	シンクロジュニア	女性
b.	スポーツ少年団・総合型地域スポーツクラブ	団体	サッカー	男性
c.	部活動(中学、高校、大学)	団体	ソフトテニス(中学)	男性
		団体	ソフトボール(高校)	男性
		個人	陸上(大学)	男性
d.	障害者スポーツ	個人	障害者水泳	女性
		団体	車いすバスケット	男性

実施時期

2014年9月～2015年2月。

調査の概要

インタビュー調査を実施するにあたり、アンケート調査も併用した。それぞれの内容は、以下に示すとおりである。

①インタビュー調査

アンケート調査への記入内容をもとに、その詳細について聴き取りを進めた。

その主な内容は、コーチとして活動するまで(特に、コア・カリキュラムの対象となる大学時代を主)、及びコーチングの活動を通しての経験と学び、スポーツやコーチングに関する持論や価値観、そして現場が抱える課題などとした。

②アンケート調査

アンケート調査は、主に、以下の内容で構成した。

a. プロフィール

個人属性(性別、年齢)。プレーヤーとしての競技年数と樹立した記録・成績、及びその満足度。コーチとしての活動年数と樹立した記録・成績。また、所属組織・チームの状況(構成人数、所属チームの昨シーズンの競技成績など)について尋ねた。

b. 達成させたい目標や目的

コーチとして、また所属組織・チームで達成させたい目標や目的について、自由記述を求めた。また、その目標や目的の共有度について尋ねた。

c. 所属組織・チームの環境や活動状況、及びそこに関わる課題の抽出

練習環境・設備、予算・活動費などの物理的環境の整備具合について尋ねる他に、プレーヤーたちの競技と私生活の両立度について、コーチの視点で評価してもらった。

d. コーチ自身の活動状況、及びそこに関わる課題の抽出

コーチ業と私生活の両立度、関係者や地域社会と交流する機会の確保、コーチングに関わる内容を学ぶ機会の確保、さらに習得したい知識について尋ねた。

e. スポーツ指導における充実度推移(ライフライン)

コーチング活動を始めてから現在までの充実度や出来事を振り返り、自己評価してもらった。このことにより、コーチ活動を始めてから日々の経験を経てどのようにグッドコーチになっていくかの経過を可視化することができると考えられる。

本報告書におけるまとめの構成

次頁以降の各インタビュー対象者のインタビュー報告は、以下の内容で構成されている。

- ・インタビュー対象者のプレーヤー・コーチとしての経歴概要
- ・インタビュー概要
- ・インタビュー対象者の「スポーツ指導における充実度推移(ライフライン)」

(2) インタビュー概要

【ナショナルチーム①体操女子】

プロフィール

- ・小学校時代はスポーツ少年団で様々なスポーツ(野球がメイン、その他柔道、空手、スケボー)を経験。
- ・たまたま体操が強い中学校に進学。仮入部期間に体操を体験し、入部。先生が体操経験者で、大変勉強・研究熱心。全国4位、あん馬で優勝。
- ・高校は強豪校。考えさせる指導法で、根本は教えてもらうがあとは自分で考えるというもの。練習方法も自分で考えるようになる。2年生の大会でケガに見舞われ、その悔しさを踏まえて3年生の大会に向けては、逆算方式で練習計画(この時期にはここまで出来るようにする、練習前にはイメージトレーニング等)を立て、練習方法(技の組み立て等)も自分で考えて臨み、大会では優勝する。その時の経験が今の指導に役に立っている。
- ・高校、大学ではチームメートにも教える中で、その選手も技が出来るようになる。
- ・カナダの大学、ナショナルチーム、朝日生命体操クラブ等を経て、女子ナショナルチームの監督として指導。
- ・国際体操連盟(FIG)アカデミーでも指導を担当。

■コーチングにおける大学の学びの活用・有用性

(体育学科)

- ・講義は学術的なことが多く、実際の競技現場と照らし合わせてのイメージが沸きにくかった。「運動生理学」「心理学」などが大事なことは分かるが、それを自分の競技に応用して競技に活かす余裕はなかった。

(部活動)

- ・クラブでリーダーを務める。実力別にグループに分かれ、時間で区切られた練習のため、とことん一つの技を練習すること等はできず。むしろ休み期間の方が、自分が納得できる練習ができた。
- ・勝つための演技構成のやり方を学べた。
- ・指導者には練習方法を「良く考えてやっている」とほめられた。

■カナダのコーチングコース(The Coaching Association of Canada)及び国際体操連盟(FIG)での学びの活用・有用性

- ・カナダ:”theory”(全競技対象)と”practical”(競技ごと)がある。”theory”は一般的な内容。
- ・FIG:カナダの責任者が FIG でも担当。大変役に立った。大学での講義と同じ内容だが、体操の指導現場用に応用された言葉で説明されるので、実になった。カナダでやった”theory”を再確認でき、現在も現場で取り入れている。
- ・FIG アカデミーでの講師を担当する中で、学びが多く、それをまた活かして教える。

■コーチングに影響を与えていること

- ・高校時代、この技を覚えるためにはどうするかということで、練習方法を考え、段階的にやることが大事だと学ぶ。そこで覚えた方法を、チームメートに教えても出来ていく。カナダでそのやり方をやっても、子供たちができるようになる。実際にカナダに居るときに、クラブの練習を見学に行っても、同じような練習方法をしていた。
- ・日本は体型的に不利といっても、そのような練習を取り入れていない。こうした海外のやり方を取り入れようとしても、「日本には日本のやり方がある」として受け入れる人は多くはない。
- ・英語が出来ることは、海外の指導者と情報交換をしたり、情報を取り入れたりするために重要となるのではないか。

■コーチングの考え方

- ・声の口調、体の表現を使って、技の感覚を教えることは大事。体罰と受け取られることを気にして、柔らかかに静かに伝えてもつながらない。選手は、「眼」(動き)と「耳」(言葉、強弱)と「感覚」(スピードを含めて)で受け取る。この3つで表現することが大事。
- ・体罰はいけないことで、カナダではありえない。引き出しをたくさん作ることができれば、体罰がなくても指導して競技力を上げられるのでは。引き出しが足りなくなったときに、その域に行ってしまうのではないか。

(カナダ)

- ・カナダでの指導では、これをやらせたいと思ったら、「これはこのように役立ち、効果がある」というのを必ず言っている。ただ「やれ」と言ってもやらない。

(日本)

- ・大学生に対しては、「どう感じた？」と聞いて、その反応によって言葉を変えて助言をしたり、オプションを与えたりした。
- ・指導者から意見を求められるという経験が無い選手も多かった。ただ、選手に考えさせるためには、まずは色々なパターンを詰め込むことが必要。一から全部「これどう思う？」と聞いても、選手は判断ができない。やり遂げた上で、オプションを与えることが重要ではないか。
- ・日本人は我慢強いと思う。トレーニングや理論を詰め込む部分と、考えさせる部分とを、使い分けることが求められているのではないか。

■ナショナルチームでの指導で心がけていること

- ・「世界的なスタンダード」を意識。所属に帰っても自分で続けてもらえ、今やっている内容が当たり前となっているように努めることが第一ステップ。これができれば、世界で戦う位置が上がるはず。イギリスのメダリストを育てたコーチを呼び、講習をやってもらったが、「まずは体を作ること、その上で技術をつくり、その上で演技構成」と、今我々がやっていることと同じ内容で、「皆さんはワールドクラス」と言ってもらえる。ただ、コーチがイノベーションをもっとして、イノベティブ(独創的)なコンビネーションを入れることが大事と指摘を受ける。

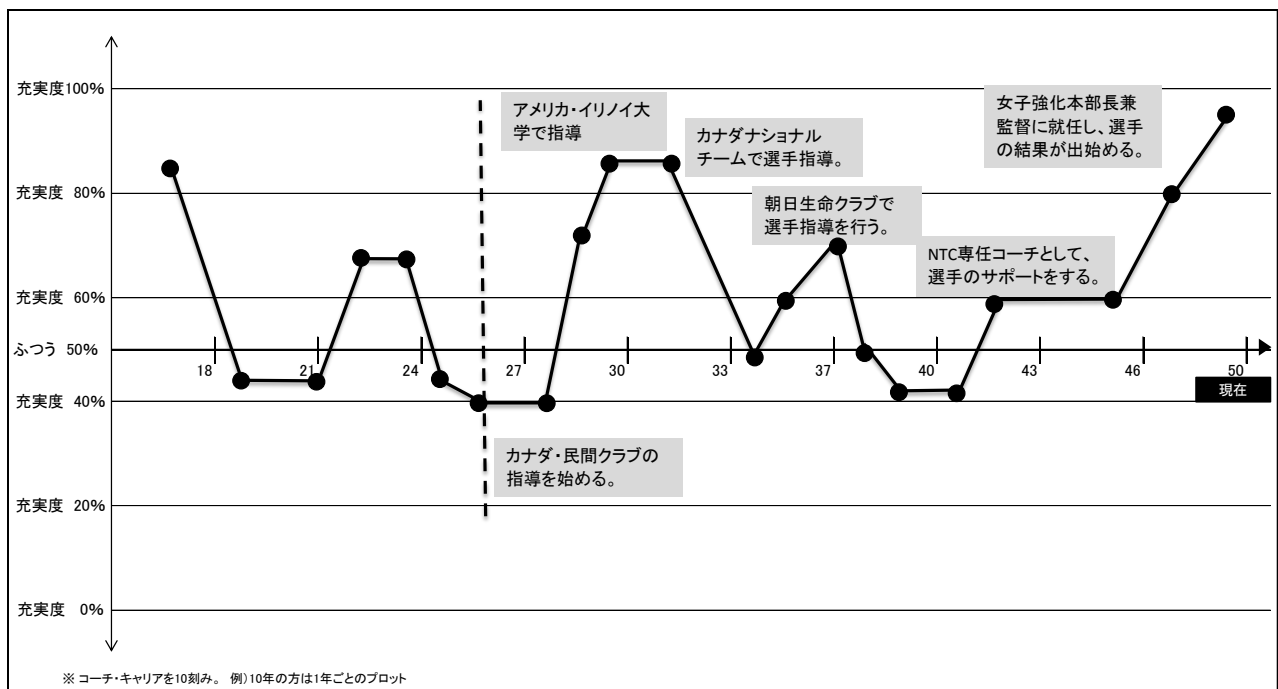
(クラブとの違い)

- ・ナショナルチームは選ばれた上位の選手。トレーニング法も絞りやすい。強くするために考えられるコーチに役立つものを、ナショナルの場合は色々やれる。例えばNTCを最大限に利用。足りなければ別の施設に行って実施するなど様々な工夫ができる。
- ・クラブは幅を広げて、下の方の選手も対応できるものをつくって上げないといけない。与えられたリソースのみでやらないといけない。
- ・クラブは、通常は毎年の結果が優先され、深く入り込み世界に通用することを考えた練習がやりにくい(カナダ、アメリカで経験)。ただし、朝日生命では数年間結果を出さなくてよいから、とクラブのトップに言ってもらえたため、基礎を充実させることができ、練習内容はカナダよりも朝日生命のほうが良かった。1年間基礎練習をやらせることができた。

■ナショナルコーチをする上で必要なこと

- ・協会が目標設定を明確にするとともに、スタッフを全面的にバックアップし、味方になるという覚悟がないとできないのではないかと。そうしなければ、コーチは無難なことしかできなくなってしまう可能性がある。

ライフライン



【ナショナルチーム②シンクロジュニア】

プロフィール

・大学4年次より、東京シンクロクラブにおいて、小中高及びシニア選手を指導。シンクロナショナルチームアシスタントコーチ、ジュニアナショナルチームヘッドコーチなど歴任。コーチ歴約20年。

・小学校3年生より競技を始める。当初練習は嫌いだったが、中学ぐらいから試合の結果を意識し始める。中学では指導される場面が少なかったことがあり、自主練習をする中で勝つなどを経て、そのクラブでトップになる。大学では「自分を試したい」等の理由で東京シンクロクラブに入り、大学4年のシーズンまで選手を続け、同年9月よりコーチとなる。

■コーチングに影響を与えていること

・コーチになったときの気持ちとしては、自分が所属クラブでシンクロを楽しんでいるようになったので、この楽しいということを教えてあげたいということや、クラブに入ってくる選手のオリンピック選手になりたいという気持ちを叶えさせてあげたいということが大きい。

・体罰を受けたことはない。受けてきた指導は、どちらかと言えば納得してやってきた。

・一番影響を受けたのは直属の上司だが、自分が指導をしている中で今の指導になってきた。20代のときは自分が言ったことを選手ができないと、手を抜いているとか思っていたが、段々選手の反応を待てるようになってきた。そのきっかけは、選手との年齢差が広がっていったこともあると思う。

・JOCのナショナルコーチアカデミーを受けて、自分とは違う競技の人の話や違うものの考え方を聞いて、違う発想を持てるようになった。特に、アスリートファーストで考える方が受講者におり、与えられた条件の中で選手のために最大限工夫しようとはっきり言っていた。そのように色々なことを固執しないでオープンに考えるようになったと思う。

■コーチングの考え方

・選手への言い方は感情に任せないように気をつけて、その練習を行う理由や選手への問いかけ、ビデオも活用しながら、ダメなものの良いものの違いを感じさせるようにしてきた。また、採点種目は審判が評価するものなので、見ている人が納得するようにしなければいけないということはするようにしている。

・選手に厳しくするなら結果は必ず出さないといけないと思っている。上位になるのは選手の手や努力もあるけれど、そこに引っ張っていくコーチ力もとても大きいと思う。最終的に選手が試合のときに不安なく「やる！」という気持ちで試合会場、演技に向かうところに持っていくのがコーチだと思うので、選手が失敗したら、その責任はコーチにもある。

(クラブとナショナルの違い)

・代表選手はある程度実力があり、自分が代表になるという決意を持っている選手たちが対象なので、気持ちがしっかりしており束ねることはそんなに難しいことではないと思うが、それでも今の自分たちでは、その上に行くには足りない部分があり、そこを克服することが必要であり、途中であきらめ

ないということを、練習の中で何度も何度もしつこく言い続けた。

・基本的なやり方は変えないが、ナショナルチームの選手には所属のコーチがチームにいない場合もあるので、その子達には極力声をかけたり、出来るだけ役割を与えたり、同じチームの選手で固まらないようにここでは一緒にチームであると思わせられるように気をつけた。

■ジュニア指導

(学校生活の考え方)

・日本代表となってトップ選手として活躍しようと思ったら学業がおろそかになる部分もあるが、シンクロの成績が良かったとしても学業の成績が下がってしまったら本末転倒だと話している。勉強や学校行事も頑張っているからこそ学校が応援してくれるので、学校生活を疎かにするなどは言っている。あなたがシンクロをやっているのは学校があなたを受け入れて、あなたが課外活動としてやっていることを応援してくれているからだからなので、それをするのは当然と言っている。

【スポーツ少年団、総合型地域スポーツクラブ①サッカー】

プロフィール

・1956年生まれ。大学卒業後、大阪YMCAでサッカーを中心に、就学前後の子どもたちを指導。現在、京都サンガF.C.育成・普及部長。コーチ歴35年。

■大学(授業や部活動)での学び

- ・大学の部活動において、“自分がやると決めてやることほど強いものはない”ことを体験。
- ・自ら決めたことであれば、自分の取り組み方・行動が変わり、自ら考え続けることができた。

■コーチングによって経験したこと

- ・自らも厳しく、ときには叱責されて育ってきたこともあり、それが当たり前だと思っていた。しかし、コーチを始めた頃に、自分が厳しく叱責した子どもが練習に来なくなり、愕然としつつ、今の子どもたちはそうではないと悟った。
- ・子どもたちが純粋に楽しみ、人間的に成長する(紳士になる)ことがスポーツの原点である

■スポーツ、コーチングの意義

- ・“スポーツをするということは、紳士になること”

すべての子どもを同じことができるように育てるよりも、スポーツを通してきちんと生きていける子どもにした方がよい。

コーチに問われた事柄を、子どもが親に質問し、それに答える親の存在が欲しい。

- ・“スポーツは苦しいものではなく「楽しいもの」で、そこに人とつながる楽しさがある”

本当に楽しくスポーツをやることができれば、自ら考えるようになり、うまくなるはず。

スポーツで“成績を残す、勝つ”、あるいはコーチとして“日本代表選手をより多く出す”という考えはなく、子どもには目の前の試合、サッカー、スポーツを楽しんでほしい。(公式戦に出場できるよう、ユニフォームだけ忘れないように伝える以外は、大会名も告げない)

- ・コーチ自身が“自分は何ができる存在なのか”を問い、学び続けるとともに、それを実践に活かす姿勢が重要。

■現場が抱える課題

- ・目標・目的の浸透(保護者、会社と現場・コーチ)

約1,200名のスクール生の保護者に、目標・目的が十分には伝わりきれていない。

会社の方針(事業拡大、クラブ運営のための収入確保)と現場(コーチ)とのすり合わせ。

- ・現場のコーチング力:多様化、国際化する現場での対応力

「あなたは何をもってコーチなのか?」「コーチとして何ができるのか?」、自他ともに問うべき。

体験する(本当に苦労したり、考えたりできる場や機会)がもっと必要。

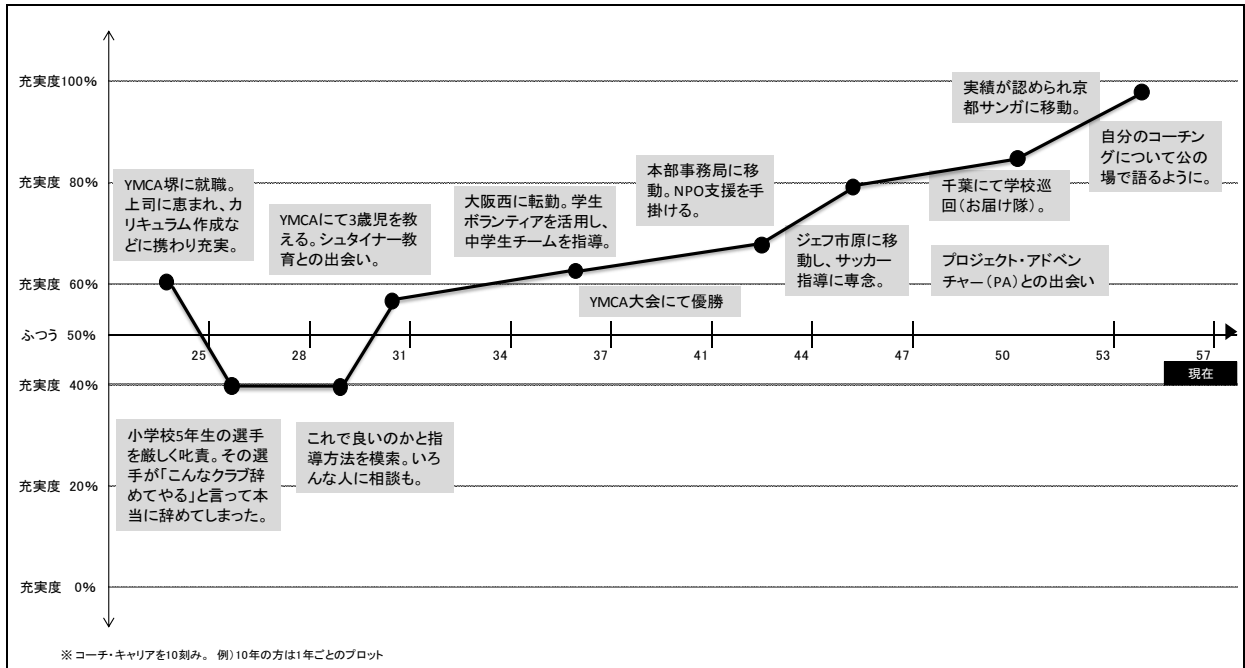
障害を持った子どもが増えている中で、その周囲の大人・教員への対応や説得をいかに行うか。

・学ぶ機会の不足

海外での学び、大学の先生と話す時間。

子どもたちのコミュニケーション能力に関わって、最新の情報(脳科学、スポーツ心理学)。

ライフライン



【部活動①:大学】

プロフィール

- ・西日本の大学での陸上部指導 15 年を経て現在の筑波大学での陸上部指導へ
- ・筑波大学陸上部監督兼跳躍コーチ(陸上部員 270 名、跳躍ブロック約 50 名)
- ・筑波大学ではコーチング学の講義を担当、日本コーチング学会理事及び編集委員長

■現在のプレーヤーの特徴

- ・現在のプレーヤーは周りとの関わりを感じながら自己の行動を規制できている。賢く、真面目であると感じる。

■コーチングスタイルの変遷

・若いころのコーチング

高校時代は競技レベルの高くなかったプレーヤーをブロックのインカレで優勝させたり、インカレのトップレベルに勝負ができるくらいに伸ばした。低いレベルから伸ばすのは楽しく、指導の勉強になった。コーチング現場で起こる様々な事態に対して免疫ができた気がする。

・現在のコーチング

高校までに全国大会で優勝しているようなプレーヤーを相手に指導。頭打ちをしているプレーヤーに対して、今までと違うアプローチの必要性を説いている。若いころの経験があったからこそ、トップレベルのプレーヤーの抱える問題や外部からのプレッシャーに対して戸惑うことなく長期的な視野で我慢強くコーチングすることができていると感じる。

■現在のコーチング法に至るまでの経緯

・若いころ

全員でトレーニングをした。うまく行かなければ徹底的に時間をかけてトレーニングしていた。上達はするが、学生が自ら考え、実践する力は培われず、すべて自分が関わらなければならぬ状態であった。

・現在

一人一人の成績を上げようと思うと一人一人の課題は異なる。さらに、将来、指導者になる学生たちは、自分で理解して自分でトレーニングメニューを作成・実践できるようになることを目的として、すべてのプレーヤーに独自のトレーニングメニューを作成させている。冬期トレーニング期間に全員でトレーニングし、トレーニング手段を教えている。試合期は、各自が作成したトレーニングメニューをチェックしている。

1・2 年生は自分でトレーニング計画を立てたり、実践をしたりというのは難しいようだが、3 年生の終盤にはできるようになり、4 年生では自在にトレーニング計画・実践ができるようになって記録が伸びている。

また、これまでに指導したプレーヤーの失敗を糧に、現在のプレーヤーにアドバイスを送っている。昔はきっちりトレーニングするプレーヤーがいいと思っていたが、いまは違う。プレーヤー

には、きっちりやりすぎることで怪我をしたり大事な試合で記録がでなかったりするので、プレーヤーたちにはそのような取り組みはするなと伝えている。

■コーチング法が変わっていった理由

- ・指導現場とは別に、「コーチング学」、「トレーニング学」、「運動学」の講義を受け持つようになり、常に、授業の工夫をしたり、本を読んだり、日本コーチング学会を通して他分野の人と関わることで自身の指導も変わっていった。講義で教えている内容と指導現場で自分がやっていることが乖離しないように努力していた。

■コーチング力を伸ばすためにやりたいこと

- ・他分野の本、マンガやドラマに触れて、自分のコーチングの考えを再構築していきたい。
- ・強くするために何が必要か？というコーチングに対する学ぶ姿勢、新しい視点を与えてくれる他分野との関わり
- ・コーチであり続ける限り、学び続け変化に対応する。

■国際競技力向上に向けて

- ・海外に自分で出て行ける人材を育てる。世界への意識が高ければ、語学勉強も自主的にする。

■その他

- ・コーチング力を付けるには時間と経験がかかる。経験しなければ分からないことだと思う。
- ・理論と現場が乖離させないという強い信念を持つ。

【部活動②:高等学校】

プロフィール

・1968 年生まれ。大学時代から母校(高校)の水泳部コーチとして携わる。教員生活の大半は生徒指導に従事し、これらの経験をもとにソフトボール部(女子)の指導にあたる。県大会優勝通算 6 回、努力の伝統の構築、強い女性の育成を目指す。コーチ歴 17 年。

■大学(授業や部活動)での学び

- ・水泳部コーチとして個々人や身体の動きの観察力を養ったことが、今の技術指導に活かされている。
- ・マックス・ウェーバーを学び、組織の話、集団の中での人間の心理的側面を理解した。

■コーチングに携わって経験したこと

- ・教員生活の大半が生徒指導。体罰と紙一重のことをしていたこともあった。スポーツ界も体罰が問題となっている中で、どうしたら子どもたちを振り向かせ、素直な反応を引き出せるのかを模索している。
- ・初任校で、部活動に出て行くのが遅かったとき、部員同士の喧嘩、雰囲気が悪さが漂っていることがあった。部活動にはできるだけ早く行ってやりたいと思うようになった。

■スポーツ感、コーチング感

- ・“怒鳴って、落として、上げる(放っておくことは絶対にしない)”
緊張感を与えるため、エネルギーに、厳しく伝えることはしばしば。しかし、何よりも明るく元気にやれる方がいい。
- ・“生徒(女子)との関わりには段階がある”
まず、本当に私の話を聴こうと思っているのかを判断。そして、指導者から歩み寄る。部活動内外で生徒と一緒にいれば、向き合う(褒める)機会は多く、その一言が距離を縮める。
生徒一人ひとりが書く日誌を踏まえた指導を行うことで自らの言葉に責任感をもたせ、考え、気づく力の育成を促す。
部活動と学校の生活目標の関連付けを徹底することで、生徒との信頼感を生み出す。
- ・“一意専心、いろいろな経験をしていけば落ち着きも出る”
学校の生活目標「掃除、挨拶、学問」のうち、身の回りをきれいにするにはかなり厳しく言う。それがプライドに繋がる(掃除したらきれいに使いたいと思う、というように)。
地域/関係者の方への感謝・貢献。

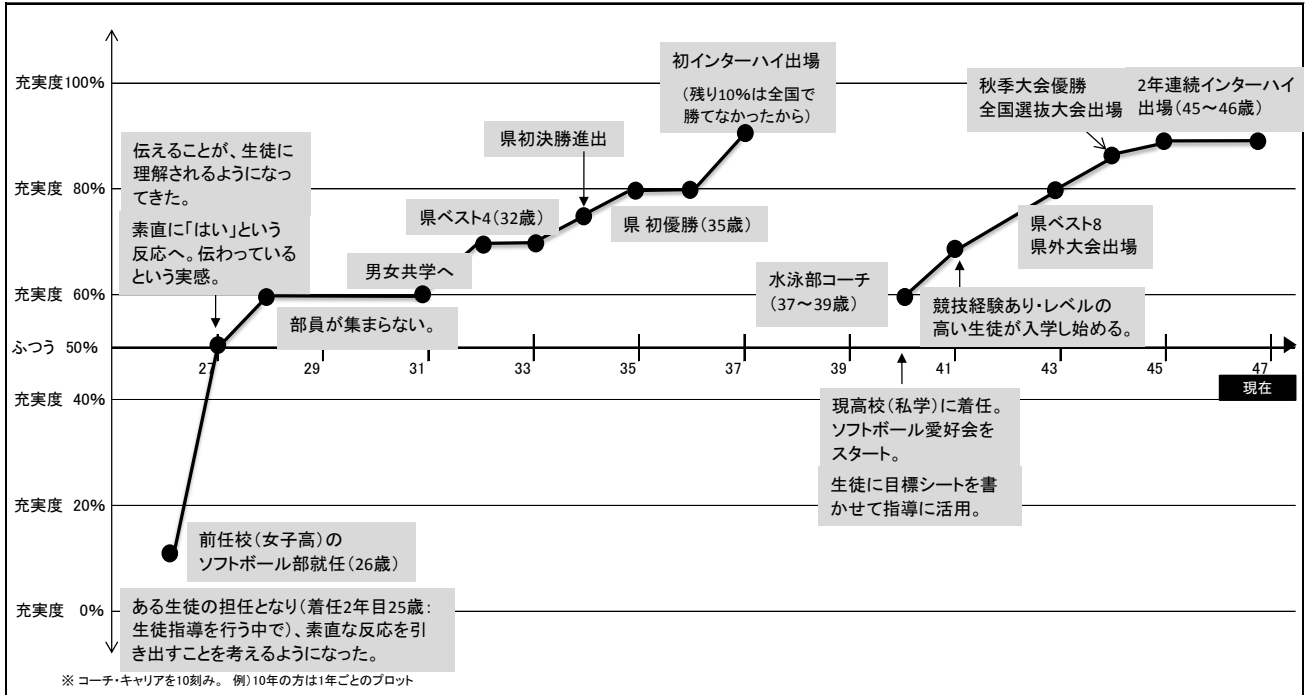
■現場が抱える課題

- ・本気で全国で勝とうとする生徒のモチベーション向上
今どのレベルか、何が必要か、どのレベルまでやるか、を客観的にみる力をどうやって育てるか。
- ・生徒や保護者との目標の共有。

・機能する女性顧問の不在

女性特有の問題があるかもしれない、生徒の心のよりどころが一つ増えることは必要。ただ、気づく必要があるのかも、今はまだ分からない。

ライフライン



【部活動③:中学校】

プロフィール

- ・現在 32 歳。小学生の時にラグビーを始め、高校生の際に関東大会や 7 人制大会での全国大会出場をしている。19 歳の頃からラグビーの指導を始める
- ・横浜市から非常勤教員として採用され、市立中学校に勤務をしている。
- ・5 年前に専門知識が全くないソフトテニス部の顧問を任される一方、帝京大学ラグビー部のコーチも務める。
- ・初めは不本意ながらもソフトテニス部の顧問を務めていたが、やはりどのスポーツでも楽しいのだと気付いた。
- ・一昨年度、昨年度には所属しているソフトテニス部で初の市大会ベスト 16 の記録を残す。

■指導方針

- ・ソフトテニスの公式戦で上位を狙って練習をしていないため、1 日 5 時間も 6 時間も練習するようなことはしない。
- ・練習の中には積極的にコーディネーショントレーニングを取り入れており、リズム能力やバランス能力といった、普段の練習からは習得することが難しい能力をバランスボールやラダーを使用して向上できるよう目指している。
- ・生徒たちが自分の課題などを考え、練習内容を考えてくる。その生徒たちが決めてきた練習内容をコーチがチェックし、アドバイスをし、自分で考える機会を多くしている。
- ・ソフトテニス部の練習が終わった後に時間があればサッカーをして遊んだり、野球をして遊んでいる。そのようにテニスの練習だけではなく、様々なスポーツを楽しむことを大切にしている

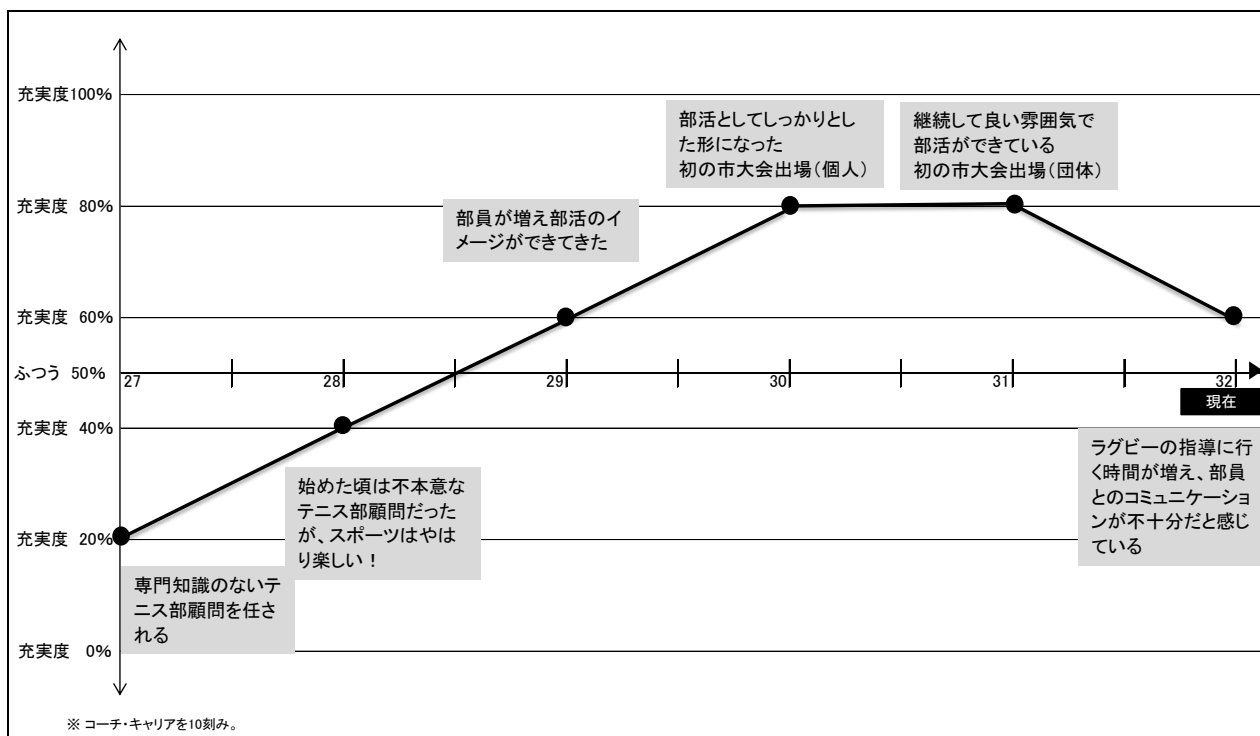
■コーチとして感じていること、実践していること

- ・中学校を卒業し、高校に入学してからどのような形でも良いのでスポーツを楽しんでほしいので、生徒たちがスポーツを嫌いにならない環境作りを行っている。
- ・同じ練習ばかり長い時間行うのではなく、様々な筋肉や神経を刺激しスポーツの楽しさを感じられるようにしている。
- ・試合の勝ち負けよりも大切にして欲しいこととして、自身が高校ラグビー部でできた仲間たちと今でも深い絆があることから、生徒達にもそのような仲間を見つけて欲しいと思っている
- ・大会での成績ではなく、スポーツを楽しむこと、多くの仲間を作ること为目标としている。

■参考にしていること

- ・近隣のスポーツクラブが実施しているコーディネーショントレーニングの勉強会などに積極的に参加し、練習内容に取り入れている
- ・帝京大学ラグビー部をコーチングしながら学んだこともソフトテニス部の練習にも役立っている

ライフライン



【障害者スポーツ①車いすバスケットボール】

プロフィール

- ・28歳まで現役選手としてプレー(25歳からの3年間は日本体育大学で指導について学ぶ)。その後、地元中学校で外部コーチとして活動を始め、チームを春、夏ともに県優勝に導く。
- ・途中、車椅子バスケットボールに外部コーチで関わるが、車椅子バスケットボールに対する認知度は低く、東北で勝てない時代を経験する。
- ・42歳の頃より2001年に地元宮城県で開催される全国障害者スポーツ大会の車椅子バスケットボールチームを設立し、本格的にコーチを始める。
- ・49歳の頃、車椅子バスケットボールの自分の考え、指導が確立し、自分の車椅子バスケットボールができるようになり、日本選手権初優勝、連覇、日本代表女子チーム監督に就任した。
- ・2011年3月、東日本大震災を経験し、週1回の練習が3か月半にわたり続いたが、その分、選手と一緒にバスケットができる喜びを知った。

■コーチングにおける大学の学びの活用・有用性

- ・役立った。さまざまな競技に関する内容があったが、常にバスケットボールに照らし合わせて考えていた。特に「戦術論」に興味があり、テクニカル、メンタルともに役立ったと感じている。
- ・大学の部活顧問は、非常に厳しい指導者であり、チーム内の競争の厳しさもあった。その中で、身体で覚えさせられたが、今思うとその指導には段階があり、理論があったから次へ進むことができた。
- ・指導の厳しさ(うまくできたら褒めてくれたものの…)は、今、指導者となって振り返るとそのありがたみがわかる。そんなすごく厳しい先生との出会いが、指導者としての原点。

■コーチングに対するご自身の考え方の変化と確立

- ・中学生、高校生への指導を経験したことは大きい。その間、色々な指導者と出会ってきたが、多くの指導の中で「一般のバスケットの指導をどのように応用するのか」と意地になって取り組んできた。
- ・バスケットボールの指導経験を車椅子バスケットボールに取り込み、応用しながら常により良い指導法を模索し、独自の指導法を考えてきた。
- ・選手自身が本来持っている身体能力、技術レベルを發揮せずにプレイの質を下げることは許さない。そこは妥協してはいけない。選手にはできることはしっかりとやってほしい。
- ・あまり褒めず、叱咤激励。自分が嬉しそうな気持ちは選手には伝わっている。イージーシュートを外したら何故いけないか等、その理由をしっかりとその瞬間に伝える。細かい指導はしないが、段階的な練習の中で「次はいける！」と感じると、選手が動くようになる。
- ・厳しい指導を素直に受け入れることができるパーソナリティをもった選手は貴重。指導者と選手の考え・方向性が合えば、選手は絶対に伸びていくと確信している。
- ・選手自身のこれまでのスポーツとの関わり方を含め、個人のレベルを理解すること。どうやって勝っていくか(戦術)を伝え、ゲームメイクする選手との意見交換は重要。また、選手から意見を勉強だと思って聴く耳を持たないと、障害者スポーツの領域に入っていくことができない。

■コーチとしての選手への思い、選手からの思い

- ・選手の障害は、先天性、後天性(病気、事故等)と様々な理由があるが、そのことによって気概を失ってほしくない。障害の差異のある選手とコート内でぶつかり、打ち勝つ車椅子バスケットボールの醍醐味を感じてほしい。
- ・現在、チームの所属選手は、すべて就労しており、社会人としてしっかりと仕事と練習のバランスを両立していることは素晴らしいこと。
- ・選手からは、「しっかり指導してほしい」という要求・欲求を感じる。選手には、スポーツが何たるかを分かっていてほしい。

■障害者スポーツにおけるコーチングの難しさ

- ・障害の違いやスポーツ歴も合わせ、選手の意識の違い。また練習後の身体のケアが重要。
- ・車椅子バスケットの特性と一般のバスケットの融合(一般のバスケットのフォーメーションやプレースタイルをいかにして車椅子バスケットに 응용していくか等)を求めていくこと。また逆に一般のバスケットにはない車椅子の特性(チェアワーク、車椅子の幅、スペースの活用)のうまい利用・活用の仕方。
- ・車椅子バスケットは車椅子を駆動するにも腕や手を使い、疲労は激しい。第3クォーターまでがいっぱい。また指先の感覚も非常に重要で第4クォーターまで感覚が残っていて、いかにうまくシュートを打てるか、それまでに選手の体力がどこまで残っているかどうか。ゲーム展開も同じ選手を使うのではなく、いかにうまく選手を使い、休ませながら、第4クォーターで(攻撃を)爆発させるか。健常者のバスケットボールにはない車椅子バスケットボールの難しいところである。

■コーチングの学び、今後求められるもの

- ・中学校、高校、大学のバスケットボールの練習を見に行き、どのような指導(アドバイスや選手への伝達方法、選手の反応等)をしているか、指導の在り方についても非常に勉強になっている。一般のバスケットボールを応用した車椅子バスケットボールの確立に取り組んでおり、追及していきたい。
- ・車椅子バスケットボールの指導者の交流だけでなく、他競技の指導者と交流、話をする機会も多くあり、非常に勉強になっている。
- ・選手指導の他に、チームのマネジメント業務も増えており、そのスキル・力量も必要となっている。

■現場が抱える課題

①指導者への周囲の理解

- ・家族、職場の支援・理解を得ることができなければ、指導者としての活動はできない。パラリンピックへ向けての強化では海外遠征も多く、金銭面、仕事面等を含め、周囲の理解の有無が大きい。

②スポンサーの支援

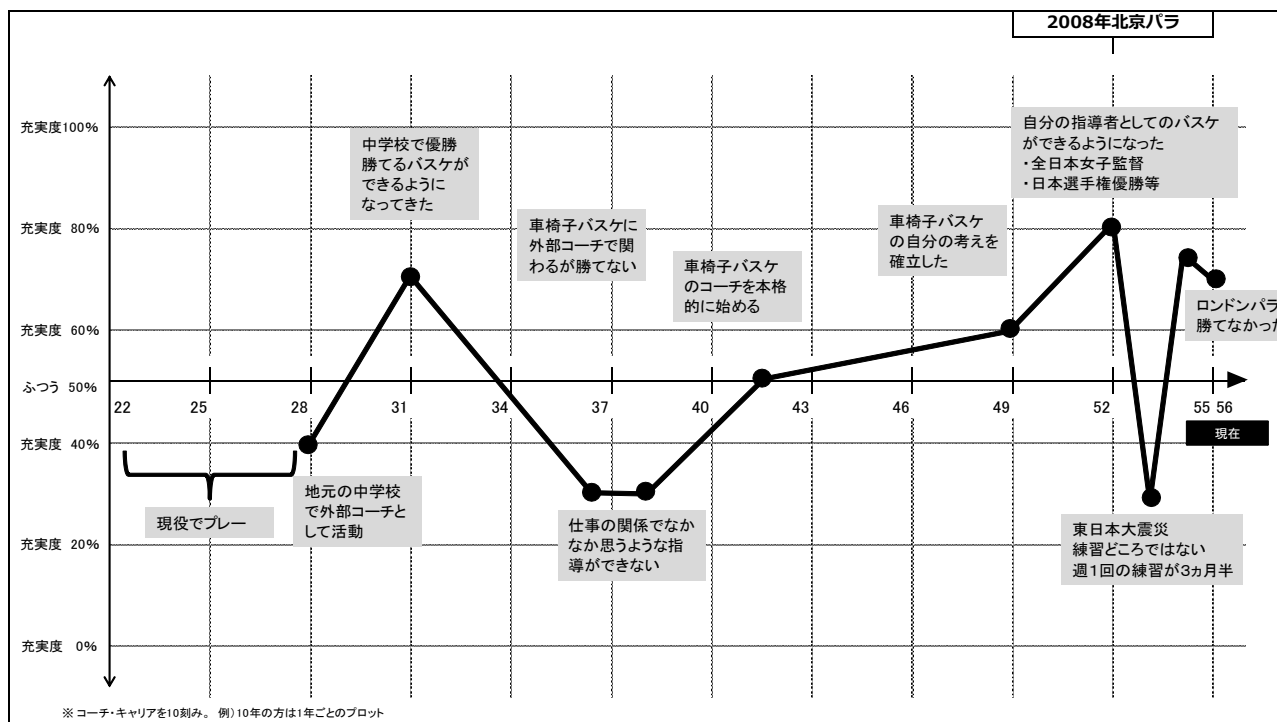
- ・若い選手にとって、高価な車椅子は簡単に購入できない。身体の成長に合わせて数台の車椅子が必要となるが、そのような選手たちにはスポンサーからの支援の一部を援助している。
- ・資金面を考えるとキリがないが、何とか毎年、支援をいただきながら調整してやっている。地方の

チームなので、強いチームとの練習試合を求めると遠征費も必要となってくる。なんとか支援いただけるスポンサーを探し、契約し、スポンサーの要望である常勝チームとしての責務を果たしていきたい。

③トレーニング施設の確保

・チーム練習が週に3~4回。トレーナーのもとでウエイトトレーニングを週2回。チーム練習のための体育館の確保が難しく、何とか週4回を維持している現状である。

ライフライン



【障害者スポーツ②障害者水泳】

プロフィール

- ・大学時代、卒業後、スイミングクラブで子供たちを指導。1997年26歳の時に青年海外協力隊(JICA)にて幼児から高校生を対象とした水泳指導のため2年間マレーシアに赴任。2002年に障害者のアジア大会を2006年に控えるマレーシアへ再度JICAにより派遣され、選手指導を行う。2004年アテネパラリンピックはマレーシア選手団で水泳コーチとして参加。
- ・2004年、帰国後に出会った選手に本格的に指導を始め、2008年北京パラリンピックで金メダルを獲得、2012年ロンドンパラリンピックにおいても銅メダルを獲得した。
- ・2012年、障害者水泳チーム「MINEMURA ParaSwim Squad」を設立し代表を務める。
- ・2014年、アジアパラ大会では、指導する選手が計10個のメダルを獲得。

■コーチングの学びの原点

- ・コーチングの学びの原点は、マレーシアでの障害者への指導を実施したことがきっかけとなった。
- ・マレーシアはバリアフリー等、街中はまだ整備されていない所も多いが、スポーツ環境においては、2003年より政府(青年スポーツ省)がオリンピックとパラリンピックを一緒に強化することが始まり、国のトレーニング施設も一緒に使用できることとなった。日本では安全面等の理由で、障害者が一人で使えないプール施設もあるが、マレーシアでは自己努力、自己責任の上で借りることが可能で、選手が自立して使用している。もちろん困ったときは施設職員が手を貸してくれる。指導をする上でも選手たちの自立、心が強いと感じることが多くあった。

■コーチとして選手に望むこと

- ・障害があるからとか言い訳や負い目を感じずに人間として成長してほしい。
- ・選手がアスリートとしてしっかりと成績を出すこと、自立した人間になってほしい。

■コーチとしての目標

- ・指導者として、強い日本をつくりたい。
- ・強い選手、強い組織、障害者水泳の発展やコーチング環境・体制整備を目指していきたい。
- ・個々を尊重する指導法、選手の自律を大切に考える。
- ・常に新しい情報を求め、水泳だけでなく他競技の指導者から得た指導法等を自身の指導にアレンジする。
- ・選手とのコミュニケーションを通じて、感覚をすり合わせ、個々の選手にとっての効率的な泳ぎを一緒に探求していく。
- ・選手の個別性の高い指導法への挑戦。

■チームの目標

- ・全員がパラリンピックへ出場する(パラリンピアンになる)という目標を共有し活動している。リオに限らず、東京やその先のパラリンピックへ出場することを目指して取り組む。

・選手との目標設定のサイクルは、主にパラリンピック間の4年、その中の1年毎については年間3回の主な大会で目標設定をしている。

・チームは年齢の異なる選手が互いに刺激を受けあう環境になっており、パラリンピックメダリストの存在や彼の発言、取組む姿等は、他の選手への影響も大きく、それがチーム全体に目標への意識を浸透させている。

■障害者スポーツにおけるコーチングの難しさ

・選手個々の障害が異なる。よって同じ練習ができない。選手の競技レベルだけでなく、個々の身体や障害の状態(残存機能)に合わせた指導が求められる等、個別性が大きい。

・トレーニング法についても選手と相談をしながら、いろいろ試してみて、その中で効率のいい泳ぎを模索していく。残された能力をいかに引き出して、記録を残していくかが指導の難しさであり、面白さでもある。

・常にコミュニケーションが大事。本人の感覚をフィードバックしながら指導につなげる。完成形の指導法はない。たとえば、切断の選手の水に浮く感覚等を指導者はわからないので、常に一緒に考え、互いの感覚をすり合わせ、映像を用いることも入れながら、何度も試してみることが重要。

■コーチとしての学び、必要なもの

・自分の今までの人生の分岐点において、影響を与えてくださった方は多い。それは水泳業界だけでなく、他競技、様々な分野にわたる恩師、先輩、仲間等。その方々に相談し、ご意見や人としての考え方等を教えていただいている。テクニカルなことではないが、指導をする上でその教えは参考になっている。

・指導対象が障害者に特化していると一般の指導等を学ぶ機会が少なくなってしまう。自ら出て行って常に新しい情報を得る、学ぶことが重要。JISSを使用する際はトップ選手の指導を目にすることができ、ありがたい機会である。

・医学的な障害特性の理解。一般論として自分が知っている枠を超えることも多々あり、その都度になるが、学び続け知識を増やし、それに対して対応できる能力を身につけておかなければならない。

■現場が抱える課題

①トレーニング環境の確保

常に使用できる拠点となる施設はない。一般の体育施設、区営スポーツセンター、大学の施設、JISS(強化指定選手のみ)等が使用できる日時を調整してトレーニングを行っている。一般の施設を初めて使用する際は、施設関係者の理解を得るまでのハードルの高さを感じるが、少しずつ利用しながら理解を得るようになった。ある施設では視覚障害や義足、車椅子の選手が一人で行ってもしっかりとサポートしてくれるようになったところもあるが、トレーニングの環境の確保は課題である。

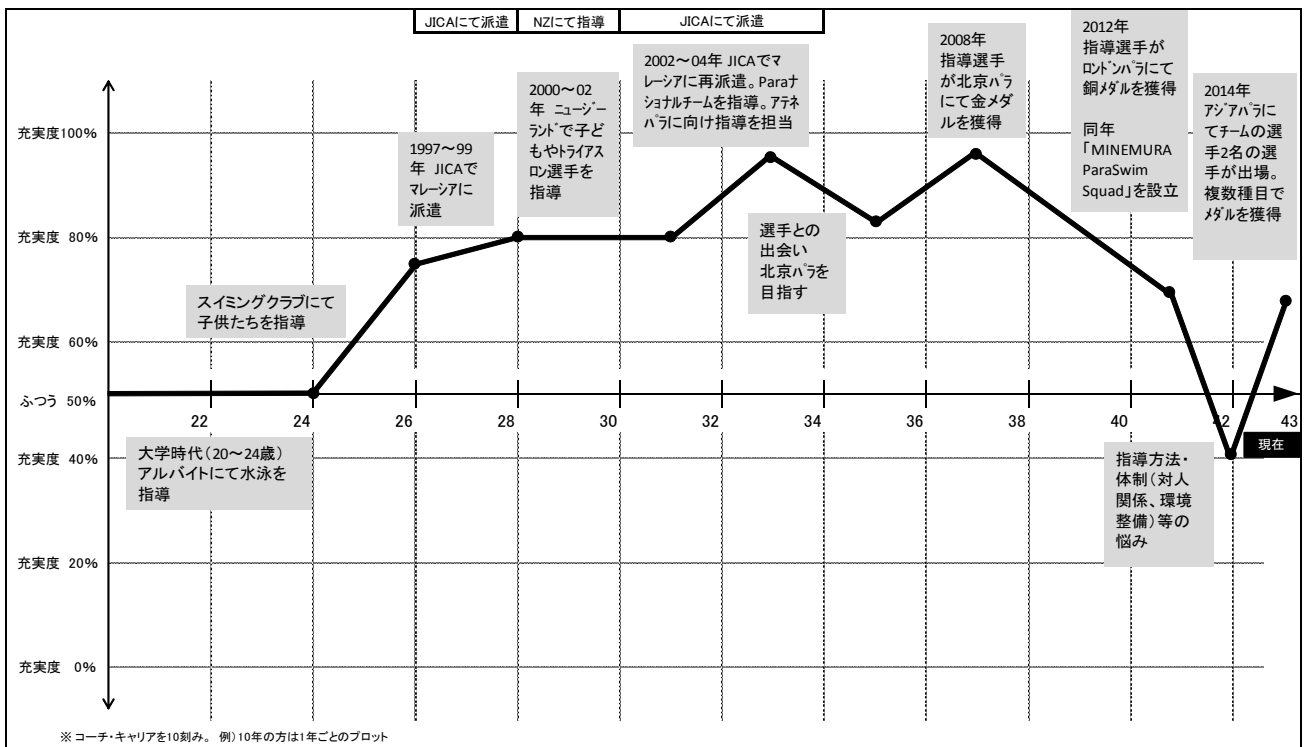
②活動経費

チームの活動経費は、選手がチームに支払う指導料と、スポンサー料(1社)によって遠征や合宿を実施している。またスポーツ用品等についてもメーカーからの提供も一部ある。活動経費は十分であるとはいえないが、必ずしも与えてもらうことがいいことではなく、ハングリー精神も重要なので、そのあたりのバランスについても常に考えておかなければならない。

③指導者への支援

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催が決定し、選手への支援は厚くなってきた。しかし、選手と同様に指導者への支援を進めていかないと最終的なレベルアップには繋がらない。パラリンピックにおいては、選手強化にあたる指導者が指導に専念できる環境はまだ整備されてなく、代表チームのコーチであっても仕事の合間(週に数回)にしか練習に来ることができない者も多い。自分がチームを設立した経緯もこの問題があつてのことであるが、(職業として)選手を専属で指導できる指導環境づくり、指導者への支援が求められている。

ライフライン



(3)まとめ

我が国のスポーツは、スポーツの魅力を知り、現場での熱心な指導に携わるコーチに支えられてきた。それを引き継ぎつつ、また時代に合わせてより良いコーチングの在り方を模索し、後進の指導・育成、あるいはスポーツの普及、すぐれた成績を上げるなど、各方面で活躍されている現役のコーチを対象に、今回のインタビューを行った。

スポーツに関わる分野をできるだけ広く網羅し(今回は、ナショナルチーム、スポーツ少年団・総合型地域スポーツクラブ、運動部活動、障害者スポーツの4分野)、今後、現場でより有効に活用される方策を考えていく上での基礎資料として、現場の状況や課題を収集し整理することが主な目的であった。

この目的に沿い、本章では、コーチングの現状、そのコーチング(持論・自論)に至るまでの経験や学び、及び現場で抱えている課題とは何かについて、前頁までにそれぞれの方のインタビュー概要を示してきた。最後に、それらを総括しておきたい。

①コーチングの現状

・共通してみえること

コーチングの現場はそれぞれ異なるにも関わらず、その現状についてほぼ共通して見えてくるものがあつた。それをひと言で表すならば、アスリートファーストの視点とその体現である。その具体的な内容の一つは、プレーヤーに「考えさせる」ように指導しているということであり、もう一つはそれを促すために、「プレーヤー一人一人に合った伝え方や段階を踏まえた指導」に努めているということである。

例えば、選手各自によりトレーニングメニューの作成〔大学部活動〕、あるいは目標シートの作成〔高校部活動〕などを通して、まずプレーヤーに考えさせ、その内容を踏まえてそのときどきの言葉かけ・対応が行われている。これらのことは、プレーヤーに、自ら表現した言葉に対する責任感をもたせ、プレーヤーの理解や実行を促すのに有効であるという。あるいは、ビデオを活用してすぐにフィードバックを行い、プレーヤーがどう考えるかを問い判断させる〔ナショナルチーム〕、あるいは“眼(動き)と耳(言葉、強弱)と感覚(スピードを含む)で表現する〔ナショナルチーム〕”といったように、獲得すべき技の感覚に合わせた指導・表現の方法などが用いられている。

これらの具体的な方法や指導の方針は、コーチ自身の専門性に裏づけられていることは、特記しておきたい。専門的知識や理論、最新の情報など、その時点で指導の根拠があり、最新の情報を現場環境やプレーヤーに応じてコーチング(現場に応用した言葉づかい、プレーヤーの成熟段階の見極めと対応)に活用されている。

そして、プレーヤーに伝えたり、教えたりすることがより良い効果をもつように、コーチとプレーヤーがともに歩み寄り、練習外を含む日常場面でもコミュニケーションの充実を図っている。その中では、プレーヤーの状態を早めに把握できるように、あるいはスポーツだけの思考・志向にならないように勉強や仕事との両立などについて伝えているコーチも多い。特に、障害者スポーツにおいては、その障害の程度やスポーツ歴など、プレーヤーの個人差が極めて大きく、いかに能力を引き出すかのヒントは、障害をもっているプレーヤーとの対話の中で見つけているとのことである〔障害者スポーツ〕。

今回対象となったコーチのインタビュー内容からは、プレーヤーに可能な限り多くの時間をかけ、一人一人をしっかりと観察し、プレーヤーが納得できるようにする指導の重要性に改めて気づかされる。

・現場やコーチの多様性がみえること

スポーツ・競技の楽しさの伝達や体感のさせ方については、現場の各分野(例えば、ナショナルチーム、スポーツ少年団・総合型地域スポーツクラブ、運動部活動、障害者スポーツ)、あるいはその区分に合わせたコーチの志向性、価値観によって異なるように思われる。

結果の追求と楽しさをリンクさせているケース〔①結果に対する強い責務を抱えつつ、コーチ自身がプレーヤー時代に感じた競技の“楽しさを教えてあげたい”という思いを乗せてコーチングに取り組んでいるケース(ナショナルチーム);②“チームの仲間が研鑽を積み重ね、新しいプレーができるようになった時、そして、その力を結集して自信を持って勝負をし、勝利を勝ち取るときこそ、真の「ソフトボールを楽しむ心」が生まれる(部活動中学インタビュー時の資料『チーム方針』より抜粋)〕といったケースもあれば、③“苦しいスポーツや勝つスポーツではなく楽しいスポーツ”を最優先に指導されているケース[スポーツ少年団・型地域スポーツクラブ]など、さまざまである。

スポーツ分野・区分、それに伴うプレーヤーが求めるものや目標、夢に合わせて、勝利と楽しさ、あるいは人間形成の育成をどのように位置づけるのか、そしてそれを実践するためのコーチの力量(専門的知識やコミュニケーションスキル等)などとの組み合わせが、コーチングの在り方の多様性を生み出していると思われる。

②今のコーチングに至るまでの経験や学び

コーチが、上述(①コーチングの現状)のようなコーチングの在り方に至るまでには、試行錯誤を繰り返して、学び続けている。そのことは、資料『ライフライン』に表されている。このラインからは、それぞれのコーチが、さまざまな経験を通して考え悩みながらコーチとしての人生を歩み、現在に至っている様子が見てとれる。重要なことは、いずれのコーチも、節目を節目として認識し表現されていることであり、おそらくそのことが次へと学び続ける原動力になっていると思われる。

とくに、我が国における教育の風潮や指導の在り方・表現の仕方が、きびしさや鍛錬を主軸としたものから最近では変化しているとの認識は、ほぼコーチ全員に共通して聞かれた現場の声である。ただ、今回のインタビュー対象の現役コーチは、時代の変化に合わせて指導法もすべて変化させているわけではなく、自身が受けきた指導の在り方を今の自分が指導にあたる際の原点にしている。特に、厳しさの在り方が現場の悩ましさになっている部分がありそうだが、厳しさが本来持っている良い効果を残すために、今の時代にどうすればそれが生きてくるのかについて模索し、実践を続けておられる。

また、コーチ自身の一見失敗にみえるような経験や想定外の経験も、目の前にいるプレーヤーの指導にどう活かすか、どう学ぶかという点に対して非常に能動的かつ貪欲であり、その中で変えるべき点を変えるということを厭わず精力的である。これを支えているものは、周囲の協力や理解であり、学ぶ場や参加する機会である。同じ分野だけでなく他の競技のコーチとの交流、あるいは自身が講師として担当する機会やその準備の中で、多方面からの新しい情報を得るように努めている

という共通点がある。

③現場で抱えている課題

それぞれの現場で抱えている課題については、多種多様である。

まず、ハード面について、拠点となる施設・環境の確保、活動経費の調達にはかなり腐心されている現場は多いと考えられる。とは言うものの、“与えられるだけでなく、ハングリー精神とのバランス〔障害者スポーツ〕”という、プレーヤーの心意気に関わる部分への影響やその維持・さらなる引き出しの在り方も同時に考えを巡らせ、指導にあたっている。そして、その実現や運用にあたっては、自身の拠点となる活動領域・チームだけでなく、他の領域の組織・関係者からの理解を得て、連携する必要がある。現に、“関係者との間で、明確な目標・目的とその共有が十分ではない”との声は、今回複数のコーチから得られている。その共有・理解の範囲は、協会、コーチ・スタッフ、保護者、スポンサー、施設関係者など各方面に及んでおり、組織を越えて柔軟かつ効果的な関係づくりが重要といえる。

今回のインタビューでもっとも多く聞かれた現場の課題は、コーチの力量に関わる内容であった。プレーヤーの多様化や国際化が進む中で、専門性と人間的魅力の両面からみて、“コーチとして何ができるのか、を自他ともに問うべき〔スポーツ少年団・総合型地域スポーツクラブ〕”であり、また“世界のスタンダードをみる機会をもち、イノベーションができる力量がコーチに必要である〔ナショナルチーム〕”との指摘は、非常に重要な指摘だろう。時代の変化を実感するときにあって、非常に創造的な活動であるスポーツについて、その“スポーツの本質を伝えることのできるコーチ〔スポーツ少年団・総合型地域スポーツクラブ〕”を育成する必要性を、いま現場が強く感じているといえる。

こうしたコーチの力量を高める上で、今後、学ぶ内容や機会の充実が重要さを増すと考えられる。その学びの場では、現場と乖離しない科学的知見や情報の提供が必要であり、リアルに体感・実感できる場をいかに設定できるか、異なる競技のプレーヤーやコーチとの情報交流が貴重な機会になる。とりわけ、プレーヤーのモチベーションを必要なレベルまでいかに上げ、チーム全体として本気にさせるかといった心理的な側面、あるいは組織・チームの運営に関わるマネジメント・スキルの必要性は、さまざまな現場が抱えている課題である。これらの課題が、今回のインタビューでも指摘されていることを踏まえると、異なる競技だけに留まらず、異業種を含めた人たちとの交流は、新たな刺激の獲得や互いの領域・業界の理解を深める上でも有効だろう。

そして、これらの学びの場や交流の機会が十分に活用され、現場に還元されるために、プレーヤーだけでなく、そのプレーヤーを育成するコーチに対する支援体制が急務となるだろう。そして、それを有効に活用しようとするコーチの学びの姿勢、そして職場の支援体制の構築も同時に進める必要があり、これらのことが機能する人材・スタッフの育成に繋がると期待される。

3)わが国の体育系大学・学部における教育内容の確認

(1)体育系大学学長・学部長会加盟大学へのアンケート調査結果

・目的および方法

わが国の体育系大学学長・学部長会加盟大学(以下、「体育系大学」という)全26校におけるコーチ育成コースにおいて、学校案内やシラバス等各種資料からコーチ育成コースの概要、コンセプト、設置科目とその内容を確認し、共通点・課題などの整理・分析を行うことを目的とする。

・結果

①体育系大学のコーチ育成コースの概要(まとめ)

a)コーチ育成コース

表13に体育系大学全26大学における「コーチ」または「コーチング」というコース名を付したものを表13にまとめた。「コーチ」という名前を付していないコースについては、大学案内等による各コースの概要から、コーチまたはコーチ育成を目的としているコースを掲載した。

体育系大学26大学の内、「コーチ」または「コーチング」というコース名を付した大学は18大学(69%)であり、多くの大学においてコーチ育成コースが設置されている。

なお、表中に丸印で示した通り、全ての大学において保健体育教員免許の取得が可能となっている。

表13 体育系大学におけるコーチ育成コース

大学	コーチ関係のコース	教員免許取得
A	スポーツコーチング主専攻	○
B	スポーツ総合課程アスリート・コーチング系	○
C	コーチ教育コース	○
D	スポーツ科学専攻スポーツコーチング	○
E	アスリートコース	○
F	アスリート・コーチコース	○
G	競技スポーツ科学モデル	○
H	コーチング科学コース	○
I	競技コース	○
J	スポーツコーチング専修	○
K	コーチング科学コース	○
L	コーチング学コース	○
M	競技スポーツ領域	○
N	コーチ・トレーナーコース	○
O	スポーツコーチング・コース	○
P	スポーツコーチングコース	○
Q	スポーツ教育系スポーツコーチコース	○
R	コーチングコース	○
S		○
T	コーチングコース	○
U	スポーツコーチング	○
V	競技スポーツコース	○
W	スポーツコーチングコース	○
X	スポーツコーチングコース	○
Y	スポーツ教育学コース	○
Z		○

b) 目指すコーチ

表 14 は、体育系大学コーチ育成コースにおいて目指されているコーチについてまとめたものである。

体育系大学 26 大学の内、各学科・コースの目標として目指すコーチが示されていたのは 17 大学(65%)となっている。

コーチ育成コースを有する大学 18 大学の内、目指すコーチが示されていたのは 14 大学(77%)であり、コーチ育成コースが設置されていない大学でも、学科・コースの目標としてコーチを育成することが示されている大学は 7 大学中 4 大学となっている。

目指すコーチが示されている 17 大学の内、各学科・コースの目標として、「競技スポーツを対象としたコーチ」としているのが 2 大学、「生涯スポーツから競技スポーツまでや体育・スポーツ分野など、対象者に応じて柔軟に対応できるコーチ」としているのが 3 大学、「プロフェッショナルやスペシャリストとしてのコーチ」としているのが 3 大学となっている。その他には、「有能」、「質の高い」、「優れた」、「高度な」、「スポーツ界をリードする」という言葉により示唆するのが 8 大学となっている。なお、Y の大学においては、「スポーツを観る、実践する楽しさを伝えられるコーチ」としている。

表 14 コーチ育成コースにおける目指すコーチ

大学	目指すコーチ・指導者
A	有能な指導者
B	
C	プロフェッショナルコーチ
D	高い資質を身につけたよき指導者
E	優れたスポーツ指導者
F	スポーツのスペシャリストとしてのスポーツコーチ
G	
H	
I	競技スポーツ指導者、競技サポートを行うスタッフ
J	体育・スポーツ分野でのスポーツ選手の指導者
K	高度な指導者
L	
M	
N	日本のスポーツ界をリードするコーチ
O	競技スポーツにおける専門的指導者
P	広範な実践レベルに対応できるスポーツ指導者
Q	競技～生涯スポーツまで幅広い領域のスポーツ指導者
R	スポーツや一般社会で通用する優れた指導者
S	
T	
U	
V	プロチーム、実業団などのコーチ
W	フィジカル・メンタルともに指導できる有能なコーチ
X	21世紀日本のスポーツ界を担う学識豊かなスポーツ指導者
Y	スポーツを観る、実践する楽しさを伝えられる指導者
Z	

c)コーチ育成コースで身につける能力

表 15 は、表13 の体育系大学におけるコーチ育成コース等で身につける能力についてまとめたものである。

表 15 コーチ育成コースで身につける能力

大学	身につける能力
A	幅広い教養と専門的知識
B	科学的基礎知識・応用能力、競技スポーツの専門的能力
C	科学的理論に基づく実践的指導力、教育者としての教養
D	スポーツ指導の専門的能力、最新スポーツ科学に則った競技理論やコーチング
E	スポーツとスポーツ理論を究める
F	科学的専門知識、世界でもレベルの高いトレーニング理論、コーチング理論
G	幅広いスポーツ科学の基礎、他者に伝えるためのコーチング技法や知識
H	科学的データを元にした効果的指導技術、自然科学、人文社会科学まで広範な領域
I	体育学・スポーツ科学の知識
J	高度で専門的な知識と指導力
K	スポーツの科学的知見、パフォーマンス向上のためのトレーニングやコーチングに関する知識
L	専門競技力と専門指導力、最高の技能を引き出すための指導法、実践的指導力
M	より高い競技力を獲得するために必要な高度な実践力と専門的知識
N	高度な知識と実践能力
O	競技力向上に必要な知識や技能、選手を望ましい方向へと導くことができる専門的知識と指導力
P	スポーツ科学やさまざまなレベルのスポーツ技能向上策、コーチングの理論と方法
Q	基礎～応用まで実践的な知識とスキル、最新のスポーツ科学に基づいたコーチング
R	高度で専門的なコーチングに関する知識および技能
S	
T	理論と技術を兼ね備えた高度なコーチング能力
U	力的側面、技術的側面、心理的側面などの体系的なコーチング理論
V	
W	
X	豊富な学識や技術の伝達能力、資金調達や運用等実務能力、スポーツを巡る倫理、社会貢献
Y	
Z	

表 15 の体育系大学においてコーチが身につける能力について、26 大学中 21 大学においてはそれぞれの能力が示されており、大別すると次の 4 つにまとめられる。

表 16 身につける能力の分類

能力	学校数
コーチングスキル、指導力、指導法、実践能力	17
科学的知識	10
専門的知識、教養	10
競技スキル、競技力	3

最も多いのは、コーチングスキルや指導力などであり、次いで科学的知識や専門的知識となる。コーチとしての知識・技能だけではなく、競技力・競技スキルとしている大学も3大学ある。

全体の傾向としては、知識だけでなくコーチング実践能力を兼ね備えるとともに、質の高い科学に裏づけされたコーチングスキルの獲得を目指していることがうかがえる。

②各大学の「コーチング」科目の概要

表17は、コーチ育成コースで履修できるコーチング科目において修得を目指す能力について、各大学のシラバスを参照にまとめたものである。

なお、この表に記載した科目は、「コーチング」や「指導法」、「指導者」を付した科目についてのみであり、いわゆる「競技種目別のコーチング」は含めていない。

体育系大学26大学中25大学には「コーチング」や「指導法」に関する科目が存在しており、最も多い大学では14科目となっている。理論だけの科目を設定しているのは25大学、理論だけでなく実習・演習を設定している大学が14大学となっている。

表17 コーチング科目で修得を目指す能力等

大学	コーチング科目			コーチング科目で修得を目指す能力等
	数	理論	実習演習	
A	6	3	3	競技力、人間力、リーダーシップ、マネジメントスキル、問題解決スキル、リスクマネジメント、分析・評価能力、コーチングスキル
B	3	2	1	コミュニケーションスキル、問題解決スキル、マネジメントスキル、コーチングスキル、実践能力、ジュニア～一流
C	5	4	1	スポーツの意義を理解する、コーチングスキル、科学的、実践能力、心理
D	3	2	1	指導者のあり方、指導方法、リーダーシップとフォロワーシップ、コミュニケーション力、実践的
E	1	1	0	スポーツを安全に、正しく、楽しく指導し、スポーツの本質的な楽しさ、素晴らしさを伝える能力
F	3	2	1	指導者の心構え、コーチの資質・役割・責任、トップアスリートの指導法・高度なコーチング、実技指導能力
G	9	5	4	論理的思考、表現技術、コミュニケーション能力、マネジメント能力、国内・国際競技力向上の指導法、ハイレベルなコーチング能力、科学、心理
H	2	1	1	競技スポーツのコーチング、高度なコーチング、コーチングの基礎、集団統率力や社会性
I	1	1	0	コーチ哲学、コーチとしての適正、合理的なコーチング
J	1	1	0	コミュニケーション能力、問題解決スキルの獲得、マネジメント能力、モラル
K	2	2	0	選手育成の方法、部活動～プロスポーツに至る競技力向上の方法、競技力向上のための組織作りや指導法、自ら思考し実践する能力
L	2	2	0	指導者の考え方や指導方法および指導者と選手の関わり方、競技力を高めるコーチング、コーチングの技術力・戦術力
M	7	7	0	スポーツ指導の基礎、危機管理能力、スポーツ指導法、好ましい指導者像確立の基礎、アスリートの競技力向上をサポートする能力、科学的
N	8	4	4	指導理念、コーチングスキル、コミュニケーション力、観察力、洞察力、伝達する力、コンディショニング、心理、科学的
O	7	5	2	指導者の機能と役割、マネジメント、競技力向上・生涯スポーツのコーチングスキル、実践的指導力、トップアスリート育成法、ジュニア指導
P	14	4	10	初心者～競技者のコーチング、問題解決能力、心理、障害者、プレゼンテーション能力、科学的
Q	8	5	3	科学的、心理、役割、心構え、モラル、地域スポーツ指導、競技スポーツ、実践力、コミュニケーション、チームマネジメント
R	10	6	4	コーチングスキル、実践力、伝達能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、コーチング背景（国、機関等）、競技者育成、システム、法律
S	1	1	0	コーチング、科学
T	5	4	1	コーチング、スポーツマンシップとフェアプレー、競技力向上
U	3	2	1	コーチング、指導者の役割、アスリートの発掘・育成
V	1	1	0	指導理念、コーチング
W	2	2	0	コーチング、実践力
X	2	2	0	コーチング、初級段階からトップレベル
Y	4	4	0	コーチング、マネジメント力、ジュニア、実践力、リーダーシップ、競技スポーツ・学校教育現場・健康運動分野での優れた指導者の資質
Z	0	0	0	

また、コーチング科目で身につける能力を大別すると、表 18 のとおりまとめられる。

表 18 コーチング科目で修得を目指す能力等

分類	能力等
スキル・能力	コーチング、マネジメント(リスク、チーム)、課題解決、コミュニケーション、プレゼンテーション、論理的思考、観察力、洞察力
知識的要素	スポーツ科学、スポーツ心理学、法律、スポーツの意義・本質、コーチ哲学・理念
競技的要素	競技者育成法、競技力向上、技術力、戦術力、
資質的要素	リーダーシップ、フォロワーシップ、スポーツマンシップ、フェアプレー精神、人間力、コーチの在り方心構え、役割、責任、適正、モラル、社会性
コーチングの質	実践的、基礎、高度、合理的
コーチングの対象	初心者、ジュニア、学校部活動、アスリート、トップアスリート、障害者、地域スポーツ、生涯スポーツ、健康分野

大別すると、コーチングスキルやマネジメントスキルなどコーチングにおけるスキル・能力、スポーツ科学などの知識的要素、競技力向上に関わる競技的要素、リーダーシップやコーチの心構えなどコーチの資質的要素、基礎的なコーチング、高度なコーチングなどのコーチングの質、初心者からトップアスリートなど、コーチングの対象の計6分類である。

スキル・能力について、各大学ともいわゆる「コーチングスキル」の修得はほぼ共通して目指しており、コミュニケーションスキル、リスクマネジメントやチームマネジメント、課題解決スキルなど、幅広いコーチングスキルの獲得を目指していることがうかがえる。

知識的要素について、科学的コーチング、コーチングの心理などスポーツ科学的要素が多いが、スポーツの意義やコーチ哲学などを学ぶ科目・大学もみられる。

競技的要素について、前述のとおりここでは競技種目別のコーチング科目は含めてはいないが、競技力向上のためのコーチングや競技者育成方法、技術や戦術などの修得を目指す科目・大学がみられる。

資質的要素について、各大学とも、リーダーシップ、フォロワーシップ、スポーツマンシップ、フェアプレー精神、人間力などに加え、コーチの在り方や心構え、役割、モラルなど様々な資質能力の修得を目指していることがうかがえる。

コーチングの質については、特段傾向はみられないが、実践的、基礎的、高度なコーチングなどが散見された。

コーチングの対象について、ジュニア、学校部活動、トップアスリートなどを対象としているものが多く、ジュニアからトップアスリートなど幅広く対象としている内容もあった。また、地域スポーツ、生涯スポーツや障害者を対象としたものなど、一般スポーツレベルを対象としている科目もみられる。

なお、各大学の科目の中には、スポーツの意義や本質、コーチの心構え、コーチの役割などについて日本体育協会公認スポーツ指導者養成カリキュラムの共通科目に準じた教育内容となっているものも見られた。

(2) 体育系大学・学部におけるコーチングに関する特徴的な取り組み

ここでは、体育系大学の内、5大学の特徴的なコーチング科目またはコーチングコースについて紹介する。

専門的な学問領域の学びと実践/実習を重視した取組

筑波大学

i) 科目名：一般コーチング学

ii) 学びの特徴

筑波大学体育専門学群の授業科目構成は、基礎科目(一般教養科目)、専門基礎科目、専門科目の3つによって成り立っている。対象とした一般コーチング学は、コーチング学分野の専門基礎科目にあたり、選択必修科目として受講される(その他には、運動学、個別コーチング学、個別トレーニング学が含まれる)。専門基礎科目とは、体育・スポーツ科学の基礎理論を習得する科目のことであり、コーチング学分野からは、将来コーチを目指す学生のための実践的な運動知識やコーチングのための思考・行動スキルに関する授業が配置されている。その他、体育・スポーツ学分野、健康体力学分野では、体育学を学ぶ学生に必要な不可欠な人文系および自然科学系学領域の基本的学問を学ぶ授業が配置されている。さらに、各種のスポーツ種目を幅広く指導するための実技・理論実習も配置されている。

一般コーチング学は、コーチを目指す人材に欠くことのできない内容を取り扱っており、コア・カリキュラムの作成に参考になると考え、筑波大学からはこの一般トレーニング学の授業について紹介したい。

図13 に示すように、コーチは様々なコーチング資源をプレイヤーやチームの特徴や目的に合致した形で利用することが要求される。

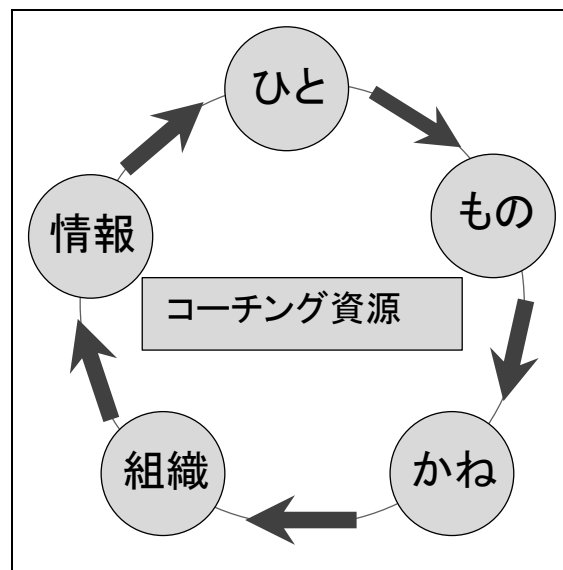


図13 コーチング資源

また、図 14 に示すように、一般コーチング学の授業で取り扱う知識やスキルは、スポーツを行う目的から分類できるアスリート、生涯スポーツを行う一般国民、学校体育や課外活動を行う児童・生徒、楽しみや美しさを目的とする一般国民のすべてに共通するものである。また、アスリートの持つ特徴から分類できるトップアスリート、ジュニアアスリート、シニアアスリート、障害者アスリートのすべてに共通するものである。さらに、どのスポーツ種目であっても、パフォーマンスを向上させるために共通するものでもある。以上の認識を持って、授業名にある「一般」の意味を捉える必要がある。

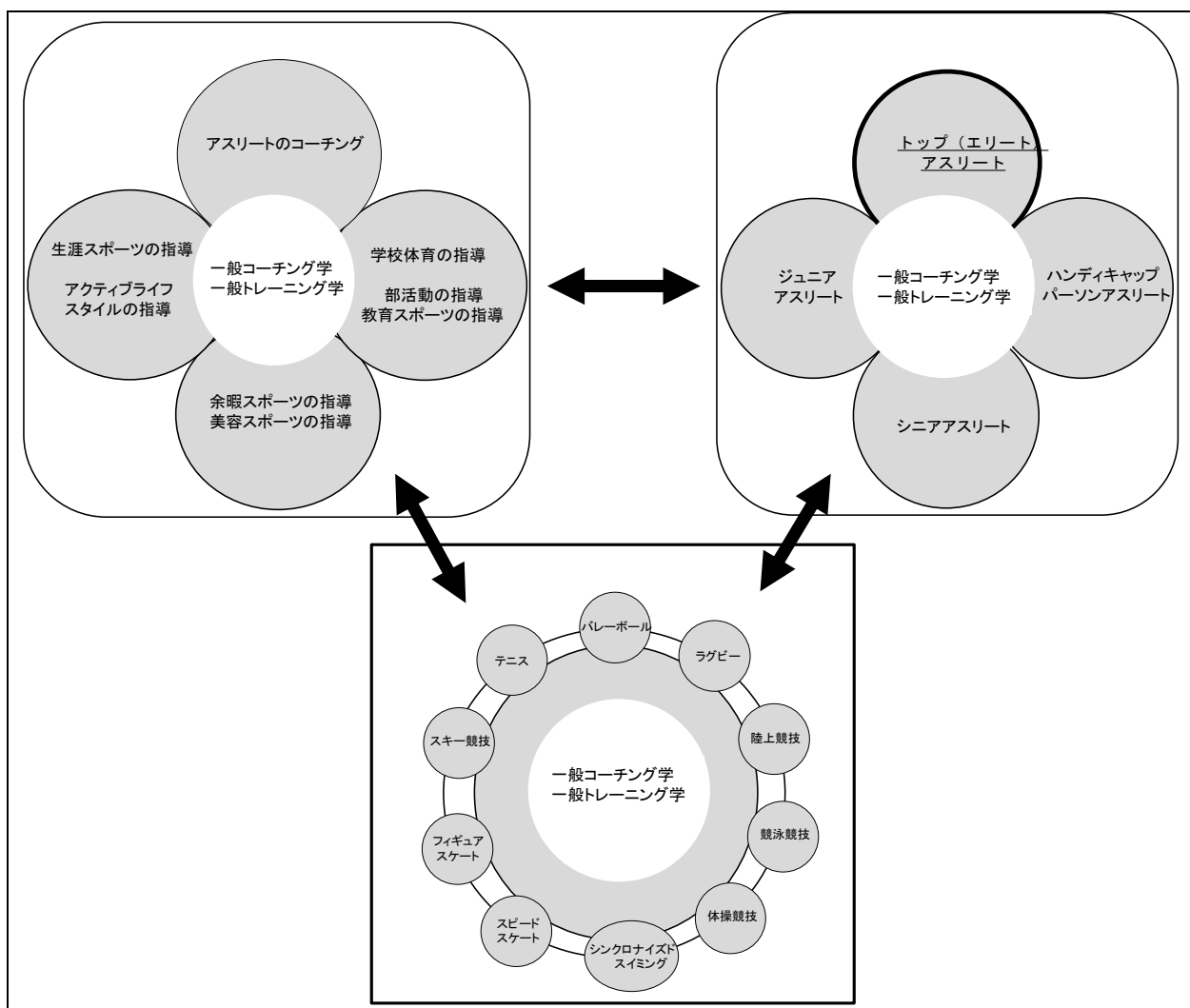


図 14 様々な出来事の共通事項としての一般コーチング学と一般トレーニング学

【一般コーチング学授業概要】

図 15 に示すようにアスリートファーストとダブルゴールの考え方を理解し、そのために必要となる指導行動と育成行動の2つのコーチング行動について学ばせる。

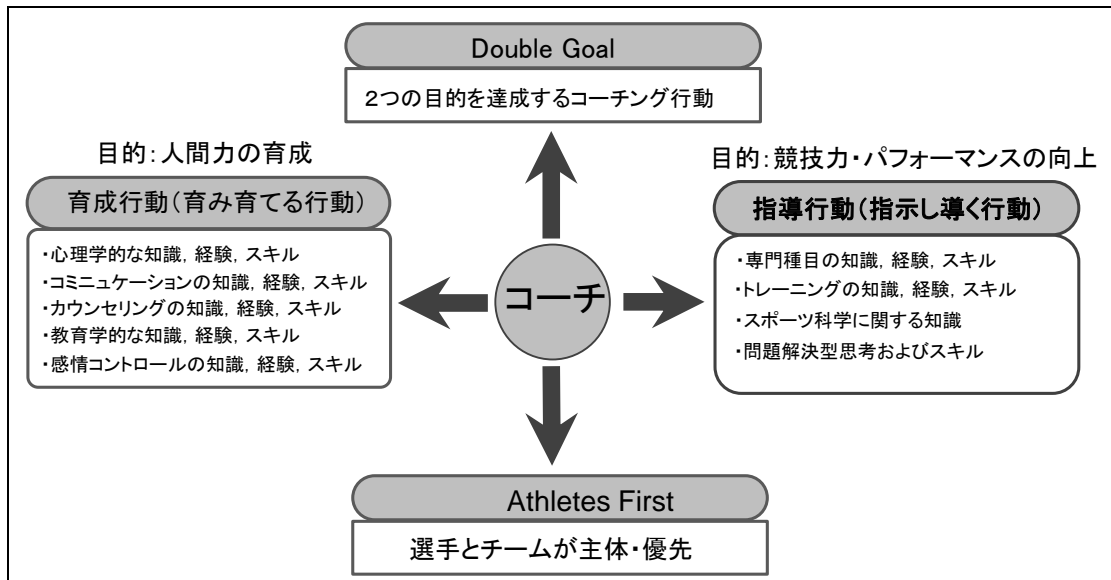


図 15 プロフェッショナルコーチ(専門職業人)におけるダブルゴールとアスリートファーストとのための二つの行動基軸

また、指導行動および育成行動に加えて、図 16 に示すように、事故防止・安全対策行動、マネジメント行動、国際性に対応できる行動、以上の5つの行動スキルについて学ばせる。

さらに、図 17 に示すように、5つの行動を行う前提として存在する正しく適切な倫理・哲学について学ばせる。

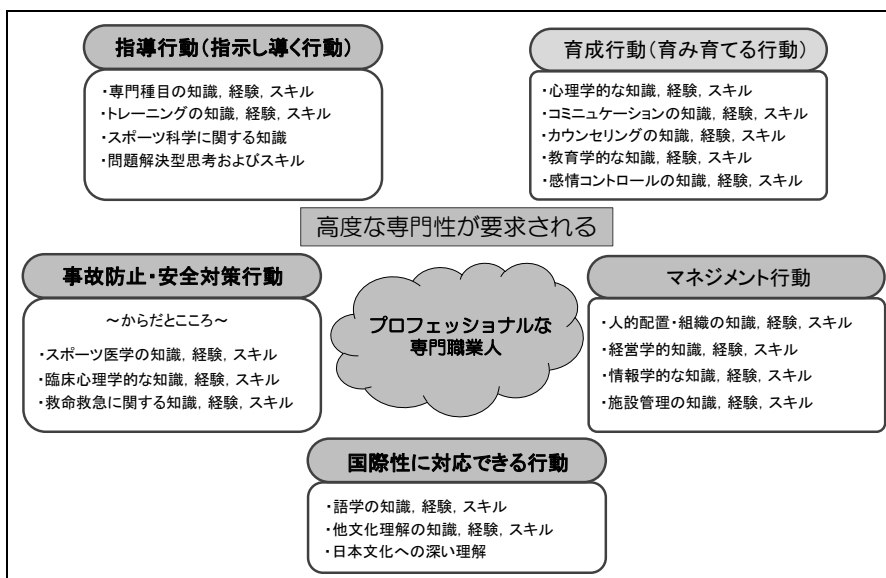


図 16 筑波大学における一般コーチング学で教えるコーチング行動モデル

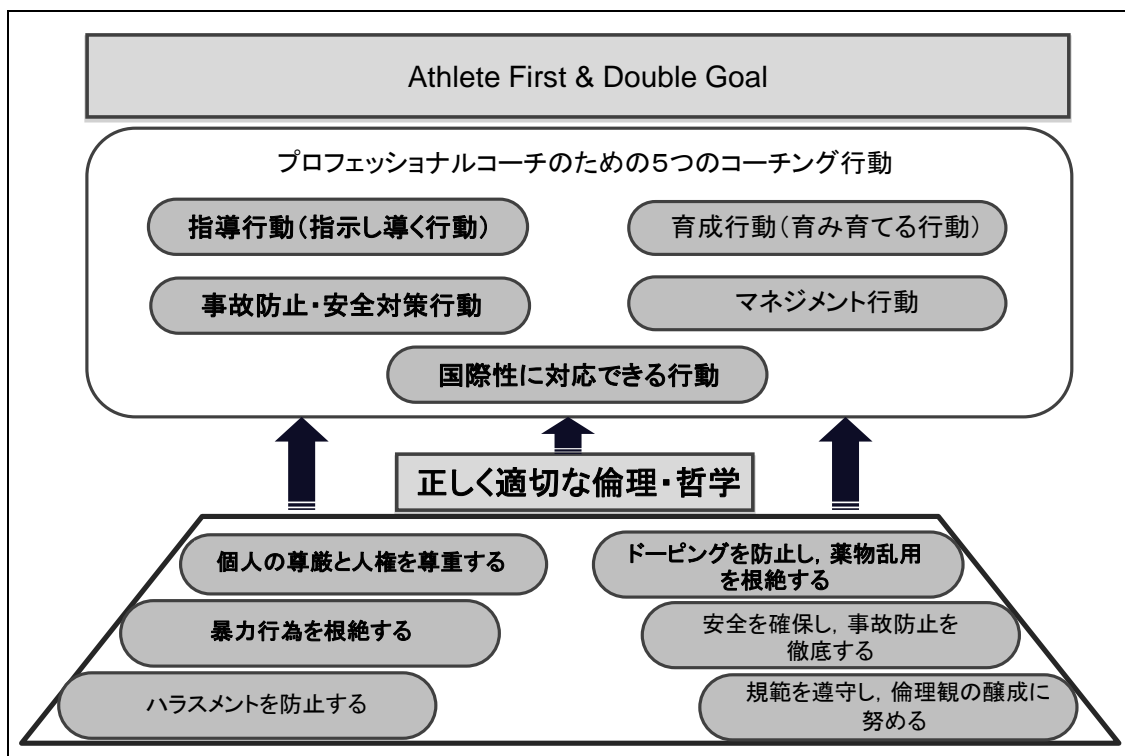


図 17 プロフェッショナルコーチングのための5つの行動とその土台となる哲学・倫理
 -筑波大学における一般コーチング学で教えるコーチングモデル -

これらのことを体系的かつ原理的に理解することによって、大学4年間で履修する基礎科目(一般教養科目)、専門基礎科目、専門科目などの諸授業による学びを、自分自身のコーチングへと組み込むための基礎を確立する。

主な内容は下記の通りである。

- ・コーチング学とは何かを知る

スポーツ科学・体育学とコーチング学、コーチング学の理論体系

- ・コーチの仕事を知る

コーチに要求される能力、コーチングスタイル、コーチの種類と類型化

- ・二つのコーチング行動スキルとその内容を知る

- ・コーチングにおける指導行動の理論と方法を知る I

指導行動に不可欠な問題解決型思考・行動スキル、日本型コーチングの今日の問題とこれからの課題

- ・コーチングにおける指導行動の理論と方法を知る II

指導行動に不可欠なトレーニングサイクルとトレーニング学

- ・コーチングにおける指導行動の理論と方法を知る III

指導行動と科学的なエビデンスの関係(Evidenced Based)、

スポーツ科学の利用とその限界、複雑系としてのパフォーマンスへの取り組み、事例・物語的出来事(Narrative Based)としてのコーチング

- コーチングにおける育成行動の理論と方法を知る I
「ほめる」、「しかる」、「聴く」、「話す」、を理解する
- コーチングにおける育成行動の理論と方法を知る II
日本型コーチングの今日的課題とこれからの課題、暴力、体罰問題を考える
- コーチングにおけるマネジメント行動を知る
コーチに要求されるマネジメント行動の体系、事例提示
- コーチングにおける事故防止・安全対策行動を知る
コーチに要求される事故防止・安全対策行動、事例提示
- コーチングにおける哲学・倫理の重要性を知る
- 対象者の特徴に合わせたコーチングを知る
ジュニア、女性、シニア
- コーチングにおけるリスクマネジメントを知る
リスクの種類と事例、スポーツと法律、判例提示、
リスクマネジメントの方法、コーチのバーンアウト

上記が一般コーチング学の主な内容である。いずれも、コーチがアスリートファーストとダブルゴールを成し遂げるための内容である。専門的な学問領域を学び、母体科学としての学問の知識が深まれば、それがまたコーチングのスキルを高めることに繋がる。したがって、一般コーチング学は1年生～2年生の初期段階で行うべき授業であり、これによって、専門的なスポーツ科学や体育学の学問の知識を入れる整理箱が学生の頭の中に作り出される。専門的な学問に関する授業を先に行う場合に比較して、学びへの意味づけが強く理解できるようになる。

なお、ここでは説明しないが、一般コーチング学における指導行動の内容の中核に、一般トレーニング学が内在していることを理解すべきである。図 18 および表 19 は、一般トレーニング学の理論体系を示したものである。この一般トレーニング学の中に、スポーツ生理学やバイオメカニクス、スポーツ栄養学やスポーツ心理学などの関連諸科学の知識が目的的に統合されて、スポーツパフォーマンス向上のために有機的な意味や価値を持つことになるのである。

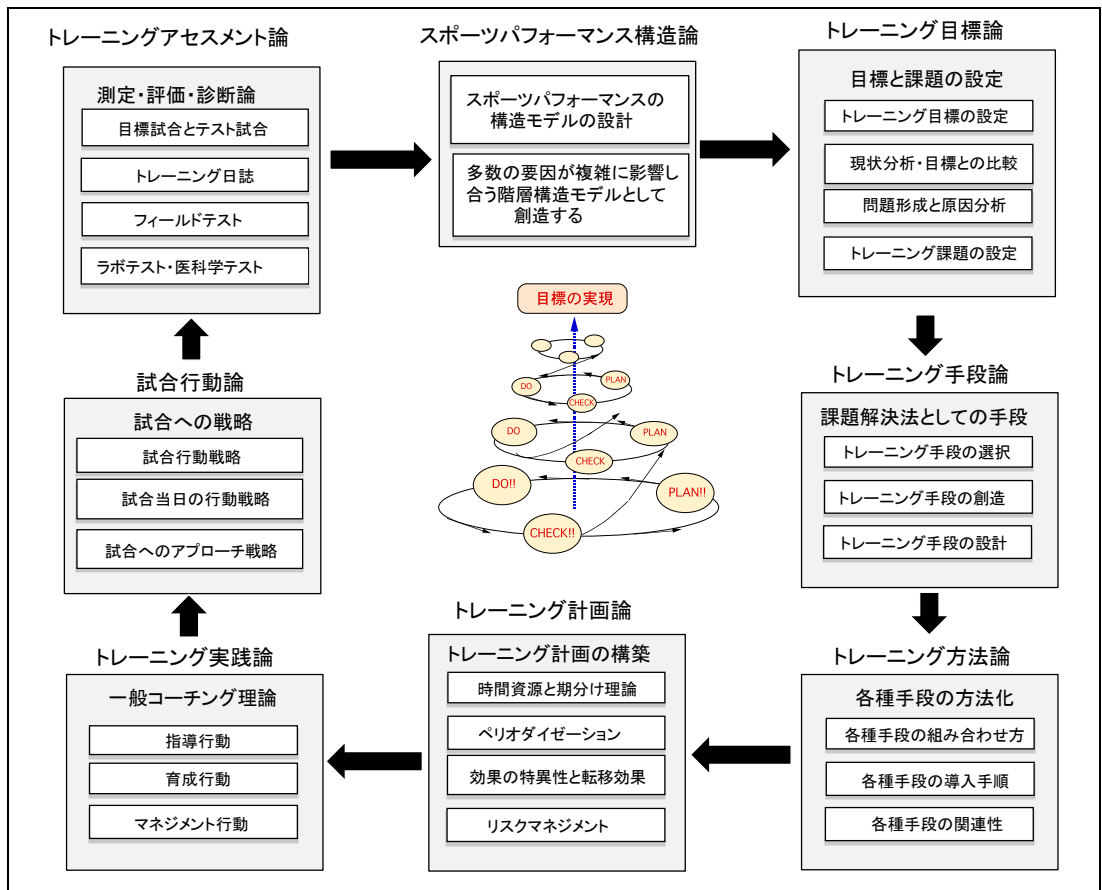


図 18 筑波大学における一般トレーニング学で教えるトレーニングサイクルモデル

表 19 筑波大学における一般トレーニング学で教えるトレーニング理論の体系

スポーツパフォーマンス構造論

専門スポーツ種目における戦略および戦術、技術、体力、メンタルな要因などの抽出と構造化

トレーニング目標論

目標設定、問題形成、原因分析、課題の提示と優先順位に配列構造化

トレーニング手段論および方法論

戦術トレーニング論	筋力・パワートレーニング論
体力トレーニング論	スタミナ・持久力トレーニング論
メンタルトレーニング論	コーディネーション論

トレーニング計画論

マイクロ・メゾ・マクロ周期論、ピーキング論、コンディショニング論

トレーニング実践論(一般コーチング論の一部を含む)

トレーニングアセスメント論

トレーニング測定論、評価論、診断論

試合論

授業は講義形式で行われているが、様々な映像や事例を提示し、実感を持たせる授業になるように工夫されている。授業後半には、学生の学びが適切であったか、授業の内容からどのような発展的な思考が展開されているのかを評価するために、小レポートを作成させている。

現場実習・指導体験実習を重視した取組

大阪体育大学

i)科目名:インターンシップ(体育学部スポーツ教育学科スポーツ心理・カウンセリングコース)

ii)授業の概要

実際のコーチング現場でのインターン実習を通して、職業選択や就職活動への道を開き、教育者、スポーツコーチとしての素養を身につける。また、大学で学んだスポーツ心理学やスポーツカウンセリング、メンタルトレーニングに関する知識や技術を、現場での指導経験を通して自分の力量として身につけることが目的である。

iii)学びの特徴

本授業は、学内において前期に事前研修15コマ、後期に事後研修15コマの講義・演習があり、夏季休暇中に12日間以上かつ80時間以上の学外実習(現場での指導体験実習)を実施することにより構成されている。

具体的な実習先は、学校インターン(中学校・高等学校における部活動指導、教育委員会や適応指導教室)や幼児教育施設、障害者スポーツ施設、健康増進施設などであり、ときには実業団やプロスポーツチームで実習を行う場合もある。さまざまな年代や対象者への指導体験実習が学びにつながるよう、事前研修と事後研修がそれぞれ15週ずつ、計30週が配置されている。

前期における事前研修は、主に講義形式およびグループワークにて行い、PDCAサイクルや目標設定などの心構えや、学び続けることの大切さを学ぶ。インターンシップ体験談や受け入れ施設の紹介などで外部講師を招くことがある。また、キャリアプログラムとして職業適性検査などを実施し、その結果をフィードバックしている。

後期は学生によるパワーポイントを用いた実習報告プレゼンテーションが中心で、実習を通じて得た成果や、今後身に付けなければならない課題などを明確にする。その際、担当教員がファシリテーターとなり、グループディスカッションを進めることで成果の共有と課題の解決に向けた取り組みを促すよう心掛けている。グループ体験を通じて、受講生のコミュニケーション力の向上も目指している。

本科目は、担当教員のほか、ゼミ担当教員も実習施設巡回指導などの役割を分担し、コース全体で取り組んでいるのが特徴である。座学と実習、振り返りを組み合わせた科目であり、受講生の評価も高い。なお、インターンシップは大阪体育大学体育学部設置されたすべてのコースで実施されており、実習先などはそれぞれに特徴的であるが、事前研修と現場実習、事後研修を組み込んでいることが共通である。

現場で必要なコーチングの専門的知識と演習/実践を重視した取組

日本体育大学

日本体育大学体育学部は2013年に大幅なカリキュラム改訂を行った。コーチの育成は、体育学部を構成する体育学科、健康学科、社会体育学科、武道学科の全てで行われ、様々なニーズに

応えようとしている。その中でも特に体育学科内の競技スポーツ領域において、競技者として活動している学生が、その経験を活かしたコーチとしてのキャリアを歩むためのカリキュラムを構成している。ここでは競技スポーツ領域のコーチ育成に関わる授業科目の関連性と特徴的な科目の具体例を紹介する。

	2年次	3年次	4年次
専門的知識 Professional Knowledge	コーチング学 スポーツトレーニング論A(心) スポーツトレーニング論B(技) スポーツトレーニング論C(体)		
対他者の知識 Interpersonal Knowledge		コーチング演習	
対自己の知識 Intrapersonal Knowledge	実践プロジェクトA サポートプロジェクトA	実践プロジェクトB サポートプロジェクトB	実践プロジェクトC サポートプロジェクトC

実践プロジェクト：競技力向上実践プロジェクトの略
サポートプロジェクト：競技力向上サポートプロジェクトの略

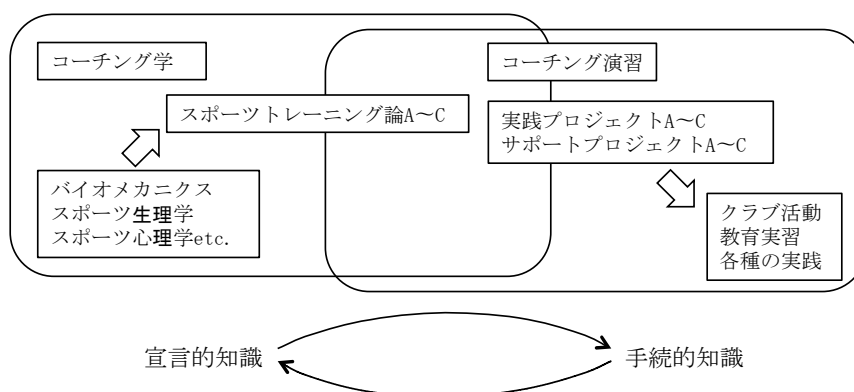


図 19 日本体育大学体育学部体育学科競技スポーツ領域のコーチング関連主要科目等の関係

競技スポーツ領域でのコーチ育成に関わる主要科目とそれらの履修計画を図 19 に示した。コーチングの基本的考え方を学ぶコーチング学が2年次に設定されている。そしてスポーツトレーニング論 A(心)とスポーツトレーニング論 B(技)、スポーツトレーニング論 C(体)が2年次に配置されている。大学での授業は通常学問体系に基づいて授業科目が設定されるが、実際の競技力向上場面では学問的枠組みにとらわれることなく、目的に応じて様々な学問領域の知識を組み合わせる必要がある。このスポーツトレーニング論 A~C は心技体という3つの枠組みを通して、現場での目的に応じて学際的なアプローチがとれるようになることを狙いとして設定している。競技力向上実践プロジェクト(実践プロジェクト)A~C と競技力向上サポートプロジェクト(サポートプロジェクト)A~C は、それぞれの学生が自らの活動場所で、授業で学んだ理論と実践とを結びつけ、自らを省察しつつ、競技者やコーチ、その他のサポートスタッフとしての力を身につけていくことを狙いとして設定された科目であり、2年次から4年次までの3年間行われる。3年次に設定されているコーチング演習では、現場の課題の解決方法について議論を通して考えたり、コーチとアスリートの役

割を設定したロールプレイなどを通して理論的背景に基づいた効果的なコミュニケーションスキルを身につけていくことを想定して設定している。

効果的なコーチングに必要なコーチの知識として専門的知識(professional knowledge)、対人関係の知識(interpersonal knowledge)、対自己の知識(intrapersonal knowledge)が必要であるとされているが(Gilbert & Côté, 2009)、競技スポーツ領域の科目はこれらの知識を念頭に配置されている。近年のコーチ教育プログラムの有効性に関する文献で、多くのコーチ教育プログラムが宣言的知識としての専門的知識の提供に偏り、さらに学問体系そのままに授業が提供されていることなどが原因となり、コーチング実践力向上に対するプログラムの有効性が疑問視されている。特にコーチに必要なとされている知識のうち対他人の知識と対自己の知識については、様々な研究でその重要性が指摘されているにも関わらず、コーチ教育プログラムへの組み込みが進んでいなかった。そこで日本体育大学では 2013 年の新カリキュラム導入にあわせて、対他人の知識の獲得を主たる目的とした「コーチング演習」と、対自己の知識の獲得を狙った「競技力向上実践プロジェクト A~C」および「競技力向上サポートプロジェクト A~C」を取り入れることとした。

実践プロジェクトおよびサポートプロジェクトの A は2年次、B は3年次、C は4年次の設定となっている。実践プロジェクトは自らが競技者として競技力向上を目指している者が受講することが想定され、サポートプロジェクトは学生コーチやトレーナー、アナリストなど、競技者の競技力向上をサポートする様々な役割を担う学生が履修することが想定されている。両プロジェクトでは自らがそれまでに学んだ学問についての振り返りを行い、授業での学びをどのように競技力向上の現場に活用できるかについてグループディスカッション等を通して考える。例えば、「興味深かった授業の科目とその理由」「競技力向上実践(サポート)でうまくいったこととうまくいかなかったこと」「授業で競技力向上実践に活かした内容はどのようによく活かしたのか」「競技力向上実践に活かされたかもしれない授業内容と活かせなかった理由、今後活かす方法」を考える。これらを踏まえ、パフォーマンス・プロファイリングの手法を用いて自らの目標設定を行い、定期的にその振り返りを行い、目標の再設定を行うというサイクルを繰り返すアクションリサーチスタイルを採用している。これにより実践者が主体となった目標設定のスキルと省察的実践者としての内省習慣が身につくことが期待されている。

コーチング演習は3年次に設定されている科目であり、2015年度からの開講となる。この演習は、課題解決力や対他者の知識を発展させることを目的として設定されている。そのため、様々なコーチング現場のシナリオを用意し、そこで出てくる課題を解決する方法についてグループディスカッションを行ったり、マイクロコーチングを実施して課題を解決していく方法をシミュレーションを通して身につけていく。特に、理論的背景に基づいたクエスチョニングやその他のコミュニケーションスキルについて扱う。クエスチョニングに関することでは、上位の質問と下位の質問を使い分けたり、プロビングやプロンプティングを使ってアスリートの考えを引き出すスキルを身につける。また、先述のパフォーマンス・プロファイリングや GROW モデル(Goal, Reality, Option, Will)によるプレーヤー主体の目標設定を支援するスキルを磨いたり、プレーヤーの自律を促す自律性支援行動について扱う。

2011年4月に開設した大学院実践学コース・コーチング学系ではプラクティカムが必修として設定され、さらに高いレベルの理論的背景に裏付けられた競技力向上やコーチングの実践力向上を

目指した教育や研究が行われており、学部から大学院にかけて、一貫したカリキュラムによるスーパーコーチの育成を目指している。また、さらに 2014 年度からは NSSU Coach Developer Academy にてコーチを育成するコーチ育成者の養成を国際コーチングエクセレンス評議会と共同で行っている。

教員採用試験を念頭においた実習を重視した取組

早稲田大学

i) スポーツ授業指導実習

授業デザイン(2 単位) / 授業研究(2 単位)

ii) 学びの特徴(授業概要)

スポーツ授業指導実習: 授業デザイン(教育コース基礎科目; 2 単位) / 授業研究(教育コース選択科目; 2 単位)は、共にスポーツ授業づくりのための基礎的知識を習得し、よいスポーツ授業を実現するための実践的指導力の向上を図ることをねらいとした授業である。

1) スポーツ授業指導実習: 授業デザインでは、スポーツ授業の指導計画を立て、教材づくりを行い、学習資料を作成した上で、「コーチ」役と「プレイヤー」役に分かれて実際に模擬授業を行う。また模擬授業では、スポーツ授業のデータ収集ならびに分析方法についての理解を深めるために、授業場面の期間記録法や教師の相互作用行動分析法などの組織的観察法を用いて授業観察に取り組むことによって授業の省察能力も高めていく。

< 主な授業内容 >

- ・教科内容ならびに発達段階に応じた教材開発、映像コンテンツの作成
- ・教材案の発表会(映像コンテンツを用いたプレゼンテーション)
- ・授業観察法の習得(授業場面の期間記録法、教師の相互作用行動分析法)
- ・学習指導案と学習資料の作成(教科内容ならびに教材の検討、学習指導過程の立案)
- ・模擬授業ならびに授業観察・分析(授業の省察 / 授業データの集計)
- ・成果に関するプレゼンテーション

2) スポーツ授業指導実習: 授業研究では、実際のスポーツ指導場面において適切なマネジメント力を発揮し、生徒に対して効果的なフィードバックを提供するために必要な専門的知識・技術を身に付け、それらを活用した実技指導を実践するための力量を高めることをめざす。中学校ならびに高等学校学習指導要領に示された個人スポーツ(陸上競技、ダンス、器械運動、水泳)を取り上げ、各スポーツ種目の専門家から、技術指導ならびに技術習得のポイントについて実際に体を動かしながら学ぶ。毎回、スポーツ教育学の専門家が指導・活動場面を録画し、その後、指導内容を映像で振り返りながら技術指導のポイントを整理し、学習指導案の作成に取り組む。なお、本授業は、教員採用試験における専門教養や実技試験への対策も兼ねている。

< 主な授業内容 >

- ・陸上競技、ダンス、器械運動、水泳に関する技術指導のポイントの説明ならびに実技
- ・学習指導案の検討、インストラクション技術ならびにデモンストレーション能力の習得・向上

iii)本授業の課題

- ・指導実習であることから、履修者全員が「コーチ」役を経験できればよいが、毎回、履修生が多く、すべての学生が「コーチ」役を経験できない。
- ・スポーツ教育学やスポーツ指導論等の指導法に関する理論を学んだ教育コースの学生にとっては、理論をふまえた実践方法を有意義に学ぶ機会となるが、理論を学ばずに履修した学生は十分な学習成果が得られない。

教員の指導の観察・補助を通じた実践力獲得を重視した取組

立命館大学

i)科目名:アドバンスト・コーチング(実習)プログラム

ii)学びの特徴

①立命館大学スポーツ健康科学部のカリキュラム・科目の概要

スポーツ科学部では教学の柱として、理論と実践、リーダーシップとコーチングを掲げている。そのため、理論および専門知識の習得については、4つのコース(スポーツ科学コース、健康運動科学コース、スポーツ教育学コース、マネジメントコース)の各々に、専門科目(座学を主とする)を配置している。これら自然科学、人文社系の融合した学びを学生に概観してもらうため、1回生時に「スポーツ健康科学セミナーⅠ」を開講し、学部4年間の学びの体系とキャリア形成のイメージづくりを念頭に置き、すべての教員と上回生がその内容を紹介している。

また、本学部開講の専門科目で理論的に学ぶことと並行して、実習科目(例えば、「パフォーマンス測定評価実習」等)を配置・開講している。本学部においてきわめて特徴的なコーチングの学びの一つは、専門科目のコーチング実習科目としての「スポーツ指導実習」、及びそこでの学びを深めて、より高いレベルのコーチング力量を構築することをねらいとした「アドバンスト・コーチング(実習)プログラム」である(詳細は以下②に記す)。

その他、連携プログラムとして、地域の健康づくり支援やスポーツ振興、小・中学校の課外活動支援などから現場課題を認識し、解決策を提示できる力量の修得を目標とした「サービスマーケティング」、学んだ理論が実践の場でどのように活用できるのかを実感するとともに、国際的な視野を備えたキャリア形成を図ることを目指した「国内・海外インターンシップ」を提供するなど、理論的な学びと現場応用を密接に連動させている(次頁図 20)。

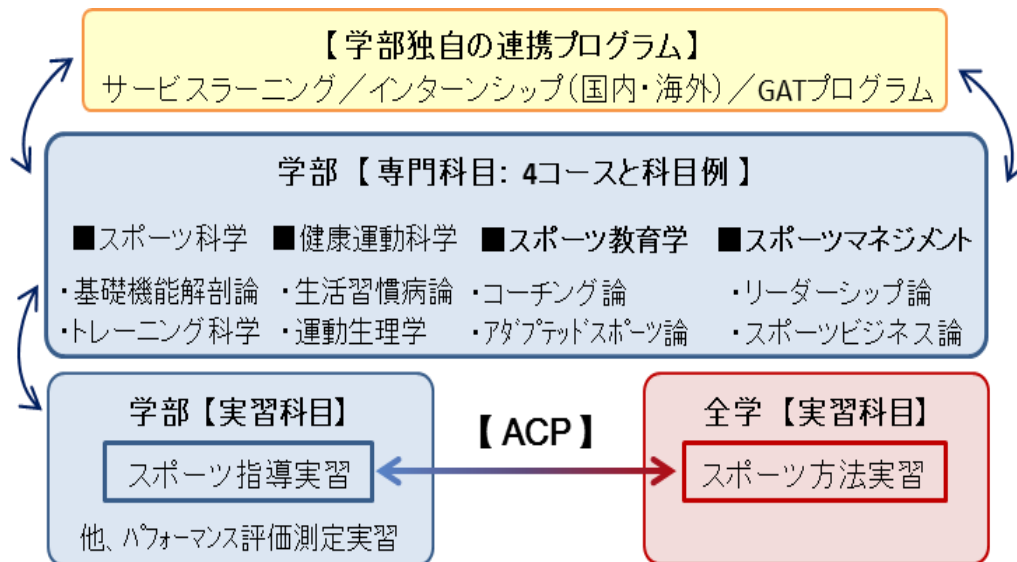


図 20 立命館大学スポーツ健康学部カリキュラム・科目連携概要

②アドバンスト・コーチング(実習)プログラム[Advanced Coaching Program]

ここでは、「アドバンスト・コーチング(実習)プログラム(以下、ACP)」について、その特徴を記すことにする。ACP は、自らのコーチング・指導力量を高めようとする本学部学生を対象とした随意のプログラムとして位置づけられている。ここでは、具体的なスポーツ科目を教材として技能の習得方法、スポーツ技術の分析方法、技能向上のためのトレーニング方法はもちろんのこと、各学習者に合わせた指導方法、あるいは組織的な運営方法などを理解することを目的としている。

ACP の主な内容は、全学共通の教養科目「スポーツ方法実習」における授業内の教員の指導を観察・補助し、実践的に現場における学びを深めるものである。事前研修を通して、授業における自らの課題と目標を設定し、必要なスキルを高めることができる。また、「スポーツ方法実習」は、学部・回生を問わず、合併開講されている唯一の実習科目(BKC キャンパスで年間 69 クラス開講)であり、ACP 実習生がスポーツ指導実践ならびに多様な経験を積む場としても機能している。その他、本プログラムの詳細は、表 20 に示すとおりである。

表 20 ACP の実施内容

項目	概要
1. 位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・コーチング・指導力量の向上に向けた随意のプログラム。 ・単位授与は行わないが、ACP 修了者には修了証を授与。 ・資格取得を目的とするものではないが、関連する免許・資格取得において ACP の活動経験を活かすことが可能。 ・修了生は、本学部のコーチング実習科目「スポーツ指導実習」の ES (educational supporter) に優先的に採用。
2. 実施期間	<ul style="list-style-type: none"> ・前・後期の各セメスター。 ・期間は、事前研修、授業(全 15 回)、報告書提出、報告会前まで。
3. 内容	<ul style="list-style-type: none"> ・教養科目「スポーツ方法実習」における、授業内の教員による指導の観察、(チーム運営等)補助、及び現場における実践的な学びの深化。 ・担当教員との授業打合せ、活動報告書の作成・提出、報告会。
4. 参加資格	<ul style="list-style-type: none"> ・本学部専門科目・コーチング実習科目区分「スポーツ指導実習」を 2 科目以上受講済みであること、かつ 2 科目以上で A 以上の成績評価を取得している、2 回生以上の本学部生。
5. その他	<ul style="list-style-type: none"> ・授業担当教員の主な役割は、プログラム参加者の実習指導、ACP の事前研修・報告会への参加。 ・参加者募集・選考は、本学部において行う。 ・修了生には、更なるコーチングスキル向上のための図書購入の補助として図書カードを贈呈。優秀な活動が認められた者は、報告会で表彰。 ・2012 年度に ACP を開設。2013 年度実績は、5 クラス(前期 2 名 2 クラス; 後期 3 名 3 クラス)。

iii)課題

ACP に関わるアンケート調査の結果を踏まえると、ACP 実習生が、座学で学んだことを実践・体感する経験として効果が大きいだけでなく(表 21)、「スポーツ方法実習」を受講する学生にとっても実習生から指導補助を受けることの意義は大きいことがうかがえる(2014 年度調査:授業の発展や受講生の学びへの貢献に関する質問項目について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の回答受講生は 95%)。また、担当教員にとっても、自らの教育実践を見つめ直す機会となっている。学部における人材育成目標の実現とともに、新たな学び合いの創出、全学の学びへの貢献、ひいては FD 活動の一環として捉えることができるなど、一定の効果を認めている。

今後の課題としては、実習期間中に、他の実習生のクラスを見学する機会の設定のほか、学生への周知・参加率の増加が挙げられる。

表 21 ACP 実習生の声(実習生報告書より一部抜粋)

“…高校の体育教師になる上で、今この時期に自分の問題や課題、力のなさを正直に認めることができたのは本当に ACP による経験が大きい。”

“授業を通して、クラス全体が技術レベルもあがり、個人個人が積極的に授業に参加していく姿を 15 回通して見ること、…方法実習という全学の開講科目に参加することができて、スポーツ健康科学部以外の学生を指導するという経験ができ、自分の大きな経験になりました。今後は、まずは理論という面での指導の在り方や、指導の方法、各競技の理解をしていきたいと思います。また、自分のスキルアップもしていきたいと考えています。”

(3) ICCEによる我が国の体育系大学インタビュー調査

スポーツ・コーチングに関する国際組織である国際コーチングエクセレンス評議会(ICCE: International Council for Coaching Excellence)¹代表者2名が、日本スポーツ振興センターの招聘により平成26年10月26日～31日に来日し、我が国の体育系大学2校(筑波大学、鹿屋体育大学)のコーチングに関する内容を調査し、ICCEが発行する『スポーツ・コーチングに関する国際枠組み International Sport Coaching Framework: ISCF』²に示されている内容と比較して大学におけるコーチ教育に関する提案を行っている。

モデルとなるカリキュラムの基盤となるのは、ISCFに示されているコーチにとって重要な主な職務と知識である。

カリキュラムの大項目としては、ISCFに示された知識に基づき3つの項目があり、

1. 価値観、哲学
2. コーチング実践: コーチの職務とコンピテンシー評価
3. 専門知識、対人知識、自己理解知識

となっている。

そして、その内容を修得するために、経験学習とコンピテンスに基づくアプローチとともに用いること、知識をコーチングの実践に応用することを強調することが提案されており、多くの優秀なコーチを育成することにつながる、とされている。

また、ヨーロッパにおけるコーチング評議会(AEHESIS)では、コーチ資格の認定に関するガイドラインを作成しており、多くの項目は、日本のモデル・カリキュラム作成の上で参考となる、と述べられている。

ガイドラインによると、「コーチング」は「特定のスポーツの能力向上、プレーヤーの育成段階を支援するプロセス」と定義され、コーチ育成プログラムは「ある特定のレベルで、一つあるいはいくつかの競技でコーチする技術と関係性を学生に備える」べきであるとされている。また、コーチを志す学生は競技を絞り、日本体育協会や各競技団体の定めるコーチ資格基準を充能力を身につけることが推奨されている。

ISCFでは、コーチの役割を4つに分類しており、学生がいくつの競技に特化して学ぶことができるかにより付与される役割が変化する、としている。学生が、ひとつの競技に特化して学ぶプログラムであれば、上位の役割を学ぶことができ、複数の競技にまたがる場合には下位の役割を担うこととなる。

日本の体育系大学のカリキュラムは、実習の重要性、学生が特定の競技に関する学びを支えるプログラムの必要性、高等教育機関の資格とスポーツ団体のコーチ育成モデルとのつながり、と密接に関係することになる。

¹スポーツ・コーチングを世界中で通用する職業として普及・発展させ、スポーツの全レベルにおけるコーチングの質を高めていくことを目指す非営利の国際組織。「スポーツ・コーチングに関する国際枠組」など、国際基準の策定も行っている。

以上の内容を踏まえ、ICCE 役員 2 名がカリキュラムの大項目それぞれについて次のとおり考察及び提案をした。

・価値観、哲学

この項目の目的は、学生がコーチングの原則を理解し、個人としてのコーチング哲学を育み始めることである。価値観や哲学は、効果的なコーチングを行う上で欠かせないものであり、学生は自身のコーチングの価値観を明確にし、哲学を明示することが求められる。

そのためにもこの内容に重点を置いた科目を設置することが求められる。

含まれる内容例

哲学	自身のコーチング哲学(なぜコーチを務めるのか、価値観、価値観をどのようにしてコーチングにて影響を及ぼすのか)
コーチング・インテグリティ	プレーヤーズファーストと、所属する組織の基準・規範の理解、対応
暴力、ハラスメント	スポーツ界の暴力やハラスメントなどに対する対応
リスクマネジメント	環境の安全性評価、緊急事態における適切な行動

・コーチング実践:コーチの職務とコンピテンシー評価

学生が、学んだ知識を応用し実践スキルを獲得するために必要となり、そういった実践を「応用コーチング」に関する科目を設置するべきである。

この項目は、コーチング活動を行う上での基本となるもので、学生が学んだ知識・技能を応用し、コーチングの実践スキルを向上することができるものである。また、併せて学生のコーチング能力を評価し、フィードバックする機会を提供することとなる。

そのため、学生がスポーツ科学や他の科目から実践コーチングに関する知識を応用することができるようになるため、実際にコーチング現場に赴き、プレーヤーやチームの目標設定、評価や指導を行うことができる「応用コーチング」科目を大学 2 年次または 3 年次に設置し、現場でコーチングが行える資質能力を養うことが提案されている。

・専門知識、対人知識、自己理解知識

コーチの資質能力を裏付けるのは、様々な知識・技能の洗練された体系である。この知識・技能について、専門的なスポーツ科学は、既存の日本の体育系大学のカリキュラムにてカバーされており、学生に重要なコーチングの基礎を提供している。一方、対人知識、自己理解知識の領域については不十分とも思われ、既存の科目を見直すことが求められる。

最後に ICCE はモデル・カリキュラム作成に関し4つの提案をし、報告を締めくくっている。

1: 哲学、コーチング・インテグリティ、暴力・ハラスメント、リスクマネジメントを取り扱う「コーチングの価値観、哲学に関する科目」では、体育・スポーツ系学部の2年次または3年次の必修科目として盛り込むべきである

2: 応用コーチング科目は、体育・スポーツ系学部の2年次あるいは3年次の必修科目として盛り

込むべきである

3:現場実習やコーチング実習は、大学3年次あるいは4年次の必修科目とすべきであり、また4年次に追加の実践コーチングの機会を選択科目として設置することも提案する。

4:大学は、既存の提供科目を概観し、コーチング知識の対人知識、自己理解知識の領域を含んでいるかを確認するべきである。

(4)まとめと課題

我が国のほとんどの体育系大学においてコーチ育成コースが設置され、優れたコーチを育成するという教育プログラムが設定されている。コーチング関係科目についてもほとんどの体育系大学で設定されており、コーチが学ぶべき内容や身につけなければならない能力は多岐にわたっていることが明らかになった。

これらの体育系大学においてはいわゆる「優れたコーチ」を育成するというコンセプトや教育プログラムが存在しているものの、各大学の特色や特徴を生かした内容となっており、「優れたコーチ」を育成するためには何を学ぶべきかに関する統一的な考えには至っていないことが理解できた。

今後は、グッドコーチに求められる基本的資質能力や海外におけるコーチ教育、コーチング現場の事例と各体育系大学のコーチ育成に関する具体的な教育内容を照らし合わせながら、コア・カリキュラムを探っていく必要があるだろう。

4)諸外国におけるコーチ教育、コーチング現場の事例研究(ICCE 等)

ワーキンググループにおける作業「諸外国におけるコーチ教育、コーチング現場の事例研究(国際コーチングエクセレンス評議会(ICCE)等)」については、(独)日本スポーツ振興センターが実施した「コーチング・イノベーション推進事業 グローバルに活躍するコーチ育成の在り方に関する情報収集・分析及び検証」を参照し、モデル・コア・カリキュラム作成に参考となる内容を補完することとした。

平成 26 年度に(独)日本スポーツ振興センターが行った主な内容は、

- ①コーチング、コーチ育成に関する国際動向の把握
- ②国内の大学におけるコーチ育成に関する分析
- ③コーチングおよびコーチ育成システムの評価に関する検討

の 3 点である。②については、前項に掲出済み、③については今回のモデル・コア・カリキュラム作成事業と直接の関連はないため、①コーチング、コーチ育成に関する国際動向の把握について記載したい。

①コーチング、コーチ育成に関する国際動向の把握では、主にグローバル・コーチ・ハウスへの参加、海外大学のコーチ育成カリキュラムの訪問調査の 2 つの内容を行っており、それぞれの内容は以下のとおりとなるが、併せて ICCE が作成したスポーツ・コーチングに関する国際枠組み(ISCF)についてもその概要を紹介したい。

(1)グローバル・コーチ・ハウスについて

平成 26 年 7 月 26 日から 8 月 2 日まで、スコットランドのグラスゴーにて、ICCE 主催のグローバル・コーチ・ハウス(GCH)が開催され、日本スポーツ振興センター代表者が出席し情報収集を行っている。開催期間中、20 か国以上 400 名以上のコーチやコーチ養成関係者、コーチングの専門家が集まり、講義やパネルディスカッション、ワークショップが行われ、一方向の講義形式だけでなく、参加者同士の情報交換、意見交換の場も多く設けられた。

日本スポーツ振興センターがまとめた内容は以下のとおり。

全体を通じた議論の主な焦点・提言は以下のとおり

- ① コーチのキャリア形成
- ② 持続可能なコーチング
- ③ コーチ養成の一つのモデル:コーチング過程による専門領域の統合、複数の専門領域の獲得、創造的思考
- ④ コーチング分野で発展させるべき領域の開発:障害者スポーツコーチ、女性コーチ、コーチ育成者
- ⑤ プレーヤーの成長に合わせたコーチング
- ⑥ コーチのパーソナリティ

上述のようにコーチングを取り巻く課題は多岐にわたっているといえる。日本スポーツ振興センターのまとめでは、課題の中から①、②、③及び④について詳細に述べられている。

①コーチ養成の考え方:コーチの成長段階

- コーチングは、その国の政策、制度、文化、指導対象とする競技やプレーヤーの現況、環境、強化戦略等、個別の様々な背景(コンテキスト)に大きな影響を受けるため、国としてのコーチ育成の方向性、重視すべき領域、今後の展開等についても十分に検討する必要がある。グローバルに活躍できるコーチの育成をさらに推進していくためには、日本のコーチ育成システム等で何が優れていて、何が足りないのかを国際的な視点からも分析・評価し、現行の日本のコーチ育成システムの強みを活かし、弱みを補う取り組みが重要になる。
- コーチにもプレーヤーと同様に、コーチ個人の連続的な成長段階(パスウェイ)がある。ICCE が策定した ISCF は、個々のコーチが今どの段階に位置し、どのような資質能力を備え、また次の段階にキャリアアップするためには「どのような能力」を「どの程度」高める必要があるのかを明確に示すものである。このような明確な基準なしに、コーチのキャリア形成やそれに伴う資格付与を語ることは困難である。国や国際競技団体は、コーチ育成段階の中で、どの段階でどの資質能力(コンピテンス)がどの程度身につけられているか、といった資質能力の詳細な項目や水準を明確に示さなければならない。組織連携も含めて、包括的かつ一体的なコーチ育成パスウェイの設定が求められる。
- コーチの適性の中には、一方向型の座学や詰め込み教育では身に付かないものがある。グローバル・コーチ・ハウスの各セッションの形式は、一方向型の講義形式だけでなく、参加者同士やファシリテーターと参加者間の双方向のやり取りがあるワークショップも数多く行われた。コーチ養成においては、オンザジョブ・トレーニングやコーチ同士の学び合い(先輩によるメンタリング、同輩によるピアメンタリング)が重要となる。また、コーチがキャリアを積み重ねるほど「他人から教わる」だけでは不十分で、自ら振り返る営みが必要となる。日本におけるコーチ育成のセッションでは、講義形式が多く、参加者がディスカッションする場は少ないと言える。コーチングを学ぶ者同士がお互いに刺激し合う場の設定が重要である。

②③コーチングの持続可能性への対応:変化、自己成長、創造性

- 昨今の科学技術・情報技術の進歩に伴い、社会全体が変化に富んでいる。社会全般と同じく、スポーツ界においても、体制や制度、仕組み、手法等、スポーツを取り巻く環境は変化が続いている。このような状況において、「コーチングの持続可能性」を考えると、コーチ自身の成長の歩みを止めさせない教育や学習といった自己研鑽のマインドの醸成、コーチを支えるスタッフや組織の連携等を積み重ねていく必要がある。
- 多くの国で長期的視点でのプレーヤー育成計画(Long Term Athlete Development)の概念が浸透している。これは、プレーヤーの発達段階に応じ、適切なトレーニングや競技会の機会を与えることが必要であるという考え方である。コーチは、自身の所属する競技団体やクラブの長期的視点でのプレーヤー育成を理解し、自分の日々の仕事がいかにどのように結びつくのかを常に意識しなければならない。プレーヤー育成とは身体、心理、戦略、戦術のそれぞれの面をバランスよく鍛えていく仕事である。コーチは、日々のトレーニングの1つ1つのパーツが、この4つの側面のうちの「何を、どれだけ」伸ばすことを意図しているのかを明確に説明できなければならない。

- ・ コーチは自らの「勘」や「推量」に依存することなく、常に正しい問いを立て、それを科学的に確認することが必要となる(エビデンス・ベースのコーチング)。コーチングとは、主に5つの柱(パフォーマンス、練習、観察、計画、評価分析)から成り立っている。コーチがこれらの適性を高めるほど、医・科学サポートや組織マネジメントといった「コーチング以外の学問領域」についても横断的に理解を深めることができる(複合領域的アプローチ)。この過程を繰り返すことで、コーチは自らの「仕事」をより包括的に、より創造的に理解できるようになる。

④コーチング分野で発展させるべき領域の開発:障害者スポーツコーチ、女性コーチ、コーチ育成者

- ・ 障害者スポーツのコーチや女性コーチという領域は、国際的に見ても開発途上・発展途上にある。いくら優秀な障害者スポーツのプレーヤーを発掘しても、優秀なコーチがいなければ、そのプレーヤーを十分育成することができないと言える。男性コーチに比べて、女性コーチは非常に少なく、コーチング分野で「適材適所」がなされ、アスリート育成も含めた効果的な人材育成が達成できているとは言えない。社会全体の背景を考慮しつつ、またデータに基づく各種コーチの育成段階を確立する必要がある。
- ・ 多くの国や競技団体において、障害者スポーツと健常者スポーツの統合が進んでいる。これからのコーチには、障害の有無を問わず1人のプレーヤーのパフォーマンス向上をきちんと担える専門性が求められる。障害者スポーツプレーヤーのタレント発掘を進めても、コーチの的確な育成や配置を含めた、その競技の育成環境の整備が伴わなければ、障害者スポーツの強化や振興にはつながらない。
- ・ 現在の職業コーチの男女比率を比べると、ロンドンオリンピックにみる女性のコーチは圧倒的に少ない。これは、「24時間365日の献身」をコーチという仕事に求めるスポーツ文化にも由来している。しかし、ICCEの研究によると、多くのオリンピックメダリストを輩出しているコーチの多くが、ライフワークバランスを適切に保っていることが分かっている。女性のトップチームのコーチが結婚や出産、育児といったライフイベントを経験しつつもキャリアアップできるような環境とは、男性コーチにとってもメリットがあることを国や競技団体はもっと鼓吹すべきである。
- ・ コーチ養成の仕組みを考えるにあたり、今後どのようなコーチング領域のコーチが必要になるかを、国レベルまたは競技単位で見極めなければならない。そして、そのようなコーチ層を育てることができる存在、すなわちコーチ育成者(コーチ・ディベロッパー)を戦略的に養成することも考えなければならない。ICCEがコーチ・ディベロッパーに関する国際枠組み(ICDF: International Coach Development Framework)において考える上級のコーチ・ディベロッパーとは、国レベル、競技レベルでのコーチングニーズを見極め、そのための育成戦略を立てることができる人物や組織のことである

(2)海外大学のコーチ育成カリキュラムについて

日本スポーツ振興センターでは、諸外国におけるコーチ教育の事例研究として体育教員養成プログラム(ユヴァスキュラ大学)、スポーツコーチング学位プログラム(ハーガヘリア応用科学大学、リーズ・ベケット大学)についてインタビュー調査を実施し、以下のとおりまとめている。

今回訪問した 3 つの大学では、コーチングの実践を念頭に置いた教育プログラムが展開されており、先進的な事例も見られたが、多くの国のコーチ育成・コーチ養成機関では、依然として伝統的、古典的な方法(学生にとって受動的な環境、教員中心的なアプローチ、あらかじめ決められた学習内容等)でプログラムが実施されているとのことであった。このことから、コーチ育成やそのプログラム開発は変革の時期にあると言えると思われる。

今回の訪問にて得た知見等の概要は以下のとおりとなっている。

労働環境、労働スタイルの変化

以前と比べて、スポーツを取り巻く環境やスポーツ自体が変化しており、スポーツ界における労働環境は、単に指示に従うだけでなく、独立した創造的な活動も求められるような変化を遂げている。また、複雑な課題に直面する場合もあり、労働環境は常に一樣な状況とは言えない。そのため、スポーツ界に従事する者もスタイルの変化が求められている。コーチも同様に、変化する環境に適応しなければならないと思われる。コーチングに関する基礎的な知識・技能とともに、創造的思考、ネットワーク構築、課題解決、協力・協同・協働、グループワーク等のスキルが求められている。

コーチ育成においても、コーチングに関する専門知識を有するだけでなく、得た知識を様々な状況に応じて活用することができる資質能力を備えた人材を育成するような取り組みが求められると言える。また、コーチとして実際に活動するには、スポーツ科学を学ぶだけでは十分ではない。科学的な根拠に基づく実践であっても、どの根拠に基づいているのかによって、コーチングに関する実践力は異なってくる。多くの根拠、最新の根拠を理解した「世界を見る」視点を増やすことが重要である。

実践できる資質能力にもとづいたコーチ育成

コーチが自身の活動の中で特定の課題を遂行するために身につけなければならないコーチング・コンピテンス(コーチング行動(Coaching behavior)、コーチング実践(Coaching practice))は、教室での学びだけでは身につかない。コーチは、活動に関わる専門知識を有していなければならないが、その知識を用いるための技能を備え、自身のコーチングに効果的に応用するとともに、様々な状況に柔軟に対応することができるべきではない。科学技術が進歩し、コーチングに関する様々な調査研究が行われる中、知識を獲得することは容易になったものの、どのように知識を活用するか、自身のコーチングに知識を適確に用いることができるかが鍵となる。

自身のコーチング現場(プレイヤーの年齢や参加・競技レベル、性別、文化、環境、施設等)によってコーチが備えるべき資質能力は異なる。コーチングを行う上で、誰に、何の目的で、どのようなコーチングを行うのか、が明確でなければならない。

コーチ育成のプロセス

コーチを育成するプロセスには、①既存のカリキュラムで定められた専門能力開発の目的とコーチとしての成長のためのニーズとが適合しているか、コーチ教育を提供する側と受ける側とで協議し、合意する、②個人の成長の基盤としての実生活のプロセスやプロジェクトを基盤とした学習方法を採用したコーチ育成方法について、コーチ教育を提供する側と受ける側とで協議し、合意する、

③成果(育成アウトカム、活動の効率)を評価する、といった内容が含まれる。

実践的な学習方法

日本のコーチ育成のカリキュラムにおける対人知識、自己理解知識は、実習でトレーニングが行われている。実習では、多くの学習モデル(課題基盤型学習、プロジェクト基盤型学習、探求型学習等)が混合して用いられている。実際のコーチングに関わる活動では、コーチング実習に関する計画、実行、振り返り、評価、今後の戦略等をグループで行い、その内容をプレゼンテーションした後に、講師とのディスカッションで内容をさらに深めるといった方法がとられていた。また、コーチング以外の活動においても、現状把握、仮設定、解決策の検討、実施、分析や振り返り、といった研究手法をベースとした活動も行われている。体育教員養成プログラムにおいても、理論と実践を統合した手法が採用されている例もある。そのためには、コーチ教育を担当する教員は、学生の学習を促すファシリテーターとしての役割を担うことが求められる。

学生にとって受動的な環境(教員中心のアプローチ、自己中心の組織体制、あらかじめ決められた学習内容等で授業等)では、より良い学習にはならないことが明らかとなっており、学生が自主的、積極的な参加となるよう、グループでの学習、知識の共同創出、プロジェクトベースの活動、労働生活との共生、包括的な専門コンピテンス、状況や課題を発展させるような取組が行われている。

コーチの評価

コーチングの質は、定期的な評価と包括的な評価によって支えられるため、コーチング能力やコーチ育成の評価は重要なものとなる。

フィンランドアイスホッケー連盟では、コーチ教育システムの効果を測定するため、「学習の評価」「実践の評価」「結果・効果の評価」の三段階の評価を行っている。「学習の評価」では、コーチとして何を学んだのか、どのようなノウハウを有しているかについて評価する。「実践の評価」では、コーチング行動にどのような変化が起こったか、コーチングの質を評価する。「結果・効果の評価」では、コーチングの質が高まることで何を達成できたか、プレイヤーの成長について評価している。

また、専門知識に関するコンピテンス、対人知識や自己理解知識を活用するスキルを評価するため、メンターコーチからのフィードバックに加え、自己評価、ピアコーチからの評価、選手からの評価、プレイヤーの親からの評価(主観的評価)が含まれる。

(3)スポーツ・コーチングに関する国際枠組み(International Sport Coaching Framework: ISCF)

ICCE では国際的なスポーツ・コーチングに関する参考基準として「スポーツ・コーチングに関する国際枠組み(ISCF)」を策定しており、コーチングを行う上で必要となる知識やコーチが担うべき職務などについて整理しているので、その内容についても触れておきたい。

・コーチの職務

ISCF では、コーチには以下の6つの職務があると定義している。経験の豊かなコーチは、経験の浅いコーチより多くの職務を行うことになるが、経験に関係なく、これらの機能を果たせるよう努力すべきである、としている。

- ビジョンや戦略の設定…全体像の理解、戦略立案など
- 環境の形成…行動計画の策定、組織編成、人的資源確保など
- 関係構築…先導、マネジメント、関係構築など
- 練習の先導と大会に向けた準備…練習のガイド、適切な大会の特定と経営など
- 現場の理解と対処…観察、意思決定、記録など
- 学習と評価…評価、内省、モニタリング、革新など

・コーチの役割の段階

上記の職務を適切に達成するためコーチを4つの段階に分類し、各役割に応じた知識とコンピテンスを明確にしている。

- コーチング・アシスタント (Coaching Assistant)
- コーチ (Coach)
- 上級／シニアコーチ (Advanced/Senior Coach)
- マスター／ヘッドコーチ (Master/Head Coach)

・コーチに必要な知識とコンピテンス

コーチがプレイヤーのニーズに応え、成長させるためには、コーチは広い分野における知識とコンピテンスを身に付けなければならないとし、経験／教育／他のコーチ達とのネットワーキングを通して自身の知識を養っていくことで達成されるものとしている。

また、ISCF ではコーチングを「専門的なコーチングの環境において、プレイヤーのコンピテンスや自信、対人関係、個性を伸ばすために、専門知識、対人知識、自己理解知識を組み合わせながら、継続的に活用すること」と定義付けている。

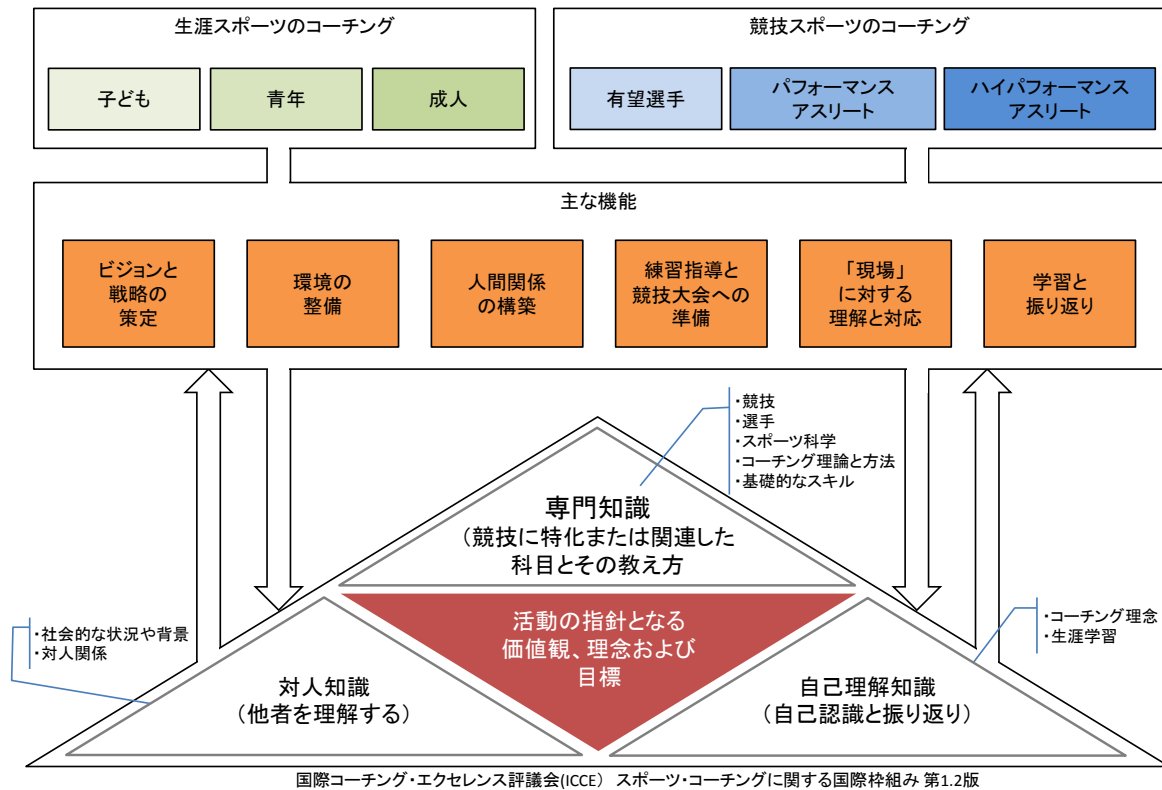
専門知識: プレーする競技に関する内容、スポーツ科学やコーチング理論などの知識

対人知識: 社会的な状況や背景、対人関係に関する他者を理解するための知識

自己理解知識: コーチングの理念や生涯学び続けるための知識

さらに、ISCF ではこれらの知識をコーチの6つの職務を果たすための基礎となるもの、とし知識を実践で活用することが重要であると述べている。

コーチングにおける職務関連のコンピテンスとその土台となるコーチングの知識



(4)まとめ

以上が、諸外国におけるコーチ教育、コーチング現場の事例研究の内容となるが、本モデル・コア・カリキュラム作成事業における重要な視点を以下に整理したい。

- ・日本のコーチ育成にも独自の強みや弱みがありそれが何であるかを検証し、コーチ育成をする必要がある。
- ・コーチにも成長過程があり、コーチとして成長するには学び続け、自らを振り返りが必要になる。また、コーチ育成を行う場合、いつ、どのような能力をどの程度高めるかを明確にする必要がある。
- ・日本のコーチ養成の形式は講義形式が多く、参加型のものは少ないので参加者同士が主体的に学び刺激しあう場が重要である。
- ・長期的視点に基づくプレーヤーの育成が重要である。
- ・コーチは自らが行うトレーニングを、競技力の要素の何をどれだけ伸ばすのかを説明できる必要がある。
- ・エビデンス・ベースのコーチングが重要で、これが身に付けば横断的な理解が容易になる。
- ・障害者スポーツや女性コーチは各国で途上といえる。そこに強みを持ったコーチも必要になる。
- ・コーチを育成する役割を担うコーチ育成者の整備も重要である。
- ・多くの国では伝統的・古典的な方法によるコーチ育成が多いのが現状だが、変革の時期にある。
- ・労働環境が変化しており、スポーツ界の人間も変化が求められていて、適応する必要がある。

- ・知識だけでなく、それを様々な状況により活用・実践する柔軟性、多面性を磨くことが重要である。
- ・コーチの成長のため、コーチング能力を定期的に第三者が評価する仕組みも重要である。

3.成果

1)具体的検討事項のまとめ

(1)グッドプレーヤー像、グッドコーチ像の検証

グッドコーチに求められる資質能力を導き出すために立てた仮説の検証として、アンケート調査とヒアリング調査を実施した。今回の調査では、「コーチは、プレーヤーがいないところでは成立しない」ことから、まずはグッドプレーヤー像について検討し、その後、グッドプレーヤーを育成する担い手としてのグッドコーチ像を明確にすることとした。

【アンケート調査まとめ】

アンケート調査においては、コーチ向け調査とプレーヤー向け調査を実施し、それぞれ、約600名から回答を得ることができた。

コーチ対象アンケート調査のまとめとしては、今回の調査対象となったコーチからは、重要と感じていることとして、「試合の勝ち負けや競技能力より、人間的な成長を望んでいる。」ことがわかった。また、習熟度(身につけている)については、重要と考える要素は概ね習熟している(身につけている)の認識しているものの、「コミュニケーション能力、競技能力、パフォーマンス向上のための知識やスキルは必ずしも十分ではない」と認識しているようである。

指導活動においては、全力を尽くし、生涯にわたってスポーツを楽しむ姿勢を養うことを重要視しており、勝利や体力・競技力を高めることは低い傾向にあった。

コーチングにおいて認識している課題については、プレーヤー個々人どのようにコミュニケーションを図るかについての回答が多く、必要なスキルとしてもポイントが高い。さらに暴力根絶の一助になるという意識も高い。

コーチング場面において必要と感じている知識・スキルとしては、「コミュニケーションスキル」「指導対象者に応じた指導法」であり、今後習得したい知識・情報については、「スポーツ科学・専門知識」「最新の指導・練習法」となった。

プレーヤー対象アンケート調査のまとめとしては、現役プレーヤーが描くグッドプレーヤーとは、競技成績やパフォーマンスもさることながら、むしろ、社会性や人間性に関する資質能力について重要視していることがわかった。しかし、重要度が高いと認識していることであっても習得はできていない事実もうかがえた。つまり、毎日のようにスポーツに関わりながらも、自ら考えるグッドプレーヤーとしての資質能力が十分に身につけていないと読み取ることができた。

また、率先して模範的な行動を取る、目標に向かって努力する、感情をコントロールするなど、対自分に関する資質能力に自信のなさがうかがえる。

プレーヤーから見たグッドコーチについては、まず指導理念や指導哲学にあたる、モラルや人間性、プレーヤーの能力を向上させるためのスキル、スポーツの知識や技能といった順で重要度が高い。

一方、自分の競技成績が最も高かったときのコーチについて、習熟度をたずねたところ、栄養、外傷・障害、心理、法律、発育発達などのスポーツ科学に関する実践力が低いと感じていることがわかった。コーチとして学んできた知識や技能をいかに適切にプレーヤーに還元できるかが大きな課題といえるかもしれない。

【ヒアリング調査まとめ】

また、ヒアリング調査は、現役プレーヤーと現役コーチのそれぞれ6名ずつに協力を得て、グッドプレーヤー像、グッドコーチ像について意見交換しながら導き出す形式と、現役コーチ1名に対して複数名のワーキングメンバーが深く掘り下げてインタビューする形式の2通りの方法で実施した。

これら2通りのヒアリングを通じて、仮説設定したグッドプレーヤー像、グッドコーチ像と比較しながら、導き出されたキーセンテンス(キーワード)としてまとめることができた。

グッドプレーヤーの人物像を表すキーセンテンス(キーワード)

		人物像を表すキーセンテンス(キーワード)
①心構え (スポーツ精神、哲学)		人間的成長を考えられる。スポーツ(その競技)が好きで愉しんでいる。スポーツの良さ(意義や価値)を表現できる
②人間力	対自己	目標が明確。自己肯定感(有能感)が高い。明朗活発(笑顔)。直向き(一途、素直)、真面目(本気)。向上心がある。貪欲。好奇心がある。常に進化している。 客観的に自己観察できる。セルフコントロールできる。負けず嫌い。あきらめない(くじけない)。心が折れない。芯が強い。努力家(どろくさい、練習量が多い)。パフォーマンスが安定している(実力を発揮できる)。
	対他者 (人、社会)	社会性。リーダーシップ。メッセージを発信できる(アピールできる)。周囲を巻き込む(良い影響を与えられる)。人のせいにならない。 謙虚。おごらない。人望がある(尊敬される、慕われる)。応援してもらえる。裏方の仕事もできる。他人のミスをカバーできる。

グッドコーチの人物像を表すキーセンテンス(キーワード)

		人物像を表すキーセンテンス(キーワード)
①心構え (スポーツ精神、哲学)		プレーヤーを本気にさせる情熱(ハート・マインド)を持っている。プレーヤーの夢や目標を理解し、真剣に向き合う。スポーツの魅力を伝え、愉しませ、好きになるように導く。コーチとしてのあるべき姿を常に考え続けている。自身のコーチングモデル(スタイル)を常に進化させ続ける。スポーツ活動を通じて生き方(人生)について考えさせる、学ばせる。
②人間力	対自己	プレーヤー(チーム)の目標、トレーニングの目的などを明確化する。プレーヤーとコーチは対等であり、サポーターであるという意識をもつ(環境を整えて、情報を与えて、選択肢を示す)。問いかげや質問を重視し、プレーヤー自身の意見や判断を引き出す。プレーヤーを常に観察し、段階的なステップアップに導く。スポーツ活動内のことを外に持ち出さない(引きずらない)。最新のコーチング(トレーニング)理論や方法論を理解する。 プレーヤー(チーム)の現在と将来を見据えてコーチングする。パフォーマンスを冷静に評価しつつ、決めつけ(レッテル)はしない。競技の厳しさを伝えつつ、その先にあるゴールを伝えて動機づける。プレーヤーの年代や特性に応じて適切な方法(トレーニング、コーチング)を用いる。プレーヤーを取り巻く環境(社会)に適切に対応する。
	対他者 (人、社会)	ひとりの人間(大人)としてプレーヤーに向き合い、自身の行動に責任を持たせる。プレーヤーの主體的な判断の前提となる良否や善悪の判断基準を示す。礼儀や挨拶など日常生活の基本を徹底させる。 コーチとプレーヤーが対等の立場でリスペクトし合い、互いの想いや意見を述べ合う。プレーヤーあつてのコーチという意識をもつ。相互理解・相互尊敬がスポーツ(競技)を成立させていることについて理解させる。

いずれの調査においても、予め立てた仮説と概ね同様のキーワードを得ることができたと同時に、仮説では抽出されなかったキーセンテンス(キーワード)も導き出され、グッドコーチの資質能力に関する情報を得ることができ有意義なものとなった。特に、ヒアリング調査において得られたキーセンテンス(キーワード)は、現役プレーヤーと現役コーチからの発言であり、取りまとめにあたり貴重な情報となった。

(2)コーチング現場の課題の検証

コーチング現場の課題を調査し、コーチ育成に必要となるカリキュラムを探ることを目的として、ナショナルコーチ、スポーツ少年団・総合型地域スポーツクラブ、学校運動部活動(中・高・大)、障害者スポーツの活動現場を訪問し、延べ9名のコーチにインタビューを行った。なお、この際、仮説設定したグッドコーチ像を念頭においた質問項目を用意した。

コーチング現場におけるインタビューにより、浮かび上がった課題を整理し、カリキュラム作成にあたっての参考とすることとした。

コーチングの現状

【共通してみえること】

いずれのコーチについても、プレーヤーズ・ファーストの視点を基本とし、プレーヤーの自立を促し、自ら考えさせるよう指導するとともに、個々のプレーヤーに即した指導計画を準備するなどに努めていることがうかがわれた。このようなコーチングの背景には、コーチ自身の専門性(知識、技能、経験など)に裏付けられていることは重要なことである。専門的知識や理論、最新情報などをコーチングの根拠として、それぞれの環境やプレーヤーに応じて活用できるのがグッドコーチの強みである。

また、これらのコーチングを活かすことができるのも、スポーツ活動以外の日常場面においても積極的にプレーヤーとコミュニケーションの充実を図っていることを忘れてはいけない。

【現場・コーチの多様性がみえること】

スポーツ・競技の楽しさの伝達や体感のさせ方については、それぞれのコーチング現場(分野)の指導対象者の志向や価値観が異なるため、それぞれの工夫によるコーチングが行われている。

【今のコーチングに至るまでの経験や学び】

いずれのコーチも現状のコーチングに至るまでには、それぞれ試行錯誤を繰り返し、悩みを抱えながらも、学び続けている姿勢がうかがえた。また、共通して聞かれた声として、従来の日本のスポーツが厳しさや鍛錬を主軸においていたことを挙げている。今回のインタビュー対象としたコーチたちにおいても自身が受けてきた指導のあり方をコーチングの原点としつつ、あえて困難な状況を科すような指導で得られる効果を、今の時代にどのように活かしていくかについて苦心していることがわかった。さらに、コーチ自身の「一見失敗に見えるような経験や想定外の経験」も自己の行動を振り返り、自ら反省しつつ、目の前のプレーヤーへのコーチングに活かすなど、学びに対して貪欲に取り組んでいる。このような思考や行動を支えているものが、学ぶ機会への参加である。特に、他競技他分野のコーチとの交流など、常に最新情報を得る機会を自ら得ていることが特徴である。

【現場で抱えている課題】

それぞれのコーチが現場で抱えている課題は多種多様であるが、中でも拠点となる施設・環境の確保、活動経費の調達については苦勞されているようである。これらの解決の糸口となるのが、自身のコーチング活動領域に関わる人や組織だけではなく、他領域の人や組織との信頼関係の構築である。コーチ自身とプレーヤーを取り巻く関係者内での理念の共有はもちろんのこと、その共有の範囲が広がることにより、活動は円滑に進められる。

一方で、コーチ自身の資質能力についての言及が多くあった。それは、スポーツ指導における専門性(スポーツ知識・技能)と人間的魅力(人間力)の両面の充実が求められていることに起因する。

インタビュー対象となったコーチたちが、それぞれに思い描くグッドコーチとして、指導理念や哲学の大切さ、世界基準の視点、スポーツの本質を伝えるなどのキーワードは重要な指摘といえる。

そのためにも、コーチの資質能力を高めるための「学ぶ機会の充実」が求められており、その学びの場では、スポーツ科学の知識・技能を実際のコーチングに活かせるような実践型あるいは体験型の学びも期待される。さらには、同じ競技やスポーツという枠を超え、異業種・領域の理解も有効との意見やコーチの活動や成長を支援する体制整備も求められている。

(3)体育系大学・学部における教育内容の確認

体育系大学・学部における教育内容の確認として、体育系大学学長・学部長会に加盟する26大学の協力を得て、各大学のカリキュラム(シラバス)、学校案内などの資料を収集し、コーチ育成コースの概要、コンセプト、設置科目とその内容を確認し、共通点・課題などの整理・分析を行った。

26大学のすべての大学で保健体育教員免許の取得が可能で、そのうち、コーチまたはコーチングというコース名を付した大学は18大学あった。また、26大学のうち、各学科・コースの目標として目指すコーチ像が示されていたのは17大学、コーチまたはコーチングというコース名を付した18大学のうち、目指すコーチ像が示されていたのは14大学であった。目指すべきコーチ像を示している大学の各学科・コースの目標としては、競技スポーツを対象としたコーチ(2大学)、生涯スポーツから競技スポーツまで体育・スポーツ分野などの対象に応じて柔軟に対応できるコーチ(3大学)、有能、質の高い、優れた、高度な、スポーツ界をリードするなど(8大学)であった。

コーチ育成コースで身につける能力としては、コーチングスキル、指導力、指導法、実践能力(17大学)、科学的知識(10大学)、専門的知識、教養(10大学)、競技スキル、競技力(3大学)であり、コーチング科目で習得を目指す能力としては、次のように分類することができた。

分類	能力等
スキル、能力	コーチング、マネジメント(リスク、チーム)、問題解決、コミュニケーション、プレゼンテーション、論理的思考、観察力、洞察力
知識的要素	スポーツ科学、スポーツ心理学、法律、スポーツの意義・本質、コーチ哲学・理念
競技的要素	競技者育成法、競技力向上、技術力、戦術力
資質的要素	リーダーシップ、フォロワーシップ、スポーツマンシップ、フェアプレー精神、人間力、コーチのあり方心構え、役割、責任、適正、モラル、社会性
コーチングの質	実践的、基礎、高度、合理的
コーチングの対象	初心者、ジュニア、学校部活動、アスリート、トップアスリート、障害者、地域スポーツ、生涯スポーツ、健康分野

全体の傾向として、一般的なスポーツ科学の知識だけではなくコーチング実践力を兼ね備えるとともに、質の高い科学に裏づけされたコーチングスキルの獲得を目指していることがうかがえた。

国内の体育系大学の現地調査によるコーチ育成に関する分析として、ICCE から会長と専門研究員を招聘し、筑波大学と鹿屋体育大学へのインタビュー調査を行い、ICCE が示す ISCF に基づき、次のとおりの提案があった。

日本の体育系大学におけるスポーツ科学に関する学びは、高度かつ専門的であり、海外の事例と比較しても優れていると思われる。一方で、コーチングに関する価値観や哲学に関する科目が薄く感じられるので、これを必修化し、確実に学ぶ必要がある。また、コーチングは実際の現場で活かせるようになることが最も重要であり、そのためにも実践の機会を提供すべきである。また、各大学において、対人知識、自己理解知識が学ばれているか確認すべきである。

(4)海外におけるコーチ教育、コーチング現場の事例研究

海外におけるコーチ教育、コーチング現場の事例研究については、(独)日本スポーツ振興センターの研究調査から報告を受ける形で取りまとめた。

(独)日本スポーツ振興センターでは、国際コーチングエクセレンス評議会(以下、ICCE)との協力により調査を行い、特に、コーチング及びコーチ育成に関する国際動向の把握と国内の大学におけるコーチ育成に関する分析について情報提供を受けた。

【コーチング及びコーチ育成に関する国際動向の把握】

コーチング及びコーチ育成に関する国際動向の把握については、7月末から8月にかけて、英国スコットランドのグラスゴーで開催されたグローバル・コーチ・ハウスでの情報収集・意見交換、海外の大学(フィンランド、イギリス)へのインタビュー調査を行った。

・グローバル・コーチ・ハウスでの情報収集・意見交換

グローバル・コーチ・ハウスでは、コーチ養成の考え方やコーチの成長過程について、日本においても ICCE が策定した国際枠組み(以下、ISCF)に参考にすること。コーチの成長には学び

あいや振り返りが必要であり、参加型で刺激しあう場が重要であること。学び続ける姿勢、自己研鑽の重要性。コーチング内容(何のためのトレーニングで何の要素が向上するのか、など)について適切に説明できること。エビデンス・ベースのコーチングの重要性(これを身につけることで競技横断的な理解が容易になる)。障害者スポーツコーチや女性コーチは各国とも途上であること。女性コーチの育成にあたってはワークライフバランスが重要であること。コーチを育成するコーチ(コーチ・ディベロッパー)を育成することが重要であること。が確認された。

・海外大学のコーチ育成カリキュラム調査

海外大学のインタビューでは、体育教員養成プログラムを持つユヴァキュラス大学(フィンランド)、スポーツコーチング学位プログラムを持つハーガヘリア応用科学大学(フィンランド)、ベケット大学(イギリス)へのインタビューを行った。

まとめとしては、いずれの国においても伝統的・古典的な学びの方法が多いが、日本と同様に変革の時期に来ていること。労働環境の変化に伴い、スポーツ界の人材も変化が求められていること。知識を理解しているだけでなく、実際の現場で活用できることが重要であること。コーチング現場においては、対象者に応じてカスタマイズする必要があること。コーチとプレイヤーのニーズが合致しているか、ゴールまでの手法と成果の評価に共通理解が必要であること。対人知識、自己理解知識に関わる学びは実習の中で主体的に学ぶことが重要であること。コーチの能力評価の仕組みも重要であること。が確認された。

【スポーツ・コーチングに関する国際的枠組みとの関連】

ICCE が提示している「スポーツ・コーチングに関する国際的枠組み(ISCF)」では、「活動の指針となる価値観、理念および目標」をコーチングの前提条件に据えながら、コーチングの土台となる知識について、専門知識(競技に特化または関連した科目とその教え方)、対人知識(他者を理解する)、自己理解知識(自己認識と振り返り)の3つに分類し、これらを組み合わせながら継続的に活用することによって効果的なコーチングが可能になるとしている。本ワーキングの仮説では、コーチに求められる資質能力の中核に「①心構え」、その外延に「②人間力(対自己/対他者)」、「③スポーツ共通教養」などを据えているが、これらの多くは上記の「価値観、理念および目標」、「自己理解知識」、「対人知識」に該当すると考えられる。今後は、ICCE の枠組みも参照しながら、カテゴリーの妥当性や具体的な内容について検討していく必要がある。

また、ICCE は、コーチが効果的に役割を遂行するためには、前述の6つの職務領域に分類される実践的コンピテンス(括弧内)を身につけなければならないとしている。

これらの職務(コンピテンス)の責任のレベルについては、コーチの立場や職責、さらにはそれぞれの競技の特性を踏まえた重み付けが必要になるといえる。したがって、本ワーキングが想定している、全ての競技・領域および職責のコーチが学ぶべきカリキュラムの範囲および優先順位づけと、ISCF が提示しているコーチングの土台となる知識や職務的・実践的コンピテンスとをどのように摺り合わせていくかについては、本事業の検討内容全体を踏まえて総合的に判断する必要があるだろう。

2)各検討から導き出された成果

(1)グッドプレーヤー像、グッドコーチ像

ワーキングチームによる検証を通じて、グッドプレーヤー像(今後、日本スポーツ界として育成すべき人材)とグッドコーチ像(グッドプレーヤーを育成する担い手)は次のようにまとめることができた。将来的には、ここで示すグッドプレーヤー像とグッドコーチ像が日本スポーツ界における共通認識となることを目指していきたい。

グッドプレーヤー像(日本スポーツ界が育成すべき人物像)

人物像	キーワード
スポーツを愛し、その意義と価値を自覚し、尊重できる人	スポーツが好き、スポーツと意義と価値の理解
フェアプレーを誇りとし、自らの心に恥じない態度をとり行動ができる人	フェアプレー
何事に対しても、自ら考え、工夫し、行動できる人	自立、課題解決(創意工夫、実践力)
いかなる状況においても、前向きかつ直向きに取り組むことができる人	逆境・困難に打ち克つ力、ポジティブシンキング、真摯さ、継続性
社会の一員であることを自覚し、模範となる態度・行動が取れる人	社会の中の自己認識、社会規範・モラルの理解・遵守
優しさと思いやりを持ち、差別や偏見を持たない人	同情・共感、公平・公正さ
自分を支えるすべての人々(保護者、コーチ、仲間、審判、対戦相手など)を尊重し、感謝・信頼できる人	相互尊敬(リスペクト)、感謝・信頼
仲間を信じ、励ましあい、高めあうために協力・協働・協調できる人	チームプレー、協力・協働・協調

グッドコーチ像(グッドプレーヤーを育成する担い手)

人物像	キーワード
スポーツを愛し、その意義と価値を自覚し、尊重し、表現できる人	人が好き、スポーツが好き、スポーツと意義と価値の理解
グッドプレーヤーを育成することを通して、豊かなスポーツ文化の創造やスポーツの社会的価値を高めることができる人	プレーヤーやスポーツの未来に責任を持つ
プレーヤーの自立やパフォーマンスの向上を支援するために、常に自身を振り返りながら学び続けることができる人	課題解決、自立支援、プレーヤーのニーズ充足、卓越した専門知識(スポーツ教養含)、内省、継続した自己研鑽
いかなる状況においても、前向きかつ直向きに取り組みながら、プレーヤーと共に成長することができる人	逆境・困難に打ち克つ力、ポジティブシンキング、真摯さ、継続性、同情・共感、対象に合わせたコーチング
プレーヤーの生涯を通じた人間的成長を長期的視点で支援することができる人	プレーヤーズ・ファースト、プレーヤーのキャリア形成・人間的成長、中長期的視点
いかなる暴力やハラスメントも行使・容認せず、プレーヤーの権利や尊厳、人格を尊重し、公平に接することができる人	暴力根絶、相互尊敬(リスペクト)、公平・公正さ
プレーヤーが、社会の一員であることを自覚し、模範となる態度・行動をとれるよう導くことができる人	社会の中の自己認識、社会規範・モラルの理解・遵守、暴力根絶意識のプレーヤーへの伝達
プレーヤーやプレーヤーを支援する関係者(アントラージュ)が、お互いに感謝・信頼し合い、かつ協力・協働・協調できる環境をつくることできる人	社会との関係・環境構築、チームプレー、感謝・信頼、協力・協働・協調

(2)グッドコーチに求められる資質能力(思考・態度・行動・知識・技能)

コーチング現場においては、どのような対象者、どのような活動環境においても、なくてはならない、共通する資質能力がある。それを検証するために、各種文献の中からキーワードを抽出することで仮説設定を進め、グッドコーチの資質能力を思考(理念・哲学)、態度行動(人間力)、知識・技能(スポーツ知識・技能)に区分し、それぞれに求められる要素を抽出した。

ワーキングチームの検証を通じて導き出した結論としては、グッドコーチに求められる資質能力を以下の3つの分類により取りまとめた。

①思考(理念・哲学):自分自身のコーチングを形づくる中心にあるもの

あらゆる対象者にスポーツコーチングをする上で共通して必要となり、プレーヤーやスポーツの未来に責任を追う上で幹となるものであり、この理念・哲学を確実に修得しなければ、コーチングが不適切なものになってしまう。

②態度・行動(人間力):プレーヤーや社会との良好な関係を築くために必要な資質能力

「理念・哲学」を適切な形でアウトプットできるための能力であり、実際のコーチングを、適切な方法で表現するために必要となる資質能力である。ここには、自分自身のコーチングを見直したり、感情をコントロールしたり、課題に取り組んだりする場合に必要な資質能力(対自分)と、指導対象者やそれを取り巻く様々な関係者との信頼関係を構築するための資質能力(対他者)の2つがある。

③知識・技能(スポーツ知識・技能):スポーツ指導を行ううえで必要となるスポーツ科学の知識・技能

コーチング場面では、様々な対象が存在するが、あらゆるスポーツコーチングの場面で必要となる知識・技能(共通)と個々のコーチング現場別(競技別、年代別、レベル別、障害の有無など)において必要となる知識・技能(専門)の2つがある。

※人間力 内閣府:「人間力戦略研究会(平成15年)」の定義を援用

社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力

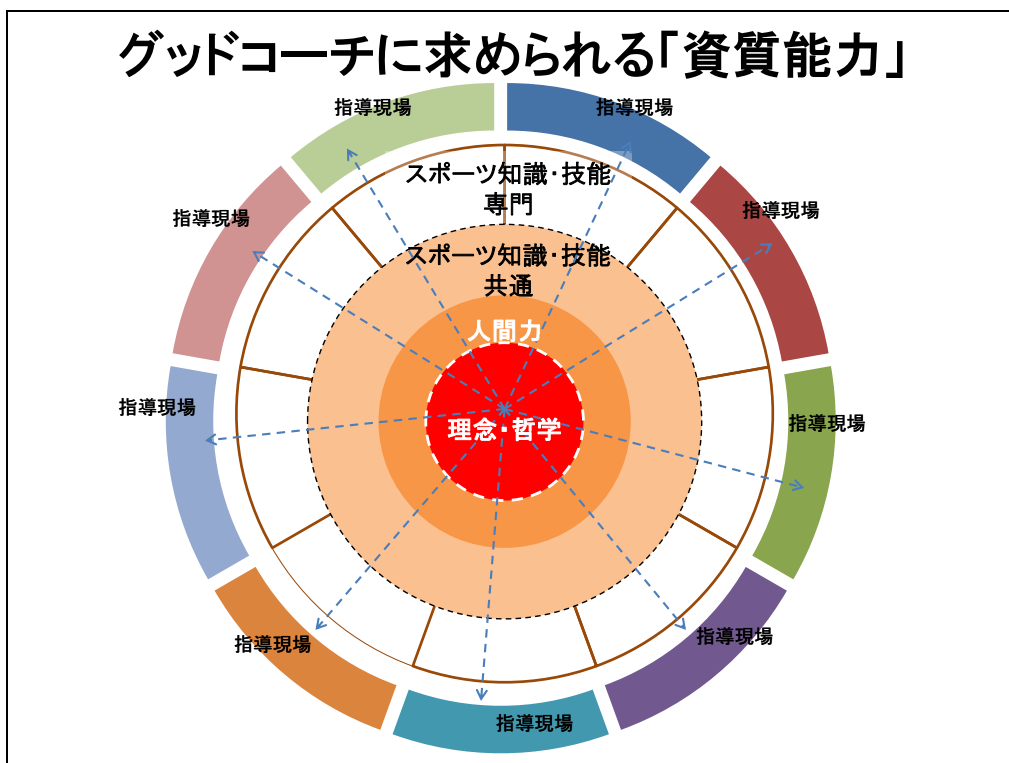
・知的能力的要素:論理的思考力・創造力

・社会・対人関係力的要素:コミュニケーションスキル・リーダーシップ・規範意識

・自己制御的要素:意欲・忍耐力・自分らしい生き方や成功を追及する力

思考 (理念・哲学)		スポーツの意義と価値の理解、コーチングの理念・哲学(人が好き、スポーツが好き、スポーツの意義と価値の理解、プレーヤーやスポーツの未来に責任を持つ、社会規範、スポーツの高潔性)
態度・行動 (人間力)	対自分	学び続ける姿勢(自己研鑽)、前向きな思考・行動、くじけない心、課題発見力、課題解決力、自己統制、内省、社会規範
	対他者 (人、社会)	基本的人権の尊重、相互理解、プレーヤーズ・ファースト、暴力・ハラスメントの根絶、コミュニケーションスキル、マネジメントスキル、目標設定、協力・協調・協働、長期的視点、関係構築力
知識・技能 スポーツ 知識・技能	共通	あらゆるコーチング現場に共通するスポーツ科学
	専門	個々のコーチング現場別(競技別、年代別、レベル別、障害の有無 など)に求められる専門知識・技能

なお、これらの資質能力をイメージ図にして表現すると、下図のようになる。自分自身のコーチングの指導理念や指導哲学となるものが中心にあり、その理念や哲学に基づいたコーチングをしっかりと態度・行動として表現するために必要なスキル、そして、すべてのコーチングに共通するスポーツ科学の知識技能、対象に応じた知識・技能が必要となった。また、実際のコーチングにおいては、コーチ自身の経験が加味されていくとなる。



この考え方は、ICCEが示すISCFの「コーチングの知識」とも共通するものと認識している。ただし、ワーキングチームから「コーチが効果的に役割を遂行するためには、ISCFが示す6つの職務領域に分類される実践的コンピテンスを身につけなければならないとしている。これらの職務(コンピテン)スの責任のレベルについては、コーチの立場や職責、さらにはそれぞれの競技の特性を踏まえた

重み付けが必要になるといえる。したがって、本ワーキングが想定している、全ての競技・領域および職責のコーチが学ぶべきカリキュラムの範囲および優先順位づけと、ISCF が提示しているコーチングの土台となる知識や職務的・実践的コンピテンスとをどのように摺り合わせていくかについては、本事業の検討内容全体を踏まえて総合的に判断する必要がある。」との指摘があるとおり、更なる検討が必要であることも忘れてはならない。

(3)モデル・コア・カリキュラムの骨子

本年度はモデル・コア・カリキュラム骨子までを成果として提案することを目標としてきた。骨子ということで、全体の枠組みとその中で特に重要となる部分(要点)を挙げることで取りまとめることとした。

まず、枠組みとしては、グッドコーチに求められる資質能力で示した①思考(理念・哲学):自分自身のコーチングを形作る中心にあるもの、②態度・行動(人間力):プレーヤーや社会との良好な関係を築くために必要な資質能力、③知識・技能(スポーツ知識・技能):スポーツ指導を行ううえで必要となるスポーツ科学の知識・技能により区分した。また、資質能力区分に基づき、カリキュラムを構成する科目における教育目標や到達目標に入るべきキーワードを選び出し、骨子とした。

資質能力区分		学ぶべき内容の例(教育目標や到達目標に入るべきキーワード例)
思考 (理念・哲学)		スポーツの意義と価値、スポーツ精神(スポーツマンシップ、フェアプレイ)、倫理観、規範意識、プレーヤーズ・ファースト、暴力・ハラスメント根絶、ガバナンス、インテグリティ、オリンピック・パラリンピック、アンチ・ドーピング
態度・行動 (人間力)	対自分	PDCA サイクル、観察学習、多様な思考法(複眼的思考、論理的思考、批判的思考)、課題発見・解決、セルフコントロール(メンタルタフネス、レジリエンス、タイムマネジメント)、ワークライフバランス
	対他者 (人、社会)	人権、リスクマネジメント、言語・非言語コミュニケーション(観察、積極的傾聴と質問、プレゼンテーション、ファシリテーション)、スポーツに関わる関係者(アントラージュ)との関係構築、プレーヤー・チームのマネジメント・教育(内発的動機づけ、目標設定、長期的視点、チームビルディング、プロモーション、デュアルキャリア)
知識・技能 (スポーツ 知識・技能)	共通	発育発達段階や技能レベルに応じた指導に関する知識・技能、ケガや障害の防止に関する知識・技能、特定のスポーツではなく競技横断的な知識・技能、スポーツ活動を円滑に進めるために必要な知識・技能、指導計画立案・実践・評価 (バイオメカニクス、生理学、解剖学、栄養学、医学、社会学、心理学、法学、哲学、倫理学、経営学、コーチング理論、アンチドーピング など)
	専門	競技特性・指導対象者特性に応じた知識・技能 (競技の歴史・規定・規則、戦術、競技レベル、志向、年代・性別・障害有無等に応じた指導法 他)

3)モデル・コア・カリキュラム作成後の導入策

委員会では、本事業を進めるにあたり、どのような展開で最終的なゴールまで到達させるかを関係者内での共通認識を明確にするために基本理念をまとめた。

その中で、作成後の展開として次の3つを掲げた。

- ①(公財)日本体育協会公認スポーツ指導者養成講習会共通科目カリキュラムについてもモデル・コア・カリキュラムに基づく内容に改訂する
- ②全国の体育大学や体育学部を有する大学・短期大学だけでなく、教員養成系大学、スポーツ系専門学校に学ぶ学生が卒業後の進路においてスポーツ指導の場(コーチングの場)に立った際、新しい時代にふさわしいコーチングができるよう、すべての学校で導入されることを目指す
- ③コーチに求められる基本的資質とモデル・コア・カリキュラムは、我が国スポーツ界全体におけるコーチ育成の共通認識として定着させる

そして、ここに掲げた展開策をもとにさらに具体的な導入策について検討し、大きく次の4つの目標を掲げることとした。

目標1:(公財)日本体育協会公認スポーツ指導者制度養成カリキュラムへの導入

本委託事業は、大学におけるコーチ育成過程において確実に習得すべきことが主題であるが、日本体育協会が制定している「公認スポーツ指導者制度」の養成講習会共通科目カリキュラムへ導入することも重要な取り組みである。

現在、日本体育協会では、大学・短期大学、専門学校、その他スポーツ関連団体が、スポーツ指導者養成カリキュラムと同等の教育課程を設定し、本会の審査を経て当該コースの承認を受けた場合、その承認を受けた学校等において当該教育課程を履修した者が、講習・試験の免除を受けることができるシステムを開設している。このシステムを活用して、大学等での導入を促進する。

目標2:全国体育系大学学長・学部長会加盟大学における導入

体育系大学学長・学部長会加盟の26校大学において、保健体育教員免許の取得が可能であり、また、コーチまたはコーチングというコース名を付した大学が18大学あった。このことから、体育系大学の学生の卒業後の進路においてコーチング現場に立つ可能性が高いことがわかる。

したがって、文部科学省及び日本体育協会が作成されたモデル・コア・カリキュラムを「コーチ育成のための基準カリキュラム」として推奨することにより、すべての学生が学ぶことを目指す。

目標3:教員養成系大学における導入

学校運動部活動は日本スポーツ界が世界に誇るシステムであり、これからも日本のスポーツを支えていく中心である。

平成26年に日本体育協会が中・高校の運動部活動の指導にあたる教員を対象に実施した調査では、「担当教科が保健体育教員以外で、現在指導している競技の経験がない」人が中学で45.9%、高校で40.9%という結果が出た。つまり、運動部活動を指導している半数近くの教員については、スポーツ指導法や競技別の専門的な指導方法について学ぶ機会に恵まれていないとも考

えられる。

10代の多感な時期のスポーツ活動は、生涯にわたってスポーツに親しみ楽しむ素養を作ると同時に、体力も競技力も大きく伸びる可能性を秘めた重要な時期であるという観点から、教員を目指す教員養成系の学生にも学校運動部活動におけるコーチにも適切な指導能力を身につけてもらうため、導入を促していきたい。

目標4:教員現職研修等における導入

目標3と同じように、すでに教員として運動部活動の指導にあっている人についても、ご自身の専門的指導力不足は大きな課題となっている。また、部活動における部員への暴力やハラスメントの原因も指導力不足と考えることができる。

このため、教員の現職研修(初任者研修、10年研修)や高体連、中体連が実施する、運動部活動コーチを対象とした研修事業等において、カリキュラムの全部又は一部を実施することを目指す。

【モデル・コア・カリキュラム導入策を実現させるにあたり必要な取り組み】

委員会としては、モデル・コア・カリキュラム作成後の導入策を確実に実現させるためには、

- ① モデル・コア・カリキュラムを構成する各科目教育内容について、各専門領域の学術的な裏づけを得る必要がある。
- ② 体育系大学のすべての学生が学ぶことができるよう、体育系大学学長・学部長会にモデル・コア・カリキュラムの内容について理解を深めてもらう必要がある。

以上のことから、日本体育学会及び体育系大学学長・学部長会に協力を求め、具体的な協議を進めていきたい。

また、モデル・コア・カリキュラムを日本スポーツ界全体で共有するため、今後もコーチング推進コンソーシアムを構成する組織・団体として下記の3つのことに取組みたい。

- ・「グッドプレーヤー像、グッドコーチ像」を我が国のスポーツ界のスタンダードとする
- ・「モデル・コア・カリキュラム」をコーチ育成のための基準カリキュラムとして認定(推奨)する
- ・スポーツの指導は「競技者やスポーツそのものの未来に責任を負っている」ことに鑑み、「スポーツの指導は対象者に応じた適切な資格を有する者があたるべき」ことを明確にする

【その他】

今後、モデル・コア・カリキュラムが各体育系大学や教員養成系大学、スポーツ系専門学校に導入されたとしても、このカリキュラムをどう学ぶかが重要で、座学のみならず体験的かつ実践的な学習が欠かせないと考えている。

委員会として、示した基本理念の「考え方」では、『モデル・コア・カリキュラムとは、教育内容・学習のねらい・到達目標・時間数を提示するものであり、科目名や教育手法については各大学が目指す人材育成に基づくカリキュラムに委ねることとする』としているが、学び方＝教育手法については今後の検討課題の一つである。

Ⅲ. 平成26年度の成果を踏まえた今後のスケジュール

平成26年度については、ほぼスケジュールどおりに進めることができた。

平成27年度も着実に前進させていくこととする。

平成27年度は「モデル・コア・カリキュラム」完成の年にあたり、スケジュールとしては、大きく3段階に分けて作業を進めることとする。3段階とは、「カリキュラム(学習のねらい・到達目標・時間数)の検討」、「カリキュラム案の検証」、「カリキュラム完成」のステップを踏むこととする。

1. カリキュラム（教育内容・学習のねらい・到達目標・時間数）の検討（4月～8月）

① 科目の整理

ワーキングチームにて、モデル・コア・カリキュラム骨子のキーワードに基づき、カリキュラムの具体的な内容を分類・整理する。

② 教育目標の検討

ワーキングチームメンバーで、各科目の教育目標(教育内容、学習のねらい、到達目標)を検討する。

なお、教育目標の作成にあたっては、専門分野に関する知識が求められるため、日本体育学界や体育系大学学長・学部長会との連携しながら、必要に応じて協力者を選任し検討を依頼する。

③ カリキュラムの体系化と学び方の検討

各科目の教育目標がまとめ次第、必要時間数を定めカリキュラムとして体系化するとともに学び方(講義形式、実習形式など)について検討する。

④ 素案まとめ

カリキュラム素案としてまとめる。

2. カリキュラム案の検証（9月～11月）

① アンケート調査による検証

体育系大学学長・学部長会加盟校を対象にオンラインによるアンケート調査を実施し、カリキュラムの確認と導入可能性について検討する。

② ヒアリング調査による検証

平成26年度のヒアリング対象となったコーチ及び人材育成に関する有識者に協力いただき、ラウンドテーブルディスカッション形式でヒアリング調査を実施し、カリキュラムについて検討する。

③ トライアル講習(授業)による検証

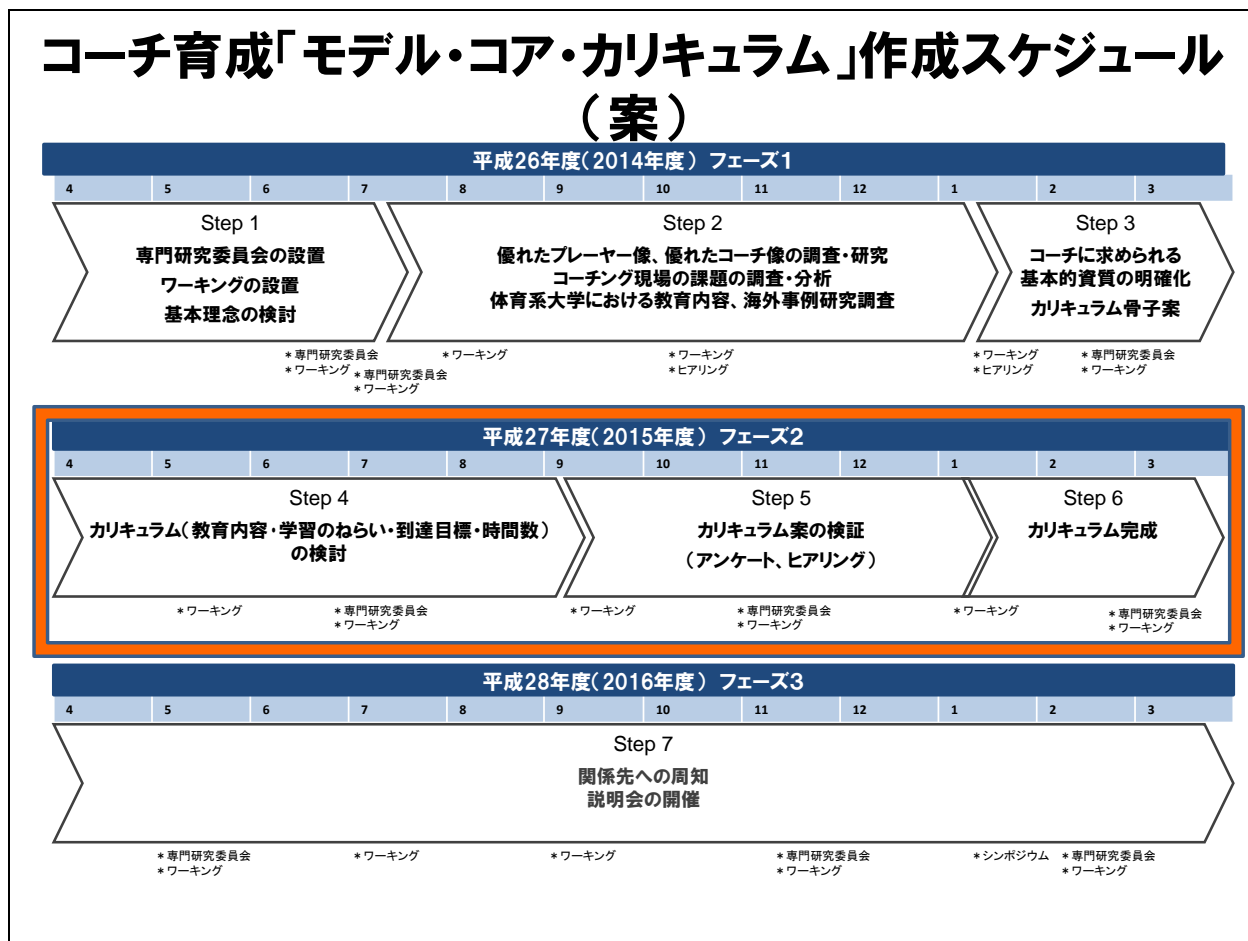
ワーキングチームメンバーが所属する体育系大学の協力を得て、カリキュラム骨子のうち、「思考(理念・哲学)」「態度・行動(人間力)」にあたる科目を中心にトライアル講習(授業)を実施し、学び方について検討する。

④ 日本体育学会による検証

日本体育学会の協力を得て、各専門領域の立場から、各科目の内容(学習のねらい・到達目標)及び必要時間数について検討する。

3. カリキュラム完成

検証結果を踏まえ、「モデル・コア・カリキュラム」最終案をとりまとめる。



おわりに

平成 26 年度の取り組みとして、「グッドプレーヤー像」、「グッドコーチ像」を明らかにし、「モデル・コア・カリキュラムの骨子」を作成することができた。

グッドプレーヤーとは、まさに、これからの我が国のスポーツ界が育成すべき人材像であり、このような人材をスポーツ界から数多く輩出することが、社会貢献につながると信じている。

スポーツを経験すれば、「人間力」が自然と身につくであろうとの思い込みは捨てて、スポーツを通じて、意図的、計画的、継続的に「グッドプレーヤー」を育成していくことを目指していくことが必要である。

そのためにも、コーチの資質能力を高めていくことは重要なことである。

今後、コーチがコーチングの現場に立つときに、迷わず、ためらわず、自信を持ってコーチングができるために必要な知識・技能、実践力が身につくモデル・コア・カリキュラムを構築していかなければならない。

この作業が意義深く、価値ある未来へのチャレンジであることを肝に銘じて、実現に向けて、取り組んでいく。

参考

1. コーチング・イノベーション推進事業 モデル・コア・カリキュラム作成事業委員名簿

(平成27年3月現在)

〈専門研究委員会〉

所属	役職	氏名
日本女子体育大学	学長	石崎 朔子
東海大学	体育学部学部長	今村 修
中京大学	スポーツ科学部学部長	梅村 義久
大東文化大学	スポーツ・健康科学部学部長	遠藤 俊郎
東京女子体育大学	学長	加茂 佳子
日本体育大学	体育学部学部長	具志堅 幸司
筑波大学	体育専門学群学群長	真田 久
大阪体育大学	体育学部学部長	福田 芳則
国立スポーツ科学センター	スポーツ科学研究部長 主任研究員	平野 裕一
虎ノ門協同法律事務所 / 日本スポーツ法学会	弁護士/会長	望月 浩一郎
日本サッカー協会	技術委員会委員長	山口 隆文

※座長

〈ワーキングチーム〉

所属	役職	氏名
日本体育大学	准教授	伊藤 雅充
日本オリンピック委員会	ナショナルコーチアカデミー アシスタントディレクター	伊藤 リナ
筑波大学	教授	関子 浩二
日本障がい者スポーツ協会	スポーツ推進部 指導者育成課長補佐	滝澤 幸孝
大阪体育大学	教授	土屋 裕睦
国立スポーツ科学センター	研究員	半谷 美夏
早稲田大学	准教授	深見 英一郎
日本体育協会	スポーツ科学研究室室長代理	森丘 保典
立命館大学	准教授	山浦 一保
筑波大学	助教	山田 永子
FCゴール	チーフディレクター	吉田 昂司

※委員長

2. 会議開催経過(日程、出席者等)

第1回『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成』専門研究委員会

日程:平成26年6月20日(金)15時～17時 本会1階特別室

議題:

- (1) 本事業の趣旨説明
- (2) 基本理念の検討
- (3) ワーキングチームへの申し送り事項検討

出席者:

委員 平野裕一、石崎朔子、今村 修、梅村 義久、遠藤 俊郎、加茂佳子、真田久、

福田 芳則、望月浩一郎、山口 隆文 10名

ワーキング委員 土屋 裕睦 1名

オブザーバー 文部科学省 関専門官、那須野係長、日本オリンピック委員会 相馬 3名

事務局 岡部長、吉原課長補佐、牧野 3名

第2回『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成』専門研究委員会

日程:平成26年7月10日(木)13時～15時 本会2階理事・監事室

議題:

- (1) コーチング推進コンソーシアム(7/2)概要報告
- (2) 基本理念の検討
- (3) ワーキングチームへの申し送り事項検討

出席者:

委員 平野 裕一、石崎 朔子、今村 修、梅村 義久、遠藤 俊郎、加茂 佳子、具志堅 幸司、

福田 芳則、望月 浩一郎 氏 9名

ワーキング委員 森丘 保典 1名

オブザーバー 文部科学省 那須野係長 1名

事務局 岡部長、吉原課長補佐、牧野 3名

第3回『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成』専門研究委員会

日程:平成27年3月3日(火)10:00～12:00 理事・監事室

議題:

- (1) 平成26年度モデル・コア・カリキュラム作成事業 成果について
- (2) 作成後の活用策案について

出席者:

委員 平野 裕一、石崎 朔子、今村 修、梅村 義久、遠藤 俊郎、加茂 佳子、具志堅 幸司、

真田久、望月 浩一郎 9名

ワーキング委員 土屋 裕睦、森丘保典 2名

オブザーバー 文部科学省 森岡スポーツ振興課長、関専門官、那須野係長、

事務局:岡部長、吉原課長代理、牧野 3名

第1回『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成』ワーキングチーム会議

日程:平成26年6月27日(金)13:00~17:00 本会1階 101会議室

議題:

- (1) 本事業の趣旨について
- (2) 専門研究委員会からの申し送り事項の検討
- (3) コーチに求められる基本的資質について
- (4) ワーキングでの作業内容及び役割分担について

出席者:

ワーキング委員 土屋裕睦、伊藤リナ、岡子浩二、滝澤幸孝、半谷美夏、深見英一郎、
森丘保典、山浦一保、吉田昂司 9名

オブザーバー 文部科学省 関専門官 1名

事務局 岡部長、吉原課長補佐、牧野 3名

第2回『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成』ワーキングチーム会議

日程:平成26年7月8日(火)15:00~19:00 本会1階 特別室

議題:

- (1) 本事業の趣旨について
- (2) 専門研究委員会からの申し送り事項の検討
- (3) コーチに求められる基本的資質について
- (4) ワーキングでの作業内容及び役割分担について

出席者:

ワーキング委員 土屋裕睦、伊藤雅充、伊藤リナ、岡子浩二、滝澤幸孝、森丘保典、
山田永子 7名

オブザーバー 文部科学省 関専門官、那須野係長 2名

事務局 岡部長、吉原課長補佐、牧野 3名

第3回『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成』ワーキングチーム会議

日程:平成26年8月6日(水)15:00~19:00 本会 理事・監事会議室

議題:

- (1) コーチに求められる基本的資質について
- (2) ワーキングでの作業内容及び役割分担について

出席者:

ワーキング委員 土屋裕睦、伊藤雅充、伊藤リナ、滝澤幸孝、半谷美夏、深見英一郎、
森丘保典、山浦一保 8名

オブザーバー 文部科学省 関専門官、那須野係長、JOC 相馬氏 3名

事務局:岡部長、吉原課長補佐、牧野 3名

第4回『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成』ワーキングチーム会議

日程:平成26年12月20日(土)15:00~19:00 本会 理事・監事室

議題:

- (1) コーチに求められる基本的資質について
- (2) 報告書について

出席者:

ワーキング委員 土屋裕睦、伊藤雅充、滝澤幸孝、半谷美夏、深見英一郎、森丘保典、
吉田昂司 7名

オブザーバー 文部科学省 那須野係長、JOC 相馬氏、JSC 久保田氏 3名
事務局 岡部長、牧野 2名

第5回『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成』ワーキングチーム会議

日程:平成27年2月18日(水)13:00~17:00 505 会議室

議題:報告書について

出席者:

ワーキング委員 滝澤幸孝、土屋裕睦、深見英一郎、森丘保典、山浦一保 5名

オブザーバー 文部科学省 関専門官、JSC 久保田氏 2名

事務局 岡部長、吉原課長代理、牧野 3名

現在のコーチング現場における課題の確認チーム 会議

日程:平成26年9月8日(月)14:00~16:30(予定) 本会 第一役員会議室

議題

- (1) 調査対象現場について
- (2) 調査内容、質問項目について

出席者:

ワーキング委員 伊藤リナ、滝澤幸孝、山浦一保、山田永子、吉田昂司

事務局:吉原課長補佐、牧野 2名

グッドプレーヤー像、コーチ像に関するアンケート調査作業会議

日程:平成26年10月20日(月)13:30~15:30 本会 特別室

議題:

- (1) アンケート調査の実施概要について
- (2) オンラインアンケートの実施方法について
- (3) 調査票によるアンケートの入力作業について
- (4) 調査結果の集計・分析方法について
- (5) 報告書への掲載イメージの共有について

出席者:

ワーキング委員:伊藤雅充、深水英一郎 2名

事務局:岡部長、牧野 2名

『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成』ワーキング各チームのまとめ検討会議

日程：平成 27 年 1 月 23 日(金) 13:00－18:30

(13:00－15:00 本会第一役員会議室、15:00～18:30 505 会議室)

議題：

- (1) モデル・コア・カリキュラム作成事業報告書について(目次、スケジュール確認)
- (2) 各チームにおけるまとめの方向性について

出席者：

13:00～15:00 A チーム会議 土屋裕睦、伊藤雅充、深見英一郎、森丘保典

15:00～16:30 D チーム会議 土屋裕睦、伊藤雅充、関子浩二、深見英一郎、山浦一保

16:30～18:30 B チーム会議 土屋裕睦、山浦一保、伊藤リナ、滝澤幸孝、吉田昂司

オブザーバー 文部科学省 関専門官、那須野係長

事務局 岡部長、吉原課長代理、牧野 3 名

平成 26 年度コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成事業報告書

発行／公益財団法人 日本体育協会

〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1

URL:<http://www.japan-sports.or.jp>

印刷:ホクエツ印刷株式会社

平成 27 年 3 月 31 日発行

本掲載内容の無断転載を禁じます

平成 26 年度文部科学省委託事業

【コーチング・イノベーション推進事業】